# 増補改正俳諧歳時記栞草 一

へ5
4307
1

国立国会図書館蔵書
請求番号 へ5
4307
1

# 俳諧歳時記栞草

仮名文字遣改正

全五冊

伝写出板

三書堂梓

俳諧歳時記栞草序

俳諧栞草歳時記ハ古より志て活
法の妙なるよりそこれを曲亭主人
其年ごとに曲亭主人
其編る栞時記ハ神祭佛
事等の年ごとに改めやすき
註したれバそうひ学の階
梯ともいつべくおそるべ
からざるものなり

むつ田をこ
ふのそ
ふるそ
春や
渡り
まつ
中く
る妹
素乳三年
戊寅月

藍字
青藍

# 俳諧の字義

史記滑稽傳 注ニ姚察云滑稽猶ニ俳諧一也、言ニ
諧詼滑利其知計疾出故云滑稽也、〇青
藍云古今集ニ誹諧とあるより、誹と俳の
議論諸抄ふそえて一決をぐとし、古をぐ
古今集打聞ふ今の本ふ誹諧とあるハ写し
誤まるあり、草の手ふく俳と俳のまぎらは
るをおのそそ、後ふさるくいよいよぐ
事ふりと、真淵翁の考へのくの如し 正字
通誹、敷尾切 音斐 説文ニ謗也 云俳、鋪埋切 音排 俳優雑
戯也、云 同義ふ
隋書ニ侯白字ハ君素、有捷才為ニ儒林郎一通俗
不待ニ威儀一好為ニ誹諧雑説一、まと世説新語補の
注ふと誹諧とあるをバいよいよくい俳と誹と通
ぜーかのるべーとそる、馬琴翁の説をそ

故横山有策氏寄贈 昭和四年五月 全五冊

ろ〳〵、世説の本文ゟ侯白好俳謔（コウハクコウハイギャク）とうき、開巻一笑七之巻ゟ引そるゟも、俳謔（ハイギャク）とあるゟ、誹（ヒ）の誤（あやま）りもることを徴（もと）し、支考が十論ゟ芭蕉家の書法ゟそ、偏（ひとへ）に俳諧を用ふべ〳〵といつるも擾（ようらん）あり

## 俳諧之連歌権輿（ごんよ）

詩家ゟ俳諧体あるゟ傚（まね）ひて、和哥ゟ俳諧体とゝのへ、はゝきゟ俳諧体あるゟ倣（なら）ひて連哥ゟ俳諧体あるゟ、皆之そもゝ〳〵俳諧連哥のそもゝ〳〵ゟ引出ゟるゟ、貫之ことゟ古今集雑体連哥之部俳諧といつるゟ奥山ゟ船こぐ音やきこゆらん（苅玖波集）といつるゟ、貫之ことゟ続て、あしる木の実やうきゟるらん又あやめ〳〵ゟ膝（ひざ）より上のきぬるゟ（同上）尤匂連哥といつるゟ黒男黒



戸のくゟゟ音まさり、堀川院御製云俳諧十論文明の頃ゟん山崇宗鑑法師ゟ、其世ゟ俳諧の名あるよゟ、守武望一ゟそゝとゝ学びて、百韻とつゞけ千句とつらね、貞徳貞室ゟ宗匠の名あり〳〵、唯俳諧の言語をつゞけら〳〵ゟ出し〳〵ゟ貞室ゟゆ〳〵芳野山の花を詠じられ、つく〳〵とぞふり花のようの山貞室隅田川の鳥ゟ吟じて、いざのれ（いざ）ゟ都鳥貞室其句ゟ和歌の姿情（すがた）ゟ乱（みだ）へず、今の俳諧の根さゝとやいふん、其のち難波の宗因ゟ武城ゟ檀林（だんりん）の額（がく）うちく、俳諧の涅槃（ねはん）ゟ破（やぶ）ることゟど、耳ゟ言詰のをりゝを得て眼ゟ姿情のさび〳〵さをうごゝ云

青藍按ずるゟ貞風の涅槃（ねはん）といふ事ゟ

五畿内ふるもうつもり雪や川めと飯（ごき）五器と

風の眼ゟ姿のさび〳〵ゟをゝとゝゟ又檀林

子木も紅葉しゟふりゟ唐ぐ〳〵」といふ

例の輕口をさ〳〵てらつる物なり、

葛の松原　元禄五年印本文考攷、芭蕉庵の叟、一日嗒焉としてうめく、曰風雅の世ふ行を見ること、なんぢハ片雲の風ぅ臨めるごとをし、一囲ハ皃狗とあり、一囲を白衣となりて、ふところ風ふくめる處をちら〳〵ぞうならぞ中間の一理あるべしとそ、春を武江の北ふ閉こもりて、雨靜み〳〵く鳩の声ふのく、風やちら〳〵く花の落る支かそ〳〵、弥生をあざりをしきこころもあり〳〵、蛙の水ふ落る音ふぞ〳〵あらぬそ、言外の風情この筋ふうつのひて、蛙飛こむ水の音ととつる七五を、得ぬつくり〳〵、晋子う傍うらく山吹とらふ五文字をかうむら〳〵をんうやよをぞ待るふ、唯古池とをさこまりぬ、云云此句うじ自己の眼をひらきさるまひ、正風の一派ひろまりくるとぞ、

# 俳諧の大意

俳諧の名ハ史記の滑稽傳より古今集うむじまり、連哥ふうつりてより、宗鑑をそゝひ、守武と学び、俳諧の詞ハひろまりくれど、一座の興のみひ捨みてて、今の俳諧の姿情ふあらぬぞ、且俳諧の心を傳へくる人ものきさ故う、芭蕉の翁俳諧よ古人ふ〳〵、とふことをと、ぬそのふ門人ふさ〳〵やきて、家訓の秘文といあせりくるとぞ、その俳諧の心とハ、虚実の自在より、世間の理窟をなをして、風雅ふ遊ぶをらふありくるとぞ、さて俳諧う三条あり、世情の人和ハ、五倫の常法ふてをの〳〵きを俳諧と名とくるごく、ちべしきハ風雅の体ふもつる羅綾とうざるとも、薦一枚のさびをまもれ

を口ふ八珍の菓肴とつらぬるを、一瓢の飲
の楽をねもひ、心ろ世上の變をもりて、笑言
ふ耳を遊ばしむる、俳諧自在の人とらふべし、
こもらのことわりをとらきまつらく、ものく俳諧
ふ遊ふ時ハ、産を破ろ業を怠るといふる、放
逸のうき名をまく、ものく世法の一助も
るべし、



## 凡例

○世ふ俳諧詞寄の書あり、しかれども、註釋全らざる
故ふ初学の人時ふ臨んで惑ふ支あり、故ふ曲亭
馬琴翁先ごろものらすら俳諧歳時記ふおゐて
増補をなして其見安からん為ふ四季の詞の
頭字を、いろは四十七字ふ部をわろち、註釈と
くくつ席上の便りとそなりぬ、

○かうかう　ちゃう　てう　ちゃう　てう　ちゃう　て

路おいさゝうそひきてうゆるも、けだべし、
○引書ハ時代の新古よりらぞ只初学の解一ふ安き
を抄出も、
○近世の俳書ふ出せる、正しくらぬ詞ハ悉く省きつ、
○淡雪と春〳〵、翡翠冷麦と夏〳〵、拈尾花木兎
鶏、尾越の鴨、冬瓜介鶏の類を冬と定めるる、も
〳〵蕉門の式おふ〳〵いて、部とゝろちさまゞハ増山
の井ホの古式ふ因て編る詞寄とハ大ふろひる
多一されバ春の部ふ索てもれそうと思ふ詞ハ、
夏秋冬の部とゝづめゝるべし、
○近世の詞寄ふ新ふ載せる詞もくあらぞ、さる
を思ひ足らぎ〳〵てゆ〳〵ゝるると、又過ちてゆらし
る詞あり、そハ追加の部ふらハゝゝるべひ
うるぐし、



# 増補俳諧歳時記栞草

春之部 曲亭主人纂輯
藍亭青藍増補

## 春

漢書律暦志 少陽者東方、東動也、陽
氣動物於時為春、春蠢也物蠢生迺
動運、日行東一ゐ、

**太一皞** 帝 禮月令 註太皞、
陸謂之春、
芒少一皞氏子曰重木官之聖神、継天立極
生有功一徳於民一故後王於春祀之、四一時之
帝與神皆此、
義下效之、

**勾一芒** 神 月令 其帝太皞、
其神句芒、古文

**蒼一天** 春の天をゝ、釈名氣
始発色蒼一ゝ也、

**東一君** 郊祀

記 晋巫
祠東君、

**青一陽** 爾雅 春為青陽、

**韶光** 漢律暦志
春の景云一韶美也、

## 正月

夏ハ寅を以正月とすること人正ゝ云商ハ丑
を以正月と守ことを地正ゝ云周ハ子を以正

月とするを天正と云 字彙正字本音去声音政云至秦始皇諱政改為平声音征後生至今猶之 **睦月** 世諺問答正月をむつき人をむつびむつぶるゝをもつて此月をむつきと名づけるをもて照合むつまじきと 左傳 春王正月、周正月也 **太簇** 律 月令 正月律中太簇 高誘曰簇簇也、言陰衰陽発萬物簇地而生 **立春** 月令廣義 周天王衡六問云、太寒後十五日、斗柄建艮為立春、正月節、立始也、建也、春充始至、故為之立也 **雨水** 同上 立春後十五日斗指寅為雨水、正月中、雨水中気雪散為水也 **孟春** 元帝纂要 正月為孟春 **陬月** 潜確類書 正月為陬 寅位之月故曰孟陬 **夏正** 月令 廣義 大禹以金徳王都安邑國号夏仍有虞以建寅之月為歳首故謂夏正 **上春**



元帝纂要 詩 初春亦同 **太郎月** 望水曰人の子の父ふるれるを次帝とゝふなとて一字の訳もまるゆゑなり、太帝の名あるゆゑなり **初空月** 蔵玉雪ハあぐたらもはさるゆゑなり **後鳥羽院** **霞初月** 同上 けぶるやうなるの雪のそら名斗や雪あるの月空家 **初春月** 同上 雪ふる初春の月の称 **家隆** **早緑月** 蔵玉 おそめ出ゞ **年端月** 蔓傳抄 拙もさゝやかなる小松ふるの貫之 其月名もめづらしくやさしくゝゝ社 **暮新月** 同上 ふるとしの月を改るはじめなるゆゑ **二月** 潜確類書 仲春者日月會於降婁而斗建卯之辰也 **衣更着** 與儀抄 正月ハのどかなりしを此月ハ次第に寒氣ゆるみ衣を更きるゆゑ **夾鐘**

律 月令 律中夾鐘 高誘註 萬物去陰夾陽聚地而生 驚蟄 節 月令 蟄虫咸動啓戶始出 註謂始穿其穴而出也 春分 中 月令廣義 驚蟄後十五日斗建卯為春分二月中分半也當九十日半也故為之分 夏冬不言分 仲春 元 帝 纂要 二月曰仲春 陽中 月令廣義 曆志云春陽中萬物以生 如 月、令 月 纂要 二月為仲春又曰如月又曰令月日在營室 梅 見月 蔵王 風の情と称ふるこの称 有家小草 生月 同上 生月まちそるるけふろあさ〜小そ〜の系 顕昭 初花月 未考 中和の節 朝日○唐の徳宗の時上巳九日を加へ三節とす 三月 潜確類書 李春者日月會于大梁而斗建辰之辰也 弥生



奥儀抄 此月をやよひとそ云ふ草木のこの月よ〜生ひそへばやおひ月と云をやよひとそ云 姑洗 律 月令 三月、律中姑洗 高誘註曰姑故洗新也是月陽氣発生去故就新 清明 節 月令廣義 孝經緯云清明三月節万物至此潔齊而清明矣 穀雨 中 同上 三月中清明後十五日斗建辰為穀雨雨生百穀清淨明潔也 季春 九 末 字彙 月曰季月 竹秋 廣韻 蘭秋七月也 病月 玉燭宝典 三月為病月病音丙亦曰嘉月 嘉月 同上 上 禊月 張衡南都賦 暮春之禊元巳之辰方軌齊轍掇於陽濱 櫻月 蔵王 うすくれなゐの色の山のさ 定家 花見月 同上 花をもとめ〜む 後鳥羽院 春

惜月 同上 救あるべき方をとおもひつゞけられ

くれゆくころの雲を見つゝ月 家隆

## 正月

### 院拜禮 元日 大府記

刻諸卿以下參集次、無晝御座庇御簾内次御出、直衣裝束也次關白前、太政大臣、右大臣、并大納言、中納言、參議以上一列庭中、次殿上四位以下、別當判官代等一列、拜舞了之後、從上簀次第退 記畧

### 嚴島祭 嚴島記

下亥 地の御前に藝州安藝郡まであつまる事ふ神祭おこなふ近國より衆船をあつめ恭敬す、この祭は三月下の亥日より三月初の申日迄十日の間、祝師嚴島の上卿齋所へ入こもり潔齋す、國府の奉幣使社家ふ赤日嚴島へ渡海す、夜半ふ至て七度半の使あり 道芝記

### 居籠 九日

### 夷祭 十日 攝州西の宮

太神宮の祭し、村民九日の朝より夜ふ至て戸を開て出ずまた居籠と云、一說ニ

玄ふ神前ふこもり男ふ家ふ居るとも云、 雍州府志 云 居籠祭ふ正月初の申日より四日の間、或ふ申日より亥日に至て神事畢る、傳ふ此間惡鬼遊行す、ことをおこすことの崇あり故ふ兒女及六畜を他村ふつれ、男子家ふこもり門戸開闔の音を禁じ聲を揚ず、民間居籠と云、亥日旅所ふ神事あり、社司戸帳と以て口鼻を覆ひ人氣をさけ神輿ふ觸ず、榊と持さき徒行す、又五穀の雜種を各一器ふ盛り又農具と村民お携さ供奉す、神輿旅所ふ迄りて後諸民大ふいこよ〳〵と呼ぶ是居籠の式故 攝陽群談 云 毎年正月九日蛭兒尊廣田の社ふ臨幸あり、神の容相異ると以人倫の見んことを恥るよの諺とあり、村民戸を閉て外ふ出ず門松を逆ふさして居籠と云、明旦諸家各戸を開て恭詣す、世俗十日夷とよ〇諺云十日ふ恭詣すると十日夷とよ、此神ハ聾ふ在ますゆへそ、恭諸の人社の後の羽目板を敲く、街そ來花代袋蜈蚣小判ざくざくぴそ笹のうく結つけ、又賣る処の烏帽子と買さ頭ふ戴き往來の人と笑はせ興ずるそ〇商家ふ此日大ふ宴を設け客をむかへ饗應す、江戸ふてハ二月廿日夷祭を初ふ寢と稻と和訓同じきを故ふ祝詞と寢積 寢舉 寢積も舉も又稻の縁語ふ

雑談抄 云寝卧と常のごとく唱ふハ癇疾をふまざるなり 俗と書すと来ざすと云ふ同じ

葦索 くの部画鶏卢帖 芋頭、芋がらを頭と唱ふハ例の祝語ゝ玄蕃頭芋頭ちごめがとをかぶるべきを巳剋ハ多子の義と取るゝ

垣磯辺の凝かへる 字彙ゝ凝冰堅也○とけし氷の再び結びうる意ゝ沍のごとし同じ

飯鮹 和漢三才圖会ゝ云ふ九五六すぎ、其頭鳥の卵のごとく頭中ゝ白肉ゝ煮て食ベ其肉粒むゝ飯のごとく故ゝ飯鮹と名く、播州高砂の産飯多し

兼三春物 遊糸 荘子逍遙篇云野馬塵埃也生物以息吹者也、希逸註云野馬遊糸也水氣也○杜詩、落花遊糸白日閑 紙鳶 かげろふ糸遊一物ゝ糸遊八異名ゝ 契沖雑記 紙老鴟風巾ともお同じ、漢高祖陳豨を征する時未央宮の遠近と量る為ゝ韓信造ると



続博物志 云今紙鳶ゝ糸と引て止るハ小児を守口を張てこれを仰ぎ視せしめて、小児の内熱をとるさせんが為ゝ本邦ゝおゐて亦小児さんゝ乗ぶ小児ゝおゐて益ありとふ

俳諧歳時記 云烏賊と名づけるゝ後のつゐや其形の烏賊ゝ似たるゝの名ゝ江戸の俗章魚と云ハ烏賊ゝ對ゝその名ゝ伊豆すう三河迄の間八五月止る、其製三河ゟ巧ゝ

## 三月

### 虎杖

藤頌無經 虎杖三月生苗莖如竹笋状上有赤斑點初生分枝子葉似小杏葉七月開花九月結実○時珍曰杖言其莖虎言其斑

和名抄 虎杖 伊太止里

枕草子 いとうハとらのつゐとをさをさつまのことらしうあらず 年浪草 小拳ゟ説ゞくおゐ侍る

後拾遺集 ゟ三月ゞうゟ暇の章とゝゝ侍る

藤原義孝 那ゞくゝ礼ハやうゝの月のもゝるまでまぐうらうゝさゝらゞつゝあれ、

童蒙抄 八雲御抄 などゟハさいたつゟい春の若草とゝゝも、

大和本草 樹彼岸 櫻と同ゞ枝長ゞ糸

糸櫻 云ふの部さゝくつまの葉とゝ

の如くみゝ下を塞る花うゑ 銀杏花 歐陽修 詩 二月

彼岸ざゝゝゝ花稍おそ〳〵 開花成簇青白色、二更開
花隨即落人罕見之 下畧

## 三月 石山祭 三日

江州石山寺八真言宗うて御室ゟ屬す、本尊如
意輪觀音、聖武帝の勅願良弁の開基ニ、今日の祭ハ石山寺
の鎮守三十八所明神 伽藍境内 新宮大明神 寺辺の村ゟの 近津尾八幡宮 国ゟ
ありの祭みゝ〳〵古式ハ朔日〳〵三日ゟ至るゟゞ朔日三十八所
明神の拜殿ゟおいて神祭あり、神輿東寺崎へ渡御、一山の衆徒
出仕、三日新宮ニおいて仁王八講を修す、三十八所ゟおいて神輿ゟ
饌を供ず晩景ニ及て能藝あり、長命太夫ことゝもむ獅子
舞、脊無狂言と云、衆徒各公文所ゟ出仕す、三日神輿渡御
龍蔵権現ゟおいて獅子舞献供あり、其間馬場ゟおいて競
馬と催す駿馬并ニ徒者と貫首よゝ出す、其両側ゟ遨法師
列立す、各花笠をつゞゝゝ太刀を佩大口ゝゝて、五人或ハ十人
左右ニ執綱〳〵、競馬の勝負と決す、勝方ゟ白布と給ひ又獅
子舞ふを禄ニ計と賜ふ、今ハ古来の祭式退廃す、朔日ゟ新
宮八幡の両神輿新宮の拜殿ゟ出御、神樂あり、三日両神輿



渡御、三十八所の拜殿みおいて衆徒法樂の奉幣
あり、次ゟ神酒を供ず畢〳〵還幸あゝ云、 一乘寺

## 祭 五日 八大天王の社、洛北一乘寺の東う在、祭る所祇園三

今日祭礼之 紀事 云一乘寺の村人産土の神とす、祭る神三座共ゟ
かけ〳〵高声ゟ有幸〳〵と呼〳〵神幸とすむ○一説ゟ宵宮
競馬七番ぐゝゝゝ、宵ゟ馬場ゟおいて走馬一乘寺の村人烏帽子素袍と着て各榊と
當日ハ旅所ゟおいて村民ニ仆ゟ来ゟ、神鉾出づ 石清水

## 臨時祭 又南祭ト云 中午日〇山城国男山八幡宮、天禄二

年三月八日臨時祭、其後毎年祭之、このことハ平
将門乱逆の報祭賽のつゝめ天慶五年四月廿七日ゟゝ始まるよ

江家次第 公事根源 先辰日試樂ゟ、舞人竹葦の
ととゝゝ竹枝と挿頭ゟ〳〵、仁壽殿のゝゝゝゝ御前ゟ列ゝ陪従
近衛の召人求子ゟゝゝの音樂と合せごとゝや、當日ゟ大
臣以下ゟゞゝの花と使舞人の冠ゟさゝ、三献五献の後ゟさゝゝけ
の事あゝ 荒野集 沓音をちづふかぶりさゝゝ 荷分十訓抄
一條院の御位の御時、実方中将、祭の試樂ゟ遣恭あゝ、かざゝの花と給
ゟゞゝゝゝゝ

枝と折てさゝくるをめでゝ祈ハ人ごとにかなへあたふ、
そをこゝろこのむ試楽のかぐらふハ竹の枝とさすとぞ

## 稲荷の御出

雍州府志云 齋場歩稲荷の御旅所ハ油小路七条の南にあり、弘法大師東寺を営むの時、八幡と土地の神とを勧請して後稲荷の神出現す、志ぶ〳〵芝守長者の家に寓すること年月をへて稲荷山にうつす、今の旅所ハ芝守の宅地にして祭礼の時、神輿そこにおゐて二十日、是古への遺風なり 紀事云 新御供、社家毛利氏調進す、此日七条高瀬橋の東に大松炬と立る、土人僉議にあづかりて、神輿の来るときゝて時ハ火と点す、神輿本山稲荷と出て、大和大路より七条の御旅所に入、社家并に氏子供奉す、御旅の間四月第二の卯日に至る、其間諸人群参すこと凡旅所の散銭米八田中米女島右近受納す、この神、二の午日御出、二の卯日還幸、故ふ世俗の諺ふ、ウニ〳〵と御出ウカ〳〵と御還ると云

## 池上千部

九日より長栄山本門寺ハ武州千束の郷池上村にあり、開山日蓮上人毎年三月十九日より廿八日迄法花経千部千日讀誦、此節参詣多し、當寺ハ日蓮上人終焉の地、但遺骨ハ身延山に葬るとぞ

## 伊勢櫻

此花緋櫻の種にして遅〳〵咲て花



をつくる、近〳〵終と尾張と訓通ず、尾張の国ふ近きハ伊勢国に因て伊勢と名づく

## 家櫻

季吟曰、人の家に咲櫻の意ふ

## 犬櫻

小白花みてこゝろふくたく、櫻の属ふ

嵐雪

いやく〳〵故ふ犬櫻とまぎらはして似て非あるとのふ犬の字と付ていふとの多く、犬蓼犬蔕豆犬柘又一番鐘二番鐘ふ似て非ある

ろと武家ふ犬鎗と云或ハ犬筑波集の類ことふ同じ

## 一歳桃

さく、其色單重花大

## ろ

## 正月六の餅、六入

炬燵 ○冬十月より寒とをのぐ為ふ炉をこさく、炬燵とおく、

塞 三月迄暖気ごろ故ふ塞を止む 白氏文集 別春炉云

## 三月爐塞

## は

## 正月腹赤姜

元日 公事根源云 腹赤の贄とて魚と蔬紫より奉る、昔ハやがて節ふ含まふ供じるまや、腹赤の食様とて食さゝると皆取渡ー

て食ゝる、十二代景行天皇筑紫の長濱ふて海人是と釣て奉る、其後四十五代聖武天皇の御時、天平十五年正月廿日太宰府ゝ是と奉る是ゝ(に)て年毎の節會ニ供ずきはし定めおゝるゝ也、

腹赤とハ鱒の魚のごとし

## 初夢

紀事 云九初夢とハ大晦日の夜より元日の暁に至るの夢なり○年ごとに春来べしと思寐のまのさくらかな 秋夢 西行

ハ夜分勿論、元日と鶏旦とをいふ○けい部に注す可見合

## 初鶏

鶏旦 御傘 元日の朝鶏の鳴を云寅越鳴初る鳥といふ

## 初暦

暦開 雑談抜 九暦を賣るハ冬ごろより、初く見或ハむくくと春よす、冬ごろより用ゐ来る、春の用と奈ずる為まきハ春勿論なり、

## 歯固

鉦鏡

世諺問答 さゞごとてもちひぐるまのハうち故ぞや、昔人ハ歯を以て命とす故歯の字ともよめり、剰へ歯固ハよろひをもちゐる心ともちひハ近江の大切のものと用べし○

本朝食鑑 本邦古くより餅と以て神明の供くして大円堺と作り、鏡の形に擬す、故に餅と呼て鏡と称す、これ八咫の鏡ふ擬する欤、正月朔旦必ず餅と以て諸神ふ供ず及一家の長幼団楽して同く鏡餅とすらくて新歳と賀すと○歯固の具ハ折敷六本に押鮎大根橘鏡餅など種くの物と具すなり、

## 春駒

故事要言 云年の始に馬と作すて頭ふ歌ひ舞をのことと春駒と名づけおどふ奏し

## 江入楚

春は

## 節煎賣

和漢三才圖会 摂州天王寺の民家まて河内の上糯米の穀と用くこれと熬、爆膨く浮おのづから脱し去く潔白雪の花の如し云く○昔ハ正朝に家内こぞりて今ハ白米と用ふ江戸まてハ雛祭ふするとて蓬菜臺盤ごとに穀といふて今ハ売ものとなれり、

## 海贏身

同上 海螄俗にいい海中ふ生じて小螺に色形田螺ふ似く堅く田螺より大きく、春夏ごろふ多く出づ其肉上黒く中白く盤曲て殻ふ去て蓄腸を去く煮て食ふ甘く鹹く高家まて除夜及び歳の始に心用の酒肴とす、

りやんハ千倍万倍貨殖とるの視欤

## 破魔弓、破魔矢

世諺問答 蚩尤が眼の瞳と接く木丁の玉とくかの眼のごと三重ごとく故弓射るの的ふ三重と画くに中の瞳と除く

雑談抜 或説ふ正月ふ射戯する濱弓ハ出蚩尤が眼と射破る弦ふ破目弓あるくハ通唱の宜くして濱弓ハ出蚩尤が眼と射破る弦ふ破魔と破るの意ふくハ破魔弓とも書濱の字心かく濱弓濱矢と称す、又

## 羽子板

胡児板 を見

つく 世諺問答 椎ときゝて、胡鬼の子とそつきゝ作るハいつゝ、ことぐや、蚤とさゝきさゝの蚊ゝ蚤ゝ蚊ゝ秋のさゞ蜻蛉と云虫出きて蚊ととりくそゝとゝハ木蓮子ぐとこんぐらがらかして枝ゝくあぐ見バおつゝ時とんぐらがつてのやうに、さて蚊とおそれおめんがために

賣初 注釈ホ 初子日

買初 及び子 小松引 子日ノ遊 子日ノ松 扶桑

略記 宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴、行幸北野雲林院 菅家文章 予亦嘗聞于故老曰、上陽子日遊獵老人曰、倚松根以摩腰習風霜之難犯也 拾芥抄 正月子日岳登るハ何ぞや傳云、正月子日岳ホ登るハ遠く四方と望ミ陰陽の靜気と得煩惱と除くの術なり 十節記

## 初子の玉箒

万葉集 始春之初子乃今日乃玉箒手尓取加良尓動具玉乃緒

家持 袖中抄 玉箒ハ、蓍とゝ草ホ子日の小松と引ぐて箒ホ作る、田家正月子日ホ蚕飼する家と掃初るとゝ

## 初寅

紀事 正月初寅の日師ゝ山鞍馬寺ホ詣づ、是と云、此日鞍馬の土民福等ホ以て鑰と作る是と賣るゝれと福撮とゝ、福徳とうゐとするのゝい心、又生蜈蚣と賣、是を御福蜈蚣と云多門天の使令とするとのゝ、九く鞍馬山中雞と養ふいハ鷄好ぐ蜈蚣と喰ふ故ぁる

## 初卯

正月初卯日、摂州住吉の社へ詣、是と云、社内ホおゐて神符と泰詣の諸人ホ授くる是と卯の札と云、江戸ゝゝと此日、ホ所の妙笑へ参詣す、今日受る処の紙符と串ホ挿ゝ諸人是と頭ホさゝ家ニ帰る

## 萬春樂

春鶯囀 梅がえゝふ 岷江 青柳ゝふ 大芥ゝふ 入楚

万春樂ハ、蹈哥の曲云、萬春乐ハとゝ唱ふる、蹈哥の舞人の立ざまハをゞて八句の詩ゝそれと漢音ゝふゐて、万毎のあひゐ方春樂と唱ふる、蹈哥ハ、

春鶯囀 合管の作者、照于山右大略樂器とゝろゝ樂の作者ニ一説ホ天長宝樂と名づく」これら蹈哥の曲ゝ○梅枝 梁塵秘抄 日之部ゝゝめゞ枝ホさゝる多やもるのけてそれ、二段 春ゝゝく、ゐとゝといおぐゝゝゝ、三段あそれそこゝゝや雪ハふゝゝ○青柳ハ 同抄 律之部ホ、あをやぎをかさいとふゝゝゝ、おけや、鶯の、二段 鶯のゐふとゐゐさバゐゝや梅の花

がさや○大芹 同拗 律之部に大芹ハくれのさゝとのこぜりこそゆぐ〳〵こむう〳〵こゝをやこの世ぜんぐんさんとの末のゆーのさのぶんむー かめのぐう さいくのさいやうさいとさゝやうめん かをめうけくるゝさゝもと列〳〵うゝらぐんさ、五六ゞ〳〵の一六のさいや四三のさいや 年浪草 云各路哥の夜のこらいとうし、我皇延祚億仙齢 万春楽 元正慶序年光麗 初天万春楽かくのごく八句の詩の句毎ゟ万春楽と唱ふよ

神、初不動 廿五日、廿八日八、天神、不動の會日〳〵、今 九日正月廿日為天穿〇、今日又婦人鏡基の鏡餅と祝ふ 九日と初顔と其訓近し、故ゟ初顔を祝ふの意ろ

## 日正月、九日園子

事 今日地下の諸人ものゝ遊び、九日ゟ園子とらいて隹節とゟ、是と九日園子とらいて隹節とゟ、事文類聚 江東俗号正月廿日為天穿〇、今日又婦人鏡基の鏡餅と祝ふ 九日と初顔と其訓近し、故ゟ初顔を祝ふの意ろ 紀事 正月二日、四条河原浄瑠璃歌舞妓等ことを始むると初芝居とゟ、武江堺町、大坂道頓堀ゟ又ろ

## 初芝居

和漢三才畫会 京師の俗、正月九日家毎ゟ赤豆餅餌と食ふ 紀

## 春永

初春ゟ三春の季長さをさゝてゝ

## 春告

## 花の兄

梅の異名〳〵、二十四番花信風小寒一候梅と以く始とゟ、故ゟ花の兄とゟ

## 草

梅とゟ 蔵玉 そう〳〵の春つげ草の花の いろあ〳〵ゟをゝゝ〳〵る〳〵雲

## 畑打、畑

## すく

田をすく 和漢三才畫会 田と墾〳〵ハ耒耜を用て土をく〳〵、田とゟ〳〵く〳〵」ゟすく打とゟ同

## 藕と堀

本草 時珍曰、蓮花葉常ゟ偶生す、偶せざるハす、故ゟ字耦ゟ从ふ耦ハ耕〳〵根と藕と云、或ハ藕〳〵泥と耕春ゟ王〳〵藕と堀ゟ、こゝをと〳〵と食ふ

## 兼三春物 初鮒

早春ちゞめて漁人是とゟて、はるの市ゟ賣ゟとゟ、子細なし

## 春宮

礼記 春宮太子東宮也 夫木 呉竹の園ゟ

## 春雨

うゝろ春の宮ゟ名てゝ千代の色ハこゝゟ後京極

## 春告鳥

ことゟて 古今 鶯の谷〳〵ゟ出る声 鶯の異名〳〵 てさぐ〳〵 鶯の異名〳〵 古今 鶯の谷〳〵ゟ出る声 青雨 春の雨ハとの雨 鬼貫独言 春の雨ハくゝとゟ春くるとゟ〳〵ゟ〳〵大江

## 箱柳、白楊

時珍曰 木高大葉圓くして、梨の如し、肥大ゟ〳〵尖ゟゝ面青〳〵

ちて光て背甚白く、鋸の如き歯さへ、木肌
細く白く、性堅く直く梁拱となして撓曲ず 春のわざ
か部霞の
条ふ注す 春ふあふぐや 春お逢んと云詞ゝ又来る
春と争ふるころやや 春
あゝぬ 伊勢物語 月やあゝぬ春やむかしの春の身にて業平 春そら
ぬ 春文が春ちるとをとゝとつゝるハいふ、青盆接ぎるるゝ、
身ちゝをとまぎき人の春あゝぬと云意の
ことでる
るゞゝ 春まけて 万葉 春まけてゝ、○春ゃみてハ、春と
けてゝ 設まけてゝ、春さゃけハ春と兼設
ことざゝめやハ家持○當の未でゝ秋風ふとゝちの山と
花の時ゝゝ
まけぬ人九 二月 初午 二月上の午日と云 神社啓蒙
京城と去ゐと東南一里ばかり、祭ゝゝゐの神三座、下社ハ大山
祇神社ハ倉稲魂、上社ハ土祖神云ゝ○元正帝の御宇、當社影
向の日偶二月初午日故ふ今ふ至て此日と用ふ 神祇拾遺 雍
州府志 當社の出現ハ和銅四年二月九日ゝ此説ゝ従て長暦と

以てゝをを推すゝゝ其日偶初午の日お當る然れゝゝ今九日
と用ひずゝて初午と用ふ故ゝ俗、初午詣ゝゝと云、又福参とゝ 紀
事 此日新御供社家毛利氏調進す、中の社ハ倉稲魂と祭り、
田中の社ハ大巳貴命ゝ、ゝゝをゝバ本朝衣食の祖神みゝゝ蒼生
安逸の社ゝ、今日農民参詣ゝふ多ゝ、門前の家ゝ百穀の
種并ニ雑菜の種を賣る、又大ふの陶器と賣る、その大ちゝとの
ゝバ瓢法とゝ、其ゝゝ八摂州瓢法の海濱ゟゝ始てこれゝ製
す故ふ瓢法焼とゝ、是ゝ、其小さものゝとつゞくゝとゝ此土器ゝゝ子
の中に運瓢ゝをゝバつゞくゝの音ゝ、故ふ名ゝす、ゝゝゝを云ゝ小
児と賺ゝゝ、又大人も塩と此内ふ入てゝ火中ふ投ゝ焼塩とす、
今日民家多く菜の葉を食ふ、凡参詣の人神前ふ投ぐる
処の銭ゝゝ籔の間ふこぼるゝとのおゝバその人福ゝゝさ
ゝゝゝ請得て家珎ゝす○此神ハ七度詣とゝへ傳ふ 拾
遺集ふ滝の水ゝゝゝてゝをゝバいふとゝ
思ゝひ○武江ゝゝゝ此日王子妻恋三囲真崎ふの社と始し、
武家市中ゝゝを鎮守の稲荷と祀ゝ、灯燭どうげ譲吹ゝゝ
舞ふ、近ゝゝそハ雲間の霹靂の如く、遠くてハ蒼海の
波濤ふ似ゝう、江戸の賑ひ耳目と驚ゝす ふ堪ゝゝを 初雷

## 初電

月令 仲春之月、雷乃発声、始電

紀事 九、春の中始て声と発ス、是を初雷と云

## 蜂

## 同巣

蜂数品あり、蜜蜂、土蜂、大黄蜂、竹蜂、赤翅蜂、蠭蜻蛉

おし蜜ハ夏月蜂の脾の中ニ貯ふ、已ニ冬に入るの食物とせんが為ニ、自然ニ脾と結び貯ふるを山蜜と云、熊野ニ

くハ山蜜よりして上品とす、又大樹の洞中ニ貯ふるを木蜜と云、家ニ養ふを家蜜と云、九蜜と醸す

所、諸国にあり、紀州熊野を第一とす

## 孕鹿

時珍曰、鹿の性淫し、春二三月、秋八九月孕む、九月にして一子を産

滋し、一牡常に数の牝と交る、牝妊むる九月にして一子と産

○本草に九月にして一子と云、年歴るの鹿多子と産と往々にあり、乃ち三子ニ過ぎるなし

## 孕雀

雀の子 本朝食鑑

雀の性淫し、春二三月、秋八九月孕む、卵と生む、班あり、瓦雀

檐間の窮隙、堂社の破竅朽木の空穴ニ巣とつくりて、卵と伏

す、小さきものと黄雀と云、雛の口黄にして赤黒くして故名

## そてこ鳥

か部頼鳥の条ニ注ス

## 初桜

花ハ端山より咲く、奥山ニ至つて、紅葉、奥山より漸く端山ニ至る、其冷暖おのおの

遠近の差別おのおのあるを感ずる処ハ前後あるまじ、凡桜の初て開くその皆單葉山桜彼岸桜姥桜のたぐひ也

## 花を待

初学和歌式 花咲そめてハうれしく、待花ハ思ひやつるる

命にて散名残ともふ待花ハ思ひやつるる

花をど、眼前の気色なり、待ハ誰ニ、花とそぞろる題ニ桜とうみ

くくしくかぐ、桜と出る題ハ多くハさくらとすべし、むげよ

## 三月

## 巴字盃

き部曲水の條ニ注ス

## 半仙戯

志部鞦韆の條ニ注ス

## 花鎮祭

晦日 公事根源 是ハ大神狭井の三祭と云 神祇令

ふの世つゐ、春花の飛ふころハ疫神ろ散しく、人とるやまひす、故ニ此祭ハもとろ、神祇官ニて行ふる

## 蛤ふる

摂州住吉の浦の汐干

凡三日ろて七日迄ニ、汐干見物の輩泥中の蛤とると方言ふ

ふるとハ、足ニて踏或ハ棒のさきニて突て蛤蜊のを呼と知

るをふる

## 花

横川曰、櫻の我国ニ多きハ、いづくも花とハ○芭蕉翁羽曰、我家の正花論ハ、

花ハ櫻ニおゐず、櫻ニおゐずといへり

## 花盛

花譜 吉野山の櫻ハ立春ニ六十五日とさだまりて、ことし又年の寒

温(あたゝか)く遅速(ちそく)ハあれども、大(おゝ)やう八(はち)ぶ咲(さく)ぞ、

吉野山の町(まち)より上(かみ)の方(かた)八六十五日(ろくじふごにち)より八(はち)ぶ咲(さく)

彭(ほう)、牡丹記(ぼたんき)半晴半陰(はんせいはんいん)謂(いふ)之(これを)花墨養花天同(はなぼくやうくわてんどう)之(これを)定(さだむ)様(やう)住春風花飛如(しゅんふうはなとぶがごとし)錦幾濃粧(にしきいくのうしやう)下暮雲(かぼうんにくだる)

バ柳(やなぎ)ハ煙(けむり)〳〵とこゝろぞ都(みやこ)ぞ春(はる)のみどりなる素性(そせい)

古今亭(こきんてい)春(はる)の山(やま)の横(よこ)八人丸(ひとまろ)が目(め)ハ雲(くも)とハ

くくと

## 雲(くも)

ぞそゝ○八尤集(はちもしふ)白雲(はくうん)の色(いろ)の千種(ちくさ)ありてのさら〳〵

## 花雪(はなゆき)

屋(や)ぬのさつまかさねて風(かぜ)さゆる

梢(こずえ)ハさゆる花(はな)の一(ひと)雪(ゆき)

## 花錦(はなにしき)

朗詠詩(ろうえいし)織(おり)自(みづから)何(なに)

綵唯暮雨裁無(いろどりハゆうべのあめのみにしてたつことなし)

## 花(はな)

## 傘(からかさ)

花(はな)の滝(たき)八滝(たき)の如(ごと)くおつる花(はな)をいひ、又花(はな)の散交(ちりまじ)りておつ

る滝(たき)をもいふ○山櫻咲(やまざくらさき)初(そめ)しより久(ひさ)しくこの雲(くも)ハ落花(らくくわ)のこゝろ

## 雲(くも)

咲(さく)つゞき巌(いわほ)おぶかくもるみそま、又滝(たき)の上(うへ)さへ

## 花浪(はなのなみ)

今式(いましき)一扁(いちへん)水心得(すいしんう)ハるうら〳〵

## 傘(からかさ)

花(はな)の波正花(なみしやうくわ)、水辺(すいへん)ニ三句(さんく)、波(なみ)の花(はな)八正花(しやうくわ)ニあ〳〵ず、白浪(しらなみ)の

花(はな)ハ似(に)〳〵と云(いふ)又波(なみ)の花(はな)の下(した)ニ云(いふ)、波(なみ)の花雪(はなゆき)の花(はな)八、正花(しやうくわ)ニあるら

ず、但(ただし)波(なみ)ニ落花(らくくわ)のある句体(くてい)をバ春(はる)ニ、植物(しよくぶつ)ニ、正花(しやうくわ)ニ云(いふ)○



う〳〵水川(みづかは)ちら〳〵ニ花(はな)のあ〳〵波(なみ)ハ

ろ〳〵音(おと)ふさ春(はる)ぜそ〳〵

天宝遺事(てんぽういじ)寧王春時紅(ねいわうはるのときこう)の絲(いと)と紐(ひも)と、金鈴(きんれい)と綴(つゞり)て、花(はな)の梢(こずえ)ニ

懸(かけ)さ鳥鵲(とりかさゝぎ)翔(かけ)を集(あつ)ることあ〳〵ず、園吏(そのつかさ)ども〳〵制(せい)せ〳〵む、

鈴(すゞ)の索(なわ)と以(もつ)てすと驚(おどろ)す護花鈴(ごくわれい)と云(いふ)

通村抄(みちむらしやう)云(いふ)花(はな)ニ鈴(すゞ)とつけて鳥(とり)を追(おふ)と云(いふ)是(これ)

## 花(はな)の鈴(すゞ)

護花鈴(ごくわれい)

雅世(まさよ)

とゝろ〳〵、ゑまいハゝとゝろ〳〵ニてゝ訓(くん)ニ、

笑咲(ゑみさく)などの字(じ)と訓(くん)ずる花(はな)の開(ひら)〳〵ニ云(いふ)

## 花(はな)の顔(かほ)、花(はな)

## の姿(すがた)、花(はな)の肌(はだ)、花(はな)

## の粧(よそほひ)

そゝ〳〵、花(はな)八美人(びじん)の艶色(えんしよく)ニ

ふなら〳〵美人(びじん)八花(はな)の艶色(えんしよく)ふなら〳〵正花(しやうくわ)あ

き〳〵バ人(ひと)の上(うへ)ニいひ、ろ〳〵正花(しやうくわ)ニ

動(うごかす)

## 花(はな)ぶさ

夢也(ゆめなり)字彙(じゐ)草(くさ)

## 扈(はなのくちびる)

木英華也(もくえいくわなり)

## 花(はな)の宿(やど)、花(はな)の窓(まど)、花(はな)の扉(とぼそ)、花(はな)

花(はな)一葉(いちよう)を

一輪(いちりん)ともいふ

## 花(はな)の戸(と)

今式(いましき)此(この)あるところろう

## 花心(はなごころ)、心(こゝろ)の花(はな)

源氏物語(げんじものがたり)寄木(よりき)ニ云(いふ)

## 花(はな)

## 輪(わ)

## 艶(えん)

字彙(じゐ)草(くさ)

花(はな)貌(かたち)云(いふ)

## 花(はな)

## 唇(くちびる)

朗詠(ろうえい)誰謂花不語(たれかいふはなはかたらずと)輕謙激弓影(けんをかろんじてゆみのかげにげきす)

花ごろもをする君ゐるさバ 御傘 人の心も春ハるゝ 花衣 花の衣も

の袖、花の袂 枝折荻 花の袖、うつゝき袖ゝ、花ハるゝ詞ゝ 御傘 こゝろハ紅梅あて染れバ雑ちらぐ〳〵なれど、只あるときゝて、春の 花筐、花籠 和漢三才画会 竹器、無係為筐、有係為籠 花かごハ共ゐ花とさすか 花皿 仏家にて供養の 御傘 正花ゝ、植物ゝ春ゝゐ、〇花ざかり四時何の花ともさすそのあざ〳〵しく専ら春みるゝ例ゆゑ、春ゝ花と 花活、花入、花筒、花瓶 この花と盛る器 花車、花見車 開元遺事 楊国忠子弟春時名花と移す木檻中ゐ植、下ゝ輪脚と設け、挽ゐ綵縄と以て至る所自ら移春檻と号す〇花見車ハ花ある処へ乗行く車 花笠、花蔓、花の盃 増山井 皆花とさ其

花の散るゝ 花の随身 年浪草 大臣家の賜ゝそ呂〳〵ゝ随身ゑあ〳〵ず、花の身ゝ随ふの義ゝや、ち〳〵バ揚国忠が移春檻の類ゝや、可尋 花造 年浪草 花肆又造花肆ノ類 二ヤ〇 新古今集 ゝ替ゝ新成桜花ゝ云題ある、新成桜花ハ古き枝ゝ作花のそゝやう草木の花の名と探題あどの如く闇どうみ〳〵哥をゝき、又ハ男女の名ゐ准ら〳〵縁むすびの戯ゝもやうのこと、女子の翫ぶもてあそ 花宴 類聚国史 弘仁二年二月、神泉苑ゐ行幸あらて、花とゝゐふ、文人ゐ命じて詩と賦し禄と賜ゝ 花軍 天宝遺事 長安春時遊賞花宴の節ゝさゝやうゝ始ゝて花を盛ふ〳〵士女花と闘ゝす、栽挿むふ奇多ゝさゝやうとゝて勝ゝ手、千金と用ゐ名花と市ふ庭ゐ植ゑ以て春時の闘ゐ 花莚 月令広義 緑草鋪裀落花為褥〇落花の上ゐ坐るゝとをいへ、又花見のゝ

とのごとくの衣、又花見の席ともいふべし 花の繪 御傘 正花と持ち、植物にあらず春し 花の都 釈名 国城と都とを云ふ國君の居る所人の都會する所なり○花の都ハ只都なり、花ハ褒ていふ、又都の華美なるを云 花とふらん 法華經序品 是時天曼多羅華摩訶曼多羅華曼珠沙華摩訶曼珠沙華諸の大衆あれど春なり 花の汝華とふりしく 佛上に散ー何とあれど春なり 御傘 法華經の四種の花とふるゝハ春し 踊 御傘 花やうなる盆の踊をいふ、花見ごとくにて常の事なれど春し 花の縁 一説に花の淵の誤りともいふ 花香 風靜花芳ようなる題にて世中おだやかにて春 御傘 花やうなるといふ 花ぐもし 正花ともあるべし 風あらんことを願ふごとく花の香ハるべければ逍遥院 花鳥 季吟曰花ハ鳥と二ツをいふよし、花と鳥とをとき、○花と鳥と二ツをいふ鳥に又花と鳥とをとき、花鳥のおもてる体ハ山里深山人倫ともに稀なる所花おもてるとく 散る、飛花 天水抄 花の落花 絶くる



さびしを体とハいふとそ、散ハ禁中寺都名所又うつる所の庭、花ちるハさびしきあるさまを云又落ちてハむごとし 花の主、花のある、花守 皆人倫に、花とあるハ、花をもつハ人倫にそのおもてる体を感ずるなり、是体用の差別なる処と花園 花さく秋季に夾せるゆへ論ずべし 花園 秋のハ部ニ加へ注す 花嫁、花聟 其女の夫ニ帰し、男の女をむこ、いづれ月日のつくもあるべきなり、花嫁とらん花聟とさくともに正花と持、古式ハ雑とす、蕪門ハ春とす 花の幕 花見の幕 花の山 花ある山に、花山との文字とそぶきて名所に雑あり 雨 かけ〳〵と花のあめ 支考 三月紫碧の花ともに、五月実と結び角子をなす 森の〳〵大きなり〳〵赤色稜ある根細〳〵長〳〵通黄色なり人取 馬簡 蕪頌 笛經 葉雞ニ似〳〵長〳〵厚〳〵

て刷ハケ こぐさ

## 母子草

鼠麹草ハハコグサ、時珍曰、二月苗と生ず茎葉柔軟くす許り〳〵白茸有の耳の毛の如し、小黄花とひら〳〵、穂とも一細き子を結ぶ〔大和本草〕鼠麹草又佛耳草とも云、上巳日ころを用て料を和す、近世多く艾葉と用

## 令法

救荒本草〔山茶料〕條の高さ四三尺枝梗く灰白色、葉ハ皂莢の葉に似て円く又楕の葉に似亦円く、四五葉一処に攅り生ず、葛ざく密ありて味苦し、嫩葉を取て烘熟し一水に淘て洗ひ油塩ありて調へ食ふ、亦蒸し晒し乾して茶として煮て飲

## 八十八夜

立春の日より八十八夜ゆ當ると云忘霜の条と通し見べし

## 春の湊

春のわたりともと云心なり、○これより春の終りまで

## 春の限、春と惜

行春

おつる宇治の紫舟寂蓮

とあまたのくとをしみし芭蕉

## 仁

## 正月

日本紀〕持統天皇五年春正月癸酉朔、賜内親王女王内命婦等位一云〻是始〻〔公事根源〕是ハ女房の位階と

## 女叙位

八日、近代ハ吉日をえらバ

## 二宮大饗

〔公事根源〕正月二日王卿以下二宮に參りて

## 句草

梅の異名

## 庭

〔蔵玉〕

## 竈

〔紀事〕火炉と庭上とをいふ、〔世間胸算用〕元禄五年印本巻四云正月奈良中の家〻おの〻庭に竈つくり、釜ふせ〳〵焼火〳〵、庭に數物もちく其家内旦那も下人もひる〳〵と、問ハ明もやらず、所のあら〳〵とそうじして、輪に入くる

## 螺肴

時珍曰其形蝸牛に似て其類多し、唯泥水を食ふ、春月に入取て鍋中に置くをと煎バ、其肉おのづから出づ、酒に煮糟に煮ことをと食ふ

## 兼三春物

## 白鳥

鴈の異名〔異名分類〕篠目に雪もや消ゆらむ山里は

## 二月

## 二月堂行、同水取

南都東大寺にをいて、朔日より十四日に至り行之〔紀事〕

## 牛王加持の行法

朔日より七日に至るをと上七日と云、

三月堂本尊観音の像大小二体あり、上七日ハ大像観音の前ニおゐて法事と修す、八日より十四日に至りてハ小観音の法事あり、七日の夜又十四日の夜、ともニ水屋の井ニおゐて牛王と貼するの水をとる、九年中用ゐと云ことなり、

処の水この両夜ニ汲く桶ニ玄米ふ古へ実忠若狭国より牛王と貼ス笥飯の明神の詫宣みづから水と枯井ニ入給ふ、

七日十四日の夜水ニ入ずとも枯井より湧出ること今の井水の常ニ満るが如し

**韮** 時珍曰、葉青く翠く根を以て

**接骨木花** 和漢三才圖会 接骨木人家の籬ニ多く植ゑ三四月小白花を開く、年ニ

**迩波櫻** 和名抄 朱櫻 和名波迩波佐 一名久良加 ○季吟曰、山櫻も庭櫻も、その山ニ咲き、庭ニさくと云ことなり、名木のやうニハあらず、

**蒜** 夏葷と食ふ秋種と

**葱** 時珍曰、葉青く

**蝸** 時珍曰、蝸嬴一名螺蛳師、ハ衆多ニして湖溪ニ生ず、形蝸牛ニ似て其類衆多なり、故ニ二名あり、其大きさ指の頭のごとく、殻ハ田螺よりも厚く、泥水と食ふ、春月人来りて鍋中ニ置くことを蒸せバ肉おのづから出づ、清明の後其中ニ虫あり用ゐる堪ず 和名抄 河貝子 美奈用 蜷 字非也 下畧○古へハこれと云、今專らふなと唱ゑ、ゑの部ニ附す

**蛞蝓子取** 和漢三才圖会 南部津軽蝦夷最多し、九十月ニ至りてこれと取、大なるものハ尺餘あり、一網ニ数万と得る、頭と尾と去りて千魚に当る、去るところの頭尾ハ田圃の培とする数の子即ち蛞蝓の子を雄の女詰 三月九日御影供を修す、故ニ女人登山することを許す、いはゆる結縁の意なり

## 三月

**仁和寺高** 滑稽雑談 當年星の九曜と歳の初ニ祭りて為ニ其星の形像と彫て禁裡院中ニ仏工所ニ調進す、是を頭密の行者或ハ陰陽家ニ仰せて、星供を行せらる、民家

## 正月

**星佛**

みそ亦星を祭るこの九曜の次第、羅土水金日火計月木と一歳ゝゝ九歳ゝゝを九年目ゝゝゝ

平林ゟ三上明神の社を、是と次ゝ思ふ、本明寺観音
八、三上明神の本地佛ある〳〵ゟや、堂の前ゟ三拾三間の矢
場あり、初午日今ゟ至〳〵弓矢荘嚴と〳〵里民もう矢
と商ふ参詣の人こゝを買〳〵奉納す、本尊平日ハ秘
仏ゟ〳〵、初午日或ハ三十三年と開帳の期とす、當日初
午の外ハ北さゝら南さゝら村の百姓四十人ぐらゐ講を
結びゝ〳〵一村ゟ六人で各十二人を年頭〳〵、万事と
支配す、本尊、南村ゟいつすゟ時ハ北村ゟゝ封を付、北村
ゟ在すゟ時ハ南村ゟゝ封を付、互ゟ尊敬の意を
示すとゝ、初午の日、節分の豆と十二銅を捧て、諸人
祈願
すとゝ

## 三月

### 木瓜花

和漢三才圖 世ゟ木瓜と称
するとの木草の註ゟあり、近頃唐木瓜とゝもの
是本桃ゟ〳〵木瓜ゟあり、
人其花を愛すゟ乃ち真の木瓜
の如〳〵春の末花

蘋頌圖經 木瓜ハ棠
花棠山中ゟ多く生ず、
とゞ〳〵深紅色ゝ

### 春蘭花

一根叢生す、葉長さ一
二尺、冬を歴〳〵凋ます、形短さ芒ゟ似〳〵厚く
緑色ゝ冬中箭を発〳〵、数簇苞とゐす、紅白色、三



月ゟ至〳〵幹の長さ数寸梢ゟ當つ〳〵花苞中ゟゝ出
ゝ、たゞ一花五出、青黄色、形建蘭花ゟ似〳〵ゐるゞ〳〵
や潤〳〵、香気あゝ、此
物、蘭譜ゟ出る独頭花ゝ

### 郭公の巣

和漢三才圖會ゝ
杜鵑ハ巣を営
ず、鴝鵒王望帝所化也、至今寄巣生子、百鳥為
おむことあゝず、篤の古巣と窺〳〵借〳〵卵と生ず 說文
杜鵑蜀王望帝所化也、至今寄巣生子、百鳥為
補其雛尚
如君臣

## 月令 仲春之月、蟄虫咸動啟戸 出る

始出 注ニ謂始穿其穴而出也

## 二月

### 蛇蝮地虫の類穴と

## 月歳徳神

元方棚、紀事 陰陽家来年の支干
小因〳〵四方の間吉兆を考
こゝと得方と称す、 蒲簐内傳 年徳神ハ
頗梨妻如いまゆる八将神の母ゟゝ、云〳〵 下 累
ゐ、 淮南子 帰、桃梗〻死す、許
慎注ニ云、梗ハ木杖ゝ、桃と汝
てこゝとをつくる、以て畢とゝ殺すこゝとをつくつて以来鬼
桃と畏る、今人桃梗を汲〳〵杙と作り、歳旦ゟ門ゟ植て

### 板、桃梗

仙木、神荼、 淮南子 帰、桃梗〻死す、許
慎注ニ云、梗ハ木杖ゝ、桃と汝
てこゝとをつくる、以て畢とゝ殺すこゝとをつくつて以来鬼
桃と畏る、今人桃梗を汲〳〵杙と作り、歳旦ゟ門ゟ植て

### 桃符、桃

正

鬼を辟ること礼をなして故ごとく
六帖 元日桃符を造り戸
ふ着くことを仙木といふ百鬼の厄畏こ 風俗通 東
海度朔山ふ桃樹あり屈盤ること三千里其卑枝東北ふ
むく鬼門といふ二神あり神荼鬱壘といふ衆鬼出入執て
以て虎ふ飼ふてこれおらく黄帝法こ 膏薬 三日
これ象ること桃板と門戸の上ふ立ひ
主上へ千瘡膏とふ膏菜と進ること 後醍醐拾遺 御額并ふ
耳の裏へ傳ふこと 江次第 ハ主上取之右の無名指を以て
左の掌ふめぐらしめのごとくふ注ふ右の手四の指と曲るは、
是大師の印相ごとし」二名、千瘡万病膏といふ、かくのごとく
名と忌て 屠蘇 みそ部、御薬と
供ずの条ふ出ず 年男 若水と
汲むと年 鳥追 雍州府志 乞丐の人元日より十
男とりふ 五日ふ至ふ笠と着白巾を以て
面と覆ひ手とふりて祝語ととなへ門戸ふ立て米
銭を乞ふ是と歎の与次郎と号す又鳥追と称す
ること民間田疇の鳥と追ふことふ譬ふるごとの〇
今東都ふてハ俗ふ女太夫と唱ふるもの編笠を着三



絃とりてきたりて銭とこふ 年王 新年の賜とふるごと
年王とりふハるゝ 東叡山
大黒の湯 三日武江東叡山中護国院ふ大黒天あり正
月三日餅と湯ふむるゝ泰詣の人ふ飲ましむ
ことをと大黒湯とふことをとのごとし
とて此日諸人泰詣す或ハお福の湯とをりふるゝ
さ部左義 とのいごと 真言院御修 どんど
長の条ふ云 宿直人 法の条ふ出す 泊山 布部の鳴
に 鳥さうる 書言故事 仲春厥民と 鳥狩の条
出ず 鳥獣ハ折る鳥獣ハ孕尾 十二のつの花
ま部松の 菅家筑紫へ左遷の時、梅と詠じ
花の条ふ出 飛梅 哥ふ、東風ふかバ匂ひおこせよ梅花あ
るじなしとて春とな忘れそ 梅飛ゆきく、謫所の庭ふ生ずと云
新古今 とめこ〻の梅
うゑおきし人ハをうふこそよそふれ 西行 野老 和漢三才
葉頗る薯蕷ふ似ふ小白花と着き青き子と結ぶ三稜
あり其根老壼薯蕷の形ふ類す俗ふ野老と、鄙とゞ

海苔などして共ニ
嘉祝の食物ニ充ツ

**兼三春物** **鳥囀** 水鳥囀

古今 百千鳥さえづる春は物ごとに
あらたまれども我ぞふりゆく

とぐ鳥 鶯の異名○どぐ

めぐりきてつもりつもりぬる齢かな
紅梅の花ふさふさ〳〵 公忠

**鶏冠菜** 和漢三才図会

そのこゝろ鶏冠のごとく、
紅色ふさ〳〵石ころさゝ生ずと

**二月東福寺懺法**

恵日山東福寺は洛の東南にあり、門前の街道に橋を北と一の橋とゝ、愛宕郡の境に南と二の橋と名づく、即稲荷の社前なり、
毎年二月朔方寸の紙に方の字と書き、當寺内の同聚庵ようよう出す、火災疫病を除くとゝ○今日初午方丈にて
明兆が画く処の観音三十三幅四日○神祇官にて
の像を掲げ懺法を修す

**祈年祭** 周礼祈年求豊年

也

**神祇式** 祈年祭、神三千一百三十二座之内、神祇官祭
神七百三十七座 案上案下 国司、
祭神二十三百九十五座は、

**道明寺祭** 九五日、河内国志紀郡



土師村あり、一名土師寺とゝ、中興住持の尼覚壽は菅丞相の伯母なるが故ふ、左遷の時、この寺へ立寄りしとぞ、

**雑談抄** 當寺與の天神とゝは、天穂日命の宮ゝ、菅霊の社とゝ二社合せゝ、この三十五日ゝ祭るゝ、道明寺祭とゝ○世ゝ道明寺糒とゝの、此寺の比丘尼の手業なり

**鳥巣** 古巣 **五雑俎** 羽族之為巣只以一口両爪而結束牢固甚於人工、木風拔木而巣終不傾也、雑木枯枝縦横重畳不知得勝因無意此理之不可暁者、凡鳥将生卵先雌雄営巣々成而後遺卵伏子及長成飛去則空其巣不復用矣

**三月** **桃花粥** 部寒食 **桃花の節** 月令広義 唐徳宗以上巳為令節、桃花節攄之乎

**鶏合** 闘雞は周の世ゝ始ても

**列子** **左傳** **事文類聚** **紀事禁** 裡清涼殿南階の前ゝ闘雞あり、其雞諸家の中雲客こゝと出さる、仙納弥市此ことゝ預ゝ勝負と決す、是ゝ行事と称す

**土佐海に覗**

**石取** 雑談抄云、毛吹草ニ、三月三日土佐国の西寺の御崎の海底より硯石を取出す事侍る、其潮干の時刻ニ及ぶ、西寺の僧海上ニ出る経を讀誦する侍る、今世多く八国主領主の采地となりて、猥りに石をとるニ

**鳶巣** 古今集 花ハ根ニ鳥ハ古巣ニ帰ル 順徳院 春のとまりとも見る人ぞなき

**虎尾櫻** 此樹の類うるべし枝條屈蟠多く、花の並みぐ〳〵、枝上ニ花と葉と斑々〳〵、虎ニの如し故ニ虎尾の名を、

## 正月

**朝賀、朝拝** 婁賀、婁瑞 公事根源 朝賀ハ朝拝ともいふ、元日辰の時ニ天皇太極殿ニ行幸あり〳〵行年の如し、群臣ニ礼服を着して、列立して御即位の儀式ニ同じ、婁賀、婁瑞とハ去年の目出度嘉瑞どもの奏するを国ニよりてト申せバ其事を記して今日奏すれバ、小朝拝ハ只臣下の元日ニ拝〳〵奉るばかり〳〵ト請ひ行ひて公事みな〳〵終て朝庭の為ニまづ〳〵ず、神事仏事ニもあらず、さきハ是ハ私の礼ニ君ニ私なしといふ本文あり〳〵〳〵て、六十代延喜の御宇ニ勅ありて、延喜五年、左大臣時平公ニ仰さて〳〵ら〳〵ざるのひ〳〵、抑朝拝ハ百官こぞり拝したてまつるなどゝ、小朝拝ハ殿上ニて、故ニ私あるニ似たりとて、ごめさせざるひ〳〵ゆゑ、ちかふニ臣下どもハ、元正の日君と拝し奉ると、きそうにもせバ、同十九年に、又ゝその如く行はるゝ〳〵

**朝覲行幸** 公事根源ニ云、是ハ天子父母ニ孝行を尽さるゝ、曩我天皇、大同四年の始ニ上皇母后の宮ニ行幸ありて、嘉祥二年正月九日ニ仁明帝の母后ニ朝覲の儀ハせらるゝ、冷泉院ニ行幸ある時、南階ニ下りて拝し奉るべきよし、周礼ニ春日ニ朝ニ、秋日ニ覲すとみえたり、是朝覲のこゝろなり

**千代の春** 千世の初春、又百世万代ニ古歌

**帳閉、帳書** 紀事 正月四日市中諸商人ニ亦其事を始む、九年中の物價を記したるの簿冊を裁補すれと帖綴とゝ〳〵、おの〳〵これを祝す

**兼三春物** 首

本朝食鑑 二月彼岸ふ種と下す、三四月ふ苗と生ず、葉と采る、ゆ器蔬と〻食ふと足る、五月黄花と開く、初て綻るゝ野菊のごとく、一花子と結ぶ

## 三月 中和節

李泌傳 唐徳宗上巳九日と以て皆宴樂を為す、泌二月朔と以て、中和節と名づけむと欲す、泌曰、上巳と九日とく寒食す、上巳同時二月と以て節と為ん、云〻

加〻く三今 **兒櫻** 山櫻の一種あり、又小櫻のるゝ節とあり 別種しと云、按るふ山櫻のうちふ、紅色と含〻義〻く愛らしき花あり、故ふ児櫻の称あるを

## 蝶

時珍曰、蝶ハ鬚美ゟう、故ふ又胡蝶と名づく、俗ふ鬚と胡と云〻

格物論 一種大さ蝙蝠の如く、或ハ黒、或ハ赤、或ハ青、斑あるをの、鳳子と名づ、一名鳳車、又鬼子、

新撰字鏡 和名加波比良古

荘子齊物論 昔荘周夢ふ胡蝶と為り、自喩で志ふ適ふ周ふ蝶〻ある、翩〻然と〻て胡蝶ゟ、自ら喩ふ適ふ志ふ周ふることをも〻ざる〻、俄然と〻て覚る則ハ蘧〻然と〻て周ある、ゟ〻べ周ゟ夢ふ胡蝶と為ると、胡蝶ゟ夢ふ周と為ると、周と胡蝶とゟ〻ず分あ〻む

胡蝶、黄蝶、蛺〻

鳳車、胡蝶の夢、

## 三月



野客叢書 今五月五日と重五とゟ〻ハ、九月九日と重九とゟ〻、三月三日をも亦重三とゟ〻ず、

## 重三

## 長春

時珍曰、月季花ハ處〻ゟ人家ふ多く栽てことを揮さゝ、亦薔薇の類ゝ、青き莖青き曼硬き刺あゝ、花ハ薔薇ゟ〻小くもて、深紅千葉厚靡あゝ、月と逐て開放〻て実と結ばず

## 丁子草

大和本草 葉ハ柳の葉ふ似〻、中の竪筋すゝ白く、花ハ丁子ふ似て浅葱色ゑく嫩葉を生ず、蓋焙て苦き水と去りてきを求〻て飲べきゝ

## 茶摘

益頌畨經 茶ハ春中始て速ふ隨ゝ、八十八夜の前後と宜とす○宇治の茶師馬場氏信俊が曰、始〻茶と摘ことを手始と云、九三月朔日、或ハ三日と云、

## 正月

## 履端

左傳 先王之正時也、履端于始、挙正于中、帰餘于終、○

## 両のとの

小土器ゝ、名義ゟ〻ず詳ゟ〻ず、疑〻ハ開豆開牛房の両種と土器ゝ盛て元日とき雑煮の膳の右右ゟふく此両種と盛物とゝの略語歟、又料の物ととゝのふことを両種を盛ゟ料とゟゝの

年浪草

**臨時客** 年中行事哥合 正月二日、臨時客とて、摂政関白の家ゟ、春の始、大臣以下の上達部を招て遊ぶそこゝみやうぞ〳〵る公務みしあ〳〵れバ、臨時客とて侍るみや、大方大臣の母屋の大饗ハ年とく〳〵行侍るぞ〳〵、鷹飼をぞ渡〳〵て其興ありとぞ

**履新之慶** 李吟曰、履端ハ端とふ、ふくく賀する心こゝろに同ど履新を同どゝもて、改年の御慶をぞいふ

**鏤人** 唐の時三月ニ鏤人蒸餅とゝみ、鏤人ハ此方ゟふ雛人形のごとしと〳〵

**流觴** き部の曲水の条ニ出

**林檎花** 宋馬志開本艸 林擒樹奈る似く二月粉紅花とぞ〳〵、子も亦奈の如くふて差円ゝ

**ぬ**

**兼三春物** ぬく〳〵 毛衣ゟてく〳〵鴨の足 芭蕉○常ニぬくいとゝ曖ともゝ

**を**

**正月** 紀事 其式条と点ど塩梅大服 大服と八点茶の名ゝ山椒と茗碗の内ゟ漬て合家ことゞとのむ、又賀客

**御降** 元日ゟ降る雨雪とゟ

ゟ献ず、こゝもと大服とゝ、季吟曰、元日ニ大ふ〳〵ふくてたる茶と大福とのひ形〳〵用ふることゝ、大服ハ去年の青葉の匂ひ

**押鮎** 江次第 元日押鮎一坏煮塩鮎一坏、云々、土佐日記ゟを元日ゟ用ひざることゝ、是歯固の具ゝ○鮎ハ年魚の部

**女王禄** 八日とて、其年長ずる故ニ、新年嘉祝の食とす、其禄法、人別ゟ絹二疋綿六屯とゝもど、たゞ王禄とづゝふくて、女王ゟ禄とゞ字ゟハ書あるゝ 江次第ゟ委〳〵、公事根源云、女王禄と字ゟハ書

**男踏歌** 公事根源 踏哥とゝハ、正月十四日の男踏哥ことゝ、近頃おこなハれ侍るハ女踏哥とゝ、そはハ十六日ゝ、光源氏物語ちごふと多く男踏哥のことゝ侍るや、岷江入楚 天武天皇の御時ゟ始ゝて、聖武天皇の御時ゟ定ゝめおこなハる、又曰、円融院天元六年正月十四日、有男踏哥、以後中絶云々 西宮記 古語ニアラレバレリト讀云々、曲の終りふ、万年アラレとゝ祝言と必ずゝ〳〵ひ納むる故、アラレバレリとゝ〳〵未詳 花鳥余情 男踏哥十四日ゝ、殿上地下の四位以

の梅をとゝめむ、くゝて巻〳〵て云、西の京何〴〵の家に梅あり、花開けゞ其色深く其香濃く、こゝに其えんに應ずるものゝ、主の女、枝ゟ短冊を着く献ず、既〳〵て禁庭ゟ移す、主上これを見させ給ふ歌あり、勅を以ハつぎ〳〵當の宿まで問ちぐいつゞ

**齊高摘** 和名 **莧菜** 一名莪蒿、和名於八木 崔禹食経 状茎草ゟ似て高さ二尺ゟ五尺ゟ抄 齊菜、一名莪高、和名於八木 崔禹食経 状茎草ゟ似て高さ二尺ゟ五尺ゟ春ゟ夏ゟ秋ゟ苗を食ふ 夫木 ふゆはやる雪まを分てつむ 犯貫之女 今此木相国寺中ニ多し

**大芥** 白樂天詩ニ不明 **臘月** は、部 萬歳樂の条ニ云 **兼三春物** 不暗臘々月、新古今 てりもせず曇りもはてゝ春の夜のおぼろ月夜ゟ也 大江千里

**於胡海** 和名抄 海中石上ゟ生ず、乱髪の如くもつと青色、東海ニ多し 大和本草 黄梅ハ小樹ゟ、秔莫のごとし、部ニて可見

**黄梅** 大和本草 黄梅ハ小樹ゟ、ちゐさくも本草ニ溼草の



下の輩ゟ〳〵き呵ゝとゑめぐりて、催馬楽とゝゝへ舞のあつることあり、〇男踏哥、女踏哥、隔年ゟおこなふ 細流抄 みゝゝう、〇かぐ〳〵のごとくゟ 河海抄 踏哥の人、綿の造花を次く、冠の額おそく〳〵かづけて、踏哥の人おくる 禄

**女踏歌** 十六日 公事根源 ゟゝ正月十五六日ハ月の頃あきバ、京中の男女の声〳〵物ゝゝをめ〳〵と、舞とやらゞ申おぐせ〳〵ゟ〳〵つゞけて、年始の祝詞をほぐゝゝく、舞とやらゞ申おぐせ〳〵ゟ〳〵故ゟ、踏哥ゟゝやゟめて、天武天皇三年正月ゟ太極殿ゟ渡御ありて、男女ゟろ〳〵ゟ歌ゟ〳〵闇夜ゟ踏哥のごとくゟゝゝり、然ゟ八月のころゟ〳〵紅ゟも烏羽玉の闇の夜ゟごとくゟゝゝ也、

〇此外委〳〵くゟゝゝ今ゟゟゟゟと略ス 江次第

**女節分** 十九日〇吉田の等ゟゟゟゟ

下ゐ載て曰、高さ二三尺、方ろる莖厚き葉、初生の小
椒葉の如くうく、歯あり、面青く背淡し、所言ワ
ゐイと同じ、正月ゐ黄花を開く、故ニ迎春花と名づく、大
花のうち梅ろ似くうし、故ゐ国俗黄梅とふ

## 原野祭

上卯日○山城国乙訓郡みや、春日と同神ニ、
公事根源 この神ハ、皇后の奉ゐ世のうんため、
本社遠をふうて、都近をとろろふたゐ
奉らるさればゐ大原野行啓ぢどゐそゐの侍うゐや

## 踊念仏

毎年彼岸の申日に、摂州四天王寺念仏堂ろく此ゐあり、
天筆の名号とく、九八菩薩の画像と掲く念仏修行を、
相傳ふ良志上人、洛北鞍馬の毘沙門天よりく感得の御影
ありし、今日平野大念寺来りて法事を修行ゐ、法会ゐ
うぐ大和河内の道心者来うて各十徳と着一鉦ニ紐と
付て、手ゐ持くくくし踊るふハおくず、一心不乱ゐ念仏
おて、誠ゐ感ゐたくく踊るぐぐくこゆるし、大和河内の者
といぐ由緒正しき豪家の禅門おくでハ、此法席ゐ
入事を許さゐとし、此寺の西門ハ極楽の東門ゐおうるる
故ゐ、昔よりて浄業を修するの人、此寺ゐぐうて西海の
落日を観ずるし、弘法大師もこの西門ゐて日想観を修
ゐし、法然上人も、此地西南の一宇一心寺ゐおうくく、没日
ゐ浄土の観を別ゐゐ由、旧記ろを侍るや、今を諸人
弥陀の来迎と拝まとて、今宵彼岸の中日群集すとし、
是没日ゐ向て浄刹
の方を拝むの遺意や

## 萩の焼原

年浪草 引説ゐを皆うくハ 後撰集 くうくハ
原とゐ

とぐのやけくうさけく若菜つくゐを誰をさこむ

## 萩の若葉

年浪草 引説ゐを皆うくハ 後撰集 くうくハ
原とゐ

とぐのやけくうさけく若菜つくゐを誰をさこむ
蕪盛王、この哥の詞ろ、続古今春部順徳院御製、かこが
野やゐぐ霜枯の春風ゐ青葉ゐ萩のやけくう、
こゐさと蕪盛王の
哥ようくせのうく

## 萩の若葉

萩の初生芦筍の如く
生ゐ漸く葉の状ち
分ゐうるを
若葉とゐぐ

## 三月

## 御身拭

十九日○山城国嵯峨
清涼寺の本尊
釈迦如来、五尺三分の立像ゐく、天竺毘首羯広赤栴檀と以
く作る処ニ、今日開帳ゐ、寺僧白巾を以く仏像とぬぐい
拂ふこゐさと御身拭とき、この起うハ此堂建立の人七日参
篭のうちゐ本尊告のゐ、汝ゐ父今生と畜生ゐ将ゐ此堂

の材木をもとむ〳〵牛ともある、弥増も善と称〳〵仏果を得せしむ
べし〳〵と、急ぎこの牛と乞得〳〵堂の側〳〵繋ぎ、父の思へ
を称〳〵養ふ、三月十九日にもとゐる、仏果と得させん為
牛の衣を以〳〵如来と拭〳〵赤栴檀の薫りとう〳〵、牛ふ着
せ奏〳〵う、其後年毎ふ今日如来の妙香をふ
とうて、衆生煩脳の不浄を清むとかう

## 芋生の浦

梨 勢州芋生の浦、梨花の名呼ぐ 新古今 櫻あさのをふの
〳〵なくなくたちかへるらん

## お

### 正月

## 若水

包井、井華水 公事根源 あゝ
若水桶、 たゞの春立日是を
を奉ると若水とよぶや、こゝろ〳〵ふ八年中の邪気を除くとぶ本文あ
る故ぐ 世諺問答 〳〵〳〵ふを此日ハ井華水とて、あゝ〳〵に
〳〵る水と飲事ぶぐ〳〵や 御傘 若水立春ぐ元日ふあ
らずとぐ〳〵意ぐ今歳且ぐ用るとぐ〳〵〇包井ハ御
生気の方の井ふ蓋とぐ〳〵
立春ふ開くと包井開とぐ〳〵

## 若菜

初若菜 公事根源
内膳司ぐ、正月上子日ぐ是を奉ぐ、寛平年中ぐ始ぐと
〳〵や、延喜廿年正月七日ふ後院ぐ七種の若菜を



供ずぐ〇七種
の条見合ず〳〵

## 若恵夷

夷廻 紀事 京師街頭ふ、鞍
若恵美須ふの福神の簡と賣る四民ぐ〳〵門戸ふ貼〳〵或 馬毘沙門天の紙符ぶ
八歳徳棚ふ供〳〵、元日是と拝〳〵福と祈ぐ祢をとゝむ、南
都の市中、毎年吉野ぐ〳〵来ぐ〳〵、守り福神の札と賣、二日
の暁又毘沙門天と迎ふ〳〵、三日の暁又恵比須と迎ふ〳〵〳〵、猶京師ふて元日の暁天
ふ若恵美須の札と賣ぐ〳〵〇夷廻ハ二月 偃儡師をふ、津
の国西宮ふ跡と垂ふ夷三郎殿蔵の始ふ衆生ふ笑ひと〳〵
〳〵ぐ〳〵せて富貴と守らんとの託宣ふ、昔より西宮より春
の始ふハ都を始め方〳〵偃儡師をもて〳〵働むる、この偃儡師を
夷ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵、蹉水を夷廻とぐ〳〵、又京大坂ぐて大黒舞
の類ふく、夷三郎殿の姿をもて烏帽子と鯛と釣ざおとをもたび、
〳〵もあれど、こゝもとそ悲田寺或ハ四ケ所の垣外の賤き者の業ぐ〳〵

## 若餅

三日の間ふ搗と若餅とぐ由古老いへり 雑談抄
一説ふ三ケ日ふ餅搗ことあるべからず、俗ふ餅の
大小とぐ時ふぐ〳〵若ぐ〳〵ぐ〳〵、是小の訶と忌てぐ〳〵、礼賀客
ふ饗するふ便ある故ふ小ぐ〳〵と賄ふ故ぐ〳〵唯祝語とぐ〳〵る

の 新草、○三種とをふ、春 **若草** 初草、艸の初生とを 幸木の 本草 松二三月猶と抽んでゝ花と生ず 条ふ云 **若緑** 長四五寸ゝ是緑とゐや、猶正月二すゞ〳〵、松緑柳緑こゐ其色の青黄の間色とゐつゐゐべ〳〵 大和本草 山葵加茂葵ふ似く、其根の形味生姜ふ似う、故ふ 兼三春物 **若布** 兼布ふ對〳〵 **山葵** 大和本草 山葵中姜の名あり、中夏の書ふこゝず、漢名ちゝべ 和漢 山葵ふ多くゐ、人家ふをを是と て弱布とゐ

**二月**

**蕨** 早蕨、錐蕨、本朝食鑑 春初蕨、蕨手、の初ゐ先生ず 三才畫会 山中水ふ近を石間ふ多くゐ、人家ふをを是と 移〳〵種る、二月種を下〳〵て三四月苗と生ず、葉蕗及び葵の葉ふ似う、六七月穂とをすこと二三寸、細うる黄白花とゐ〳〵き、細うる子と結ふ ると早蕨と号すゐ○時珍曰二三月芽と生ず、拳曲とし て状ち小兒の拳の如〳〵、 朗詠 紫塵 嫩蕨人拳手○仙人の碁ゐと指さす蕨ふ乙由○序ニこの朗詠の句、塵と嫩との二字ハ莖と嫩との誤ゐ〳〵、下学集ふ辨〳〵 堀川百

たゐ、ことゐ、ことゐ、但〳〵この首 **紫の塵** うちく〳〵ゐ春の野ふあるる蕨ハとのうげみて、 **若紫** 本草 藾蕘曰紫草ハ蘭香ふ似て白色ふ実とむすぶ白色ふ、秋熟す○ 雑談抄 連俳ふ若紫を春ふ用ひ、花紫と秋ふ用ふ、本草ふの説のごく、二三月花と ゐつゐゐ、和ふあるとの、秋月花とゐつゐ〳〵一種あるや 考ふべ〳〵、若紫ハ春月の嫩苗とゐつゐ〳〵

**三月**

池沢の中ふ生ず二三月白芽を生ず、筍の如〳〵、 **若蒋** 本朝食鑑 訓麻古也 古訓古也 江湖 是蔬菜白蔬菜也、これを若蔬〳〵ゐつ あゐ部鮎の子の条ふ云 此時農民種と撒の節とす、九立春ふ **若薤**

**忘霜** 八十八日の夜ゐり、必霜あり、諸木の花房嫩芽こをふゐ時ハ多く枯る故ふ此前後霞を以て是を蓋ひ霜気とゐ〳〵、こをを侵さ〳〵めず、宇治の茶園殊ふこをと畏る、八十八夜ちぐる時ハ霜と防ぐの葭簾と撤す、八十八夜の後さ〳〵ふ霜 故ふ忘霜別霜とゐ〳〵

**か**

**正月**

**門の神棚**

李吟日在家の妻戸ふ掃と構へ神を祭て夜へ灯と供へ侍るそ〳〵○お其義と詳ならず、按ふ月令廣義ふ云、除夜門神を祭る注ふ道家門神を謂て左と門丞と右と戸尉と千、葢一門と司どるの神と、其義桃符よ〳〵本で、神荼鬱壘を以て、邪を辟る故ふ

**門松**　立松

こゑと千門ふ樹るゝ〳〵本朝も此意ふ據う

**飾松、飾竹**　世諺問答　門の松立るそ、昔よりあるそ来るまれ〳〵、松ハ千年と契り、竹ハ万代と契るものゆゑバ、年の始ふいそひ用るう、

**飾縄、飾藁**　注連飾

同上　もめ縄とゝもの、左縄ふうて、縄のもゝとをそろへぬをそろへぬるふるゝ、のゝ左ハ清浄ちるゝ〳〵とをそろへぬをそろへぬるふるゝ、ちう、浄不浄とゝもつ故ふ、神事の時ハ必引ゝ、正月の神を祝ひ祭るゆゑ、ちう、

**飾炭**　本草　細目

白炭除夜立之戸内亦辟邪悪云ゝこの義ちゝ〳〵、

**飾海老**　紅鰕、俗ふ伊勢海老とゝ、或ハ鎌倉え

びとゝも称ゝて賀祝のゝ〳〵国俗春盤ふゝゝを用ふ、

**門の禮帳**　明世説新語排　京師節日主人



皆出賀惟置白紙并筆硯于几賀客至記其名」**數の子**

ゝれ本邦ふて年始五節供ふ出す賀客帳ふ同ゝ

**本草**　鮒の子ゝ臓月歳始及び婚家ふて規祝の肴ゝゝ多子の義ふ取るゆゑ

**搗栗**

**和漢三才圖会**　搗の訓を勝の字ふ

ゆゑ、諸勝負の利あると悦て用之

**かんと祝ふ**　部

雑煮の条ふゝ

**懸鯛**　**紀事**　元日小鯛魚一双蒿索を以て両喉と結び歯朶并由都里葉を挿く竈の上ふ懸て、是を掛鯛と称す、六月朔日ふ至て、和ゝ美〳〵〳〵食之云ゝ、かくのごくゝする時ハ温疫痢病諸の邪気を辟ゝ

**粥木、粥杖**　十五日　粥の木ふて女の尻とうてバ、男子をそろつ児ゝと

ゝ打ゝゝゝ、女ハゝゝゝぐと防ぐゝ、扨草紙、狭衣物語ふも

みゝゝゝゝ、ちゝゝぐと本文たゝゝゝべ　**紀事**　追加ふ云、信濃、飛騨、三河の三國ふそゝ漆撲の木と一尺二寸ぶゝふ切り上下より削みゝ、さゐの方ふ左巻のゝゝち或ハ柳櫻花のぐゝゐそのと紙ふゝ切ゝ粘ゝて松煙ふゝゝゝと燻べ其かゝちとゝ除ゝゝバ白く其摸様残る是と名づゝて御

祝棒と云 新婦ある家毎に入く 粥柱 粥の中へ餘と入く食ふと新婦の腰とゝり、兒童の戯るゝに、粥柱とゝ、七日の粥とゝ入れど、十五日の粥ゝハ往古ゝゝ入き來りゝ男踏哥の条ゝ出す、

**鏡閇** 閇とゝる条ゝ云 **獺魚を祭る** 礼月令 孟春月獺の祭りゝてゝゝ瀬田の奥ゝ魚を 埤雅 獺取レ鯉於水齒、四方陳之 祭魚、孟祭其先 進而弗食也、世謂之祭魚 **香散見草** 梅の異名ゝ○山ゞとの彩ぞふさけるかざゝゝ色ゝと香ゝとゝなれゝゝ

**三春物**

**霞** 和名抄 唐韵云、霞赤氣雲也 和名加須美 ○吾邦のくかすみとゝゝの字ゝ 御傘 水辺にあくべ霞の網小似るとゝゝ、あれり、 **霞の網** 家集 小夜ふのくゝ衣手ゝの袖ゝゝいる月とゝゝやゝるとの 聲物ゝゝ **霞の海** 水辺にあるぞ 蜑のゝびごゝ 正徹 **霞の衣** 御傘 衣類ゝあくぞゝ、是も形容ゝ、古今 春のゝゝる霞の衣



為ゝゝゝ

**陽炎** 簸纏輪 陽火赤遊同物二名ニ、春気地より升る
を陽炎或ハ陽げろふと云、同物二名ニ、春気地より升る
又降ると云 **川柳** 水揚ニ、其葉円うして尖り、枝短
く硬くして、水辺ニ生ズ又蒲柳と
云、川ぞひ柳ハ只、川辺の柳と云ニ、 **門柳** 陶淵明宅の辺ニ手づから五株
の柳を栽ゑ、五柳先生と号す **風見草** 柳の異名ニ、 蔵王 あづさ弓春の梢ニ風
見草のどけさいろのうちかすむ

## 二月 春日祭

上申日ニ大和国添上郡春日の郷ニ、大中納言の内一人奉幣の義
ニて上卿往還の間雨ふるごとく、祭の
前日、春日の社家祭日の支干と南曹の弁ニ告、朔日ニて
関白氏長者并諸家門外ニ僧尼 公事根元 **亀戸天神花踊**
輦車服の輩不可入の札を立
廿五日 江戸本所の亦、亀戸村ニ二月九二日花踊の神事ニ、
祭礼八月廿五日ニて、本所牛御前と隔年ニ

**貝寄** 雑談抄 天王寺法花記ニも粗其旨あるごとく
ニて赤詳、二月廿日前後ニ難波の浦辺ニ吹風
を云ニ、仏縁感動ニて竜城の魚鼈鱗介の種類
の浦ニ浮ニ出て、此會ニ値遇ニ奉る謂ニと伝へ侍る、
此沖津風ニ濱へ吹ニ寄ニる貝と拾ひとりて、聖霊会供
養の造花ニ着て上宮太子の前へ献ず **髪草** 本名未詳、九二月ニ生
ニて其葉三四寸バかり、叢生ず、女児春月是と採りて
ニ、恰と麥の苗葉のごとく、故ニ髪草 **白鳥**
髪ニ結び髪と組のごとく折びとす、
の名あり○又雛草と云為忠朝臣の哥あり、

**かほよ鳥** 景鳥 八雲御抄 白鳥ハ春日山ニ多くて、
尺恋するものとり夜昼ニず
恋すとの云ニまぎらかしくも春の野ニ鳴ク、源氏物語
若菜巻ニもあり、是其鳥と定る事但定家不知之と
り、ニ、ニを推ニ只ニ〳〵ニさ鳥ニ未決之 哥林良材 かの
花ニ〳〵ニさ花心、白鳥同じ 仙覚抄 此鳥ニうぐひすニ鳴声
と名とせり 湖月抄 白鳥ハ深山ニある鳥ニ、常陸国ニ、
杜若と云ニ此花咲時鳴と云ニ〳〵○蘇文曰、白鳥

## 三月 寒食

荊楚歲時記 去冬至一百五日、有疾風甚雨、謂之寒食、周礼 炬氏、仲春禁火于國中、注 季春將出火、琴操 介子綏、五月五日以死、文公求之不出、以火燔山、冀以得之、民為之寒食、一百五日を寒食とす、其説已ゟ互ゟ異あり、五雑俎 鄴中記ゟ幷州今子推が為ゟ火をたつること三日、漢書周挙傳ゟ太原今子推が骸を焼と以毎冬中一月寒食ゟ、魏武帝の時、太原上黨冬至後百有五日皆火を絶す、訛を以て訛を傳ふ、唐の時ゟ至て遂ゟ普天皆然、而滅ス、民間禁を犯すゟ至て、雞羽を以挿て灰中ゟ入るゝ焦るゝの八輒死を論ず、是何等の刑法ぞや、國朝大と禁ぜざると其見卓矣

## 杏の粥

玉燭宝典 寒食ゟ大麦粥をつくり、杏仁を研て酪〳〵錫を以て是ゟ沃、

事文類聚 寒食ゟ麵と以て慈餅様をつくり、

○棗の粥、つくり、棗をまろめとゝ、疑らくハ棗粥ハ棗餻の誤ゟ欤

○揚花粥、

ゟ萬花裏と雑ゟ揚花粥を煮ゟ、

玉燭宝典 居人寒食ゟ遇

晴精飯、潜確類書云、洛

青飢飯、陽の人家寒食



かゝるゟ鳥ゝゝ鳥一物ゟゝ、何の鳥とゝも定めがたきゟ

ゟや○此外諸書ゟさまぐ〳〵の説あれども、うるさゝ

## 帰鴈

今ハの鴈 月令 孟春月鴻雁來、淮南子 燕春分而來、雁春ノ分而去○今ハの鴈、今ハとハ今ハかゝせんもと云心、今ハかゝんと思ひらを

さゐとゝおめり 猿簑 立さるぐ今や紀の厂爰の厂 澤雉

## 鳴亀

夫木集 川越のをちの田中の夕闇ゟ 為家

何ぞときけバ亀のかゝるのやうに、あゝハとゞ

長明無名抄 井手の蛙とゝゝそ、こゝやうあるゟゝて侍き世の人おゝひまぐるハ只ゟゝる八皆うそ侍ちめ、それもたゞひまぐべきをゞ、ゟゝずゝ只この井手の川ゟゝ侍るゝ色ゟゝるきやうゟゝ、まぐ〳〵ゟゝずゝ、ようつ後のかゝるのやうに、あゝハとゞいと大きゟもあぐ〳〵ゟゝずゝ、ようつ後のかゝるのやうに、あゝハとゞゟとあゝ〳〵ゟゝずゝ、ようつ後のかゝるのやうに、あゝハとゞ夜ゟゝるゝぶゟ鳴ゟゝゝ心ゟゝとゝてあゝれゟゝる声ゟゝもぐる○無声の蛙ハ、江戸小石川、無量山壽經寺傳通院の開山了誉上人聖冏和尚、勤学のさゟゝげんとゝて一山の蛙を封じゟゝゝるゝも、當山の蛙今に声ゟゝとゝ傳ふ

## 無声の蛙

為家

ハ揚拘の葉をもて飯を染ふ色青くもて光あり、是を食へハ陽気を資く、道家ことゝと青精飯青飯とゝふ、

○桃花粥 金門歳節 寒食ふ萬花輿 ○楡柳の火 周礼 を粧ひ桃花粥を煮ふ ○

四時回の火を変ふ、春ハ楡柳の火と取、夏ハ棗杏の火を取、季夏ハ棗拓の火と取、秋ハ柞楢の火と取、冬ハ檀檀の火と取て 侍臣ふあたふ、陽気ふ順ふ、 かぐ〳〵草 櫻の異名、

取る 鞏下歳時記 唐楡柳の火と

〳〵きの大官人ハ〳〵ふ古哥よゝ名づく

樺櫻 大和本艸 多識篇

樺を〳〵と訓るハ非し、かゞ〳〵ハ一重櫻、

加尓波、今云加波佐久羅 ○樺櫻ハ山櫻

の属古今ふ、ふそざくらとの

唐楊貴妃傳 明皇嘗て太真妃と召す、妃酒を被て新ふ起く、帝曰、此乃ち海棠の睡未足 海棠 雑談抄 俗に 耳」、抑もゝ花の名ことに出ろ 柳葉 柳の花とゝん で柳の葉と称す」按ふ柳の花三月未開、依て宗瑞ゝ 柳の秧とゝ、柳の葉ハ京坐の俚語ゝゝ、柳の花とゝ、



本艸の説を四月開」花とゝ、元よゝ四月の季ゝゝ、季吟が増山井ふ三月ふ出す、是ゝゝ秧の説と云ゝ、京畿の児童柳の花の蒂抜落ゝゝを拾ひあつふ、菓稽ふ貫き連 柳葉 玩弄す、是と柳の葉を繋ぐとゝゝ、花ふ治定せゝ、

雁風呂 秋ゝの渡る時小き木とゝゝ来る、是と海上ふ渡ふ其止 ふそ羽の労と休む、其木を、南部外ケ濱辺ふ落ゝ、 又春ふその木とゝゝ帰るふ、残る木多くあゝハ、人ふ捕らゝ又ハ死せ ゝのあゝ父故ふ其木と拾ひ、供養の為ふ風呂と焚て諸人ふ浴せ也、

蠶飼蠶棚 先代旧事紀 蚕と養ふの法、養屋の 蠶蠶 蠶屋 西北ゝゝて一の祭棚と設け、注連 を曳て常ふ蚕神と祭る、預て棗の大葉と取、陰干布干 ゝゝ、ことゝと籠箱の中ふ納め、これと祭棚の上ゝ安ス、蘭宇 蝶を出す時ふ至て、其干葉を取り葉の上ふ置て蚕種 を産しむ、産已て、種子と汲て籠箱ふ納め、老蝶を以ゝ 鋪幣ふ宿ゝ、同く祭棚ふ安す、 和漢三才圖会 ゆゑ作らんとする時、葭簾を用て棚とすゝ凡蚕已ふ生て 稍長ずるのゝれと籠ふ箱ふ入ゝて並べ置の処ふ移 と蚕棚とゝ、 尓雅 蠆桑蟲也、雖由楊蘭也、蕭蒴辣ゝ、藥ゝ、

之輩皆各因所食之葉命名云〻桑蚕ハ食桑の蟲故
み名く○蚕屋ハそのかち蚕をゐ家〻蚕家ともいふ、

**蛙のめかる時** 夫木 はとめ子と袴をせで夜をあす

多みめく蛙のこゑ〻 年浪草 是ハ俗ふ蛙のめく時とて、蛙の鳴ころ眠を催をとそ〻〻〻○此めく
る蛙と、目と借るとゝ云心こ夜短く眠を催すと蛙の人の目を借よ
うとて俗諺〻 西華集 卯花と月夜と見こう山鴉 里ハ焔

炉の匂ふ門ゝとゝる腸匂の評ふ支考曰、其頃蛙のめく時
あゝん日永く夜短くふゝ秋ずく〻〻、 葛松原 閑子鳥
あくや蛙のめく時 珍碩○年浪草、俳諧歳時記をふ
只めく時とのを出せる八〻〻〻

頭坊ゟ〳〵施行の儀あり、近国の貧人乞丐數〳〵来集ゐ、

雑談抄 長州平野大念仏寺の本尊、一仏十菩薩の画像ニ供すゑ朝の餅を、歳首ゟ吉野山蔵王の神人参りて此餅とも請て、奴蔵王權現へ備へ供養式終て此餅を破砕多くの米ゟ〳〵炊ゝ又餅とゟ〳〵、今朝日本堂ゟおろして諸人ゟ施す是を餲飽とゟ、又吉野山中の僧俗へ不残賜ゟ〳〵云〻、〇山を国軸山と号〳〵、寺を金峯山寺、蓬摘

本艸 春月嫩艾を采て菜ゟ〳〵食ふ、或ハ麪ゟ和〳〵て餌餅とゟ子〳〵一切鬼悪気と治す、大和本草ゟ〳〵を灸治ふ用ゐ故ゟゑ〳〵ゟと云ゟ、次ゟ五

## 三月

月五日ニゟ云〻、

## 楊花粥

本朝食鑑 艾餅ハ嫩を艾苗と采り豈ゟ〳〵煮熟〳〵く、蒸糝ゟ合セ搗ゝ餅ゟ作ゐ、三月〳〵の三日必ゟ〳〵此餅を用ゐ賀祝ゟす、

## 吉野の會式

十日、吉水院の寺説ゟ云、大和国吉野山子守勝手の両明神の神輿、本堂へ渡御、旧記ゟハ三尊両社の宝前ゟ〳〵、一切経会修行とあゟ〳〵、中古ゟ来仁王会修行す、法事とゟ〳〵て、両神輿還幸、又云、三月花の頃とゟ〳〵て花会式と古来ゟ〳〵傳ゟ〳〵云〻、山中行事二日数〳〵のぐさホもゐ〳〵、花会式とゟ云ゟ〳〵て、花見のゟ〳〵

## 吉野草

櫻の異名ゟ、吉野を才一とゟ〳〵、

## 楊貴妃櫻

奥福寺の僧玄宗とゟ〳〵愛せ〳〵故名とゟす、一説ゟ、此花大輪ゟ〳〵て紅色を含ゟ海棠ゟ似ゟ〳〵、故ゟ海棠の雌とゟる故事〳〵ゟ名とゟすとゟ〳〵、

## 呼子鳥

此鳥のこと、古今集三鳥の一とゟ〳〵ゟて諸云〻、又ハ山鶉又ハ鴬、郭公ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵

みく腹ハちぐ〻鷹のごく、足ハ鳩よく似〻高〻、又曰、かほ鳥ともこの鳥〻今俗のかんて鳥ともこの、喚子鳥の字音よう〻誤ともく

## 大

## 正月 宝船數 大晦日より元日小至るの夜

## 大黒舞

悲田寺垣外の類、大黒天乃姿を摸〻面とぶう頭巾と着く、民間の門〻を唄ひ舞ふ、年〻嘉祝の詞と以く新作〻て唄ふ故ふ此唱哥をとも大黒舞ともゝ、○江戸みて大黒舞ともゝ、狂言物真似をもるが、こゝも非人のぐいすく

## 搦

和漢三才畫会 太知波奈の和名ハ搦類の惣名也、今ひとふたもちぐるとも称もるものハ乃ち包搦こ、○大和本草二、搦と密柑と子○時珍曰搦、品十有四、

月令廣義 正月初二日、賜搦於群臣、則古今以搦為嘉祝之果、

和名抄 橙 奈 和漢三才畫会 五月小白花と開く、凡八年を歴ともの実と結ぶ、霜後黄熟す、其辨苦くて微〻酸食ふべく、春に至〻色濃く久きふ耐ふう、夏う

後色と変〻て青〻新舊雑ずて〻、故小俗ニ呼く代〻と名づ〻不改ともの、以て嘉祝の果ともす、

## 俵子

名義未詳、按ずるふ奥州金花山小近き海辺みく、海胤を取と金海胤と云其形あるも俵のごく、祝語ともふう、

春耕糸切歯 俵子ハゴマメ、小殿原

八武家の祝語、田作ハ農家の祝語、俵子ハ商家の祝語、○南海ふく、海胤と俗ふ俵子ともふう、

## 田作

小殿原 和漢三才畫会 五万米鹽ふ、正字未詳、一名田作、又古止乃波良ともふ、

## 店卸

商家ふて、去年中金銀の出入箕用、又ハ賣買の利不利の高まを改めもるを店卸ともふ、

## 大元師法

延喜式蕃式 凡大元師法、毎年正月起八日至十四日一七日於省修之

公事根源 治部省ふく七ケ日是を行ふて、蔵人内蔵寮の官人ともて御衣と給く壇所まおくる、御衣箱ニ入緋のつゝ〻是をゆふ、御所ふうるゝ蔵人封と付く、是と治部省ふく、御祈をいたくるゝむ、結願の日ハ、御衣ととの如く返上もるゝ、○師の字ともゝぐ〻左へぐんの法ともゝぐ〻、

## 種物

神代巻曰、

以粟稗麥豆為陸田種子（テウト）以稻（イネ）為水田種子（コレヲ）因定天邑君（アフハラギミ）云々

**抑**　称美の名、玉掃玉拍（タマボウキタマハヒ）などの如し

## 二月　薪の能　兼三春物

七日より南都興福寺南大門新の能をはる、元是興福寺夜中の法会の間、寺僧の奴僕春寒ふたゝび至りて、門前にて交々勤之、八日も亦かくの如し、九日より十四日臨時ふたゝびを勤む、七日之間雨ふるといへども、若官の前に於て芸を施す、其日次座門能と徒に告ぐ、俳優と称し、長夜のおひて火を焼、其光ふるとも、戯をなすのみ、其後金春観世保生金剛四座の業両座東武にあそび、南都休暇の両座これを勤む、今七日二座交々勤之、八日も亦かくの如し、九日より十四日臨時ふたゝびを勤む、七日之間雨ふるといへども、六十四日に至りて、初日の一座最

**鷽化為鳩**　月令　仲春之月鷽化為鳩

**蒲公英**　本朝食鑑

倍ふ藤菜と称す、或ハ鼓草と称す、倶ふ名義未詳○

雑談抄　タンホヽの名、鼓草とふるゝ名よりて出ふるを、

**田螺**　和漢三才図会　和名太都比（タツヒ）、俗ふふ太仁之（タニシ）

種井、種浸、種

## ふせる

紀事　二月廿日用の中、吉日をえらびて農民旧穀の種と水田をふせ、苗代を作る彼岸の前十日穀と水をふせ、彼岸の後十日ふ取出し種ともろ〳〵を苗代へ播、六七日をへて苗生ず○種井ハ種を漬る井をいふ、

## 大根の花

時珍曰、春の末ゐ高〳〵葦を抽て小花を開く、紫碧色あり、

**田畑野山焼**　介雅翼　野人今歳山を焚ときハ来歳厳菜敏ふ生ふ

## 三月

## 高雄の法華會

十日　安良比花　三月十日紫野高雄縁起云ふ人ありて高雄の法花会ヤスラヒハテヨとふいへるとや、やすらいまつりともやすらひ、百練抄　久壽二年四月廿日京中児女風流を備へ鼓笛をならし紫野の社ふ参る世ふ夜須礼と号す　勅ありて禁止す　紀事　今日やもすらひ花の神事　辰刻ばかり上賀茂南上野村の土民烏帽子素袍と着し、或ハ異形の装ひをなし、各一村の揔堂ふ集ふ人村里の中ふ一草堂を造て、常ふ僧ふをきて守らしめ、支ある時ハこの堂ふあつまりて謀る、これと

捻堂と号す、是より先光念寺の北上の御前の社ゟ詰て、各異口同音ゟ安乐比花と唱ふ、太鼓横笛その節と助く、その後大源菴の社下の御前の社る牲て、れの〳〵踊と初り、もとして上野村の捻堂ゟ帰る、是ゟ〳〵北一の里正の前ゟおいて踊早て各家ゟこのる、又上賀茂、梅辻、邑本、河上三ケ村の土俗、今宮ゟ詰てれの〳〵踊と催すこと、上野村の如し、もと〳〵て後各賀茂ゟ帰る、時ゟ社務及社司の家毎ゟ踊とあす、到る処其家の主人肩衣を脱〳〵これを着す、是と期として踊と止む、これ纏頭の微意歟 傳へ云、春時疫疠多〳〵行る、今宮ハ疫神ゟ、故ゟ踊と初り〳〵神灵と勧め祭ること、或説ゟ、花まづ先の祭ゟ〳〵花落と惜こと風雨ゟをこと祈る、故ゟ安らひ花とをこと、又一説ゟ、今日高尾神護寺の法花会動れバ魔障ある故ゟ、踊と催〳〵魔と防ぐ故ゟやう〳〵の花とをこと、安らひ花と八法花平安ゟ終ると祈ること、此説すこぶも むさゐ

雑談抄 その祭ハ、寂蓮が奥行七〳〵処こ今土人の囃し唱ふること、寂蓮の作ことて、

夫木 高尾山あれありける

つとめあやまり〳〵花と

廣韻藻 竹秋三月也、

蘭秋七月也

贊寧竹

西行

竹秋



譜 八月ゟ為春、二三月ゟ為秋云〳〵

辰法ニ以人為万物之霊故謂人日也

礼 正月 霊辰 唐李嶠ノ人日詩七日最霊

二月 列見 公事根源 上卿弁外記史ゟ催ゟ、太政官ゟて、六位以下の芸能あるものとゝのへて、式部兵部の二省ゟて率〳〵てまゐる、上卿めしよせて、器量容儀と見るこゝろ、挿頭の花と上卿以下冠ゟす、大臣ハ藤の花、納言ハ櫻の花、恭議六位これ非参議以下ハ時の花をこゝろ云〳〵、江次第云、列見、二月十一日、諸司長上、成撰人列見太政官ニ省卿之

和名抄 和名以多知久佐、一名以多知波世

連翹

そ 正月 奏瑞 ち部朝賀の条ゟ出ス

雑煮祝 かんと祝ふ 雑談抄 雑煮ハ餅ゟ大根、芋、蒟蒻、鳥、打あはび、ゆで、菜ゟと加へて羹ゟと云、雑煮と称するゟ是を畧もて、羹と祝ふこと云、

燕民将来 やう部、

厄神詣の 送窮 九日 四時宝鑑ふ云高陽氏の子、衣糸ゟ出ス

の敲ゟこゝろと好こゝゆと喰ふ、正月晦日

死す、世ゝ糞と作り破衣と巷口ゝ捨く貧思とのぞく、
又池陽の風俗正月九日と以く窮九とす、屋室の塵
穢と掃除し、是と水中ゝ投ることと送窮と云、五雑俎 謝
肇淛曰、俗説ハ信ずるゝ足ず、窮也幼也窮也皆晦盡の義也、
諸月といえずして、独正月とりその八其端めと挙ろし、
○按るゝ送窮ハその方ろゝ晦日掃あつめ、

## 兼三春物 素麪海苔

色青黒〳〵海
素麪是ろり、

## 三月

## 園韓両神祭

雍州府志ゝ舊
宮内省ゝあり、後
禁庭ゝ移す、古ゝ春三月冬十一月上丑日ことを祭る、冬
誤て人祭所ゝ就て事と行ふ式西宮北山両狄ゝ詳あり、
相傳ふ延暦年中迂都の時、處と他處へ易んとす、神
託〳〵て曰、唯この地ろりゝゝろふ皇基と護るべし〳〵、今ハ
其社あり〳〵惜い哉 紀事 追加ニ云、洛陽醒井通り高辻
上ル町ゝ社あり、延喜式ゝ所謂園神
一座、韓神一座ろゝ是ゝ今本荒神と云
井 部、若 紀事 江州大津の人、三井寺門
水の条ニ出 前の人と、各野原ゝありて、左右

## 正月

## 包

## 紲曳

## 列〳〵

ゝ分列〳〵て互ゝ大紲と争ゝ引、西方ととゝ太鼓とちた
たくのふるをゝ進む、勝方其年福とうるとゝ云、是と綱引と
称す、十三日より十四日の朝ゝ至てつぎをのくる
去るとゝこの戯を所〳〵ゝゝみ 列〳〵

## 継尾鷹鳥

あゝ部、鳴鳥狩の
条ニ出

## 土筆

和漢三才圖会 春月土より
出ス、状筆の頭のごとく〳〵

## 兼三春物

## 摘草

雑菜摘 通俗志 雑菜磯菜
雑ニ摘ハ春と云ろり、

## 角組芦

芦角 ○支考曰、あのそえいづるハ牛の角の如〳〵、組ハめぐ
芦錐 むし、○野相公詩ニ碧玉寒芦錐脱嚢 新古今
三島江や霜もやぐむめ芦の葉ゝ
角ぐむなどの春うせぞふ〳〵 通光

## 椿

山茶、海石榴ゝ
をつぐることゝ訓ス、

和漢三才圖会 其葩厚く大きふ艶義ありて牡丹芍薬ニ
亞ぐ惟恨らくハ其蕊むしろき甚醜く、其落るも亦脆き
のゝ、單の瓣赤きものと山椿と名づ、此乃ち本源あり、
白紅粉絞て紅或ハ白相半す、ハ重千瓣の種枝挙せ
ず、秋〳〵蒼と生じて、春花と開く、冬開〳〵
そのと早椿と名づく、人以〳〵賞す 列〳〵 椿

万葉 巨勢山乃列々椿都良々々々見乍思奈許
端乃春野乎」此哥より作例とすべし、○
木の数本列あるを云、○ 唐椿、葉狭く長く色淡く
生ずる椿といへり、○ 椿、澤あるべし、葉の紋横細う
み〳〵髪状る似り、其花重弁大きく、○ 玉つばき、
して正紅なるいわゆる蜀茶これなり、
荘子 大椿 これをのみ、八千歳を以て春とし、
○ 八千代の 王椿 八千歳を以て秋とす、 後拾遺 君が代も
おぐらもおぐら王椿ふたたび色八あらためやも」 ○ 二階
こも荘子にいへる大椿を云、○ 椿、山茶を准ていふ、 猿蓑
○ 伊勢 椿、 花形のかたち種の名おほし、○ 落椿、 散椿、 笄も
別種の名おほし、
くも昔や 蒲公英
ちる椿羽紅 蔊草 の一名なり 二月 接木、接穂
月令広義 梨と接ぐふ、春分の前十日と用ふべし、 蔦の若葉
ごし、柳と接ぐふ、春分の後十日と用ふべし、
大和本草 地錦 葉ハ衣の紋ふ付ろつふ似り、冬月葉落
ず、秋ハ紅なり、又常のつたよりハ冬葉落つ、秋ハ紅葉す。

この両種の若葉遅速あり、冬葛
ハ并ぐち遅く、夏葛も早し
淤波、天女、和名、豆波久良女、俗云豆波久良、又云豆波女 和漢
三才画会 燕ハ玄衣白頸赤黄の頷に、春来り秋去る、催晨
と表裡ろ、其飛翔ること甚捷く、直ふ翻り仰き亦能
飛他鳥のおよぶべからざるところ、故ふ鷹鷂あって敵せず、○
時珍曰、泥をつゝ、屋宇の下ふ巣ふ、 三月 芽花 本艸 白芽、巣ハ
茅とは白 花を開く 油桃 花常の桃より小さく、 衰枝折
花を開く 油桃 和名抄 李桃 和名都波岐毛々
其ニハ花の墨つぼの形ちるゆゑあるべし、壺墨入の意ならや、

蹯躅 千金翼方 羊ニ食ハバ躑躅ニ当て斃死す、
故ふ名ろり、一説ふ羊の性至孝ゝ此花の赤ニ者
とゝゝ母の乳と思ひ躑躅〳〵て膝を折〳〵飲之故ふ名
云 躑躅衣 桃花御記 面蕪芳裏青打 三月着之 台記
つゞ面紫裡紅、岩つゞ面紅 躑躅下重面蕪芳裡紅打 唯心院御抄
裏白つゞ面紅 ○ 山つゝじ、時珍曰、高さ二
四五尺低ものも

二尺、枝少〻花敏〻、一枝数蕚、二月始て花を開く、紅
ありて紫なるあり、五出なるあり、一名紅躑躅又山
石榴又映山紅 ○白 万葉 細比礼乃鷺坂山乃白管
又杜鵑花ともいふ 躑躅、 自吾尒尼保波久妹余示 作者不知

○羊躑躅、韓保昇曰、小樹、高二尺、葉ハ桃の葉に似て、花黄し、
其の花も似たり、 和名抄 羊躑躅 和漢三才画会 羊躑躅ともに一豆八九
知豆 ○蓮花 ツジ之 つゞ、蕚、遠望ハ蓮花の如し、故名之ともいふ、
按に本草ハ羊躑躅と蓮花ツジト訓ス、韓保昇が説も亦蓮
花ツジし、麝ツジ、羊躑躅同物と見ゆれども、倭俗別種なり、

○浅葱 大和本草 葉ハ大蒜に似て小く、色アサギ云〻
はなじ、小木にして、花ハ棉花の如く小く、色アサギ云〻
大山の岩上にあり、 同上 紫花春咲木の高
深山つゞじ、 ○紫の山つゞじ、一丈許なるを、常のつゞ
の三倍の大サありて、花〻ハ〻葉三角にて野州日光山中に
多し、土人ヤシホと云、又白花のものあり、又玉人白ヤシホとふ、
姐 洛外山中に多し、花紫色、小輪紫の 瓔珞
○つゞじ、 映山紅の花に似て、葉三角にて花可愛

紫の花小さく、枝に連なり咲て下り垂るゝこと瓔珞のごとし、故に名づくと云、平戸ハ九州の地名にて琉球より出づ、四月花と開く、単弁白し、其大なる者一二寸に至る ○段 つゞじ、ハ地名にして、上賀茂の南の山に壇と云所あり赤紫 ○茵芋 本草 綱目 鱗蓮花四種のつゞじを壇段両字共に書来りサウキとも訓ス

○おいつゞじ、 和名抄 山榴、和名阿伊豆々之 本草 時珍曰、深紅色者即山石榴云〻

○そらしま はまじ、 白紫の数品あることを大隅国霧島山よりして出せるや

年始状 注ニ不及 子日遊 は部、初手の条に出

日の遊に着用の衣とえべし、

猫の妻戀、猫さかる 雑談抄 此者陰獣之然ハ陽気に犯されて交合と好むなり、猫の恋と云

二月のこれ 仏のわざを 摂厳経 涅槃乃清浄不死不生之地、一切修行者所依帰注

超脱輪廻出離生死之地と云ふ、死とは如来御年七十九、二月十五日大衆に示し已て、頭北面西、右脇にて滅したまふ也、○涅槃像は、五十二類、天道、人道、地の三十六禽、洪河の鱸魚、天地の間に生を受くるもの皆愁歎の容形を画く也、

是と二月の別仏のことを去ル仏おどやかすなり

## 正月 菜摘川神事

七日 神社啓蒙 勝手明神の社、大和国吉野川に祭る所の神一座、受鬘受神、云ふ毎年正月七日、此社の神人氏子の男女、此川の辺に至つて、若菜をつみ、勝手御前の神供に備へ、祭祀をなす、故に菜摘川神と云、 公事根源 内宴と八、もつぱら、の節会、仁寿殿事と云、 **内宴** ゆゝしく行はる、文人どもを題をあたへて、詩を作らせ、やがて御前にて講ぜらるゝ、

## 七日正月

俗に正月七日を五節句の初として、七種の菜とくゝ遊宴をもてなす、義とは、是と七日正月と云、下賤の輩、正月七日ばかりは、ホの日と正月とにそろふ、恣ふ遊びをもとゝす、

## 薺打

荊楚歳時記 正月七日七種の菜と以て羹と作す、是と食ふ人万病なし、○七種は芥、薺、蕓蒿、



蘆、仏座、蘩蔞、

世説故事苑 七種の菜と打を、諸子の考いまだ見ず、按ふに事文類聚に歳時記を引て曰、正月七日多く鬼車鳥渡る、家ゝ門を搥ち灯燭を滅して、こゑを攘ふと、和俗七種を打ふ唐土の鳥ゝ日本の土地へ渡らぬさきにふと唱ふ、此鬼車を忌む意ゝ汲と打ふ鬼車鳥の止まらざるやうに攘ふゝ、

太平廣記 鵂鶹ハ即鴟鴞ともゝ人一名姑獲一名夜遊女又ハ鬼車と名づ、春夏の交稍陰晦の遇ハ飛鳴ゝ嶺外ふ過ぐ、左多ー人家ニ入人の魂気を錬ず、或云、常ふ血を滴らすの家ハ凶咎あると、云ゝ

## 鳴鳥狩

泊山 朝鷹

鈴さすハ、○泊山と八山野ふ出て宵ふ雉子の鳴所を聞置て未明ふ行て鷹ふ雉子を捕らする、

継尾鷹鳥 継尾鷹鳥、

を、泊山とも、鳴鳥狩とも、聞をゑ鳥とも、朝鷹ともゝ云ゝ、○鈴子指ハ鷹百首抄云、是ハ泊山泊狩のあさたふかけくる鈴ふ鈴子と云をのをさして、鈴の鳴らざるやうにゝ、鷹とすゑくゝ狩してゝ合するゝ、鳥とたぐゝとの義云ゝ、○継尾ハ古へ継尾の鷹とゝをのあるを鵠の尾を汲ゝことをを接ぐ、何の用とゝをとをちゝず、近世尾羽

損傷して或ハ短小あるもの他の鷹の尾と以てこれを接

## 兼三春物 永日 避日

詩国風春日遲々

## 二月 苗代

朝食鑑 二三月蒔をのと民俗苗代と云籾種を用て俵子ゟ売て川水ゟ漬す十五六日或ハ十八九日及び九日三五十日もすこしを籾をあらひ取出して俵子と云ひて又四五日六七日と経て後ゟ假田ゟてきと蒔と苗代と云〇苗代と云名ハと種とをろす処の田をさして云ふ代とハ畝の数ゟ五百代千代ゟ云七十二歩と十代とゟ云ふをして田畝の数ゟ水と引種蒔ことの名目と代ゟ同じくさて轉ゟくゟく春田ゟ水と引種蒔ゟ苗水と浮さゟバ拈ろ故ゟ苗ゟ云ふ

本朝食鑑 凡稲苗水ゟ引の祭と云〇早損水損のそなくゟ

## 水口祭

代水と引の祭と云〇俊頼朝目の説ゟ

せずとて苗代の水口ゟ幣ゟ立て祭るゟ幣串ゟ豆と一ぬきと祭るとゟ

和漢三才畜会 胡頽子大低火異あるのゟ一種春月ゟ當ゟて苗と種時実熟す大さ小き枣の如く苗ゟ時珍曰蔾ハ今人白菜と呼ぶ二月代胡頽子と云

## 菜花

黄花と云ふをゟ芥の如く四弁三月

## 苗代茱萸

和漢三才畜会 三種あるて其葉と実と皆

## 茅花

蒲公英の如くみて微硬く香気あるて三絞の撰の如く小児角と結ぶもゟ亦芥の如く

## 薺花

和漢三才畜会 叢地ゟ布て生ず形ち

本草 冬至の後苗と生ず二三月細白花を開く

## 三月 東の粥

大和本草 夏芽と虫を故ゟあつめとき〇麻文曰予在京の間東の芽たち又花をさゟふ上の説の如く夏ゟ俳諧活法の書ゟ三月ゟ生す恐らくハ誤ならん〇九東ゟハ四月小葉を生じ五月葉稍く長く葉の間ゟ小白花を開く微青し雪の如くて六出〇棠

## 梨花

時珍曰二月白花を開く雪の如くて六出上巳ゟ風ゟ多きバ実と結ぶて住あり〇梨

時珍曰棠梨ハ野梨ゟ處くの山林ゟあるて其擲梨ゟ似て小く二月白花を開くなる〇苧生の伊勢国苧生の

## 浦梨

浦梨の名呼ゟと云〇

## 奈良櫻

汝石集ニ奈良の都の八重櫻とさゟゆる八當時も東円堂の前ゟ上東門院與福寺の別當ゟ仰せてゟの櫻をゟ一ゟ身ゟバ堀さ車に

入てゐるを大衆、名と得る櫻を左右に奉らしめて、茶長法師八心僻事おこして打とめさせ女院さそひ出まゐらせ、あきそのと思ひ給へるに、夏ふかき色ふうーとそ、さゝば此櫻をば我櫻と名付んとそ、伊賀八国余野と云庄とゝせて、花ざきの庄と名付けて、かをとせぬか

## おとみ草

青白く、白華細豈生す、四月中子と生ずと時珍曰、猶荚ハ葉蒼耳ホ似て微長く、地茲ホ似く稍薄く、節ホ對て葉と生ず、皆細毛あり、肥壌えて一株ホ枝ご分つこと十八、九月小花を開く、深黄色ご、中ホ長き子をつく、徒然草

## 夏近し

めおとゝ云草あり、くちゐゆと訓ずるか、此草をつくるにやとぞ、

## 夏を待ら

## 三月 禮拜講

台記 後一条院御宇万壽二年大宮權現の詫宣ありて、叡山大宮の宝前ホて、法花八講を修すこと、以来毎歳三月十二十三日ごとを行ふて、是を本礼拜講と云、新礼拜講ごゝハ同月廿四廿五日十禪師の社前ホて、ごとを行ふ、是又後堀川院元仁元年、慈鎮和尚の本願ありて、

## む

## 正月 結昆布

新年の雜煮ホ加ふるもの、むすびこぶごゝ部廢の條ホ見ゆ、

## 二月 紫の塵

むらさきバごゝや、

## 三月 麥鶉

本朝食鑑 三四月田麦長ずる時、鶉の雌をらみく、雌ハ轉ずる事、子を哺ふる時あるごとく、陰乾ホするの數日ホして、炙て喰ふ仍てむ鰈と名づく、

和漢三才圖會 大さ尺ばかりなるものを塩水ホ以て蒸して半熟ホして取出て、

## 蒸鰈

会 春草麥の中ホ子と哺ふる鶉ごアイフと云ハ、

## 春草麥

## う

## 正月 裏白

雍州府志 ナキしゝ、

## 裏白連哥

北野社ホ、正月四日裏白の連哥あり、九連哥懐紙四枚ありて、中古執筆誤て、厄面と脫ー、て、厄面を白紙ごす、故ホ一枚ごとそゝー五枚ごす、依て号する歟、

## 諮初

嚫条ニ出

## 卯杖

江次第 上古有出御南殿白木ま部松ごす、

## 馬乘始

注釈ホ、子参上儀、近代不行、春宮被

献卯杖其ノ木槻三束、木瓜三束、比々良木三束、平保己三束、黒木三束、桃木三束、梅木三束、
椿三束、云々 公事根源 御杖とハ、持統天皇正月の卯日大学寮ゟ
是と奉る事、日本紀ニあて、又仁寿二年正月ニ諸衛府祝杖
と献ず、猪鼈とおなじ事ニて、是ハ悪鬼と拂ふ心、
作物所ゟ杖ニ作物ニ造物ニ、其上の岩ニ、の中ニ御気
の方の數をはらひて、卯杖ニあり、 雑談抄 今の世ニ賀
茂ニ、卯杖ニ、在家ニもおほくハ一尺余ニの白く削ニて
る木ニ日蔭のかづらを纏ひ、倶利
伽羅竜の形ニ作りたる物と、
一説ニ年中
の悪気をはらふ、

## 魚氷ニ上る

月令 孟春之月、魚上レ氷ニ ○孟春発端の
本朝食鑑 其生ずる三三寸
ばかりにて、氷ニ上るゆゑ、
ある事ニて、競ふもの
なり、

## 鶯菜

是を鶯菜と号すゆゑハ、鶯
の鳴く時ニ當り生ずる故、

## 土竜打

三光院御説 卯杖卯槌ニ
幾内正月十四日ニ
此事あり、貝原
先生の歳時記ニ、西国をさして此日薄暮ゟ明暁ニ至る
まで、土竜を打ゝて、藁と束ねて、地を打ことをゝといふ、浪花



おゝて、ハ此日地上と海嵐と縄おゝくゝ曳あるゝ鉦太鼓を
打て拍す所もあり 和漢三才図会 鶯 嵐ハ海嵐を畏る、常海
嵐の荏を以て、花園をおひ
うゝバ鶯おゝくゝへらず、ゝく

## 梅

確類書 梅四徳を具す、
初生の蕊ハ元ゝう、開花ハ亨ゝゝ、子を結ぶハ利ゝう、成熟
するハ貞ゝう、梅ニ四貴あり、稀なるを貴ぶ、
ぜ、老ゝゝを貴ゝく、嫩ゝゝを貴ぜず、
肥ゝゝを貴ぜず、蒼ゝゝを貴ゝく、開
品あげゝく計ゝがゝず、中華ニハ大庾山嶺梅多し、名勝の
地ゝゝ、日本ニそハ、山州日野、梅ヶ畑、鞍馬、高雄、伏見の
梅林、その外諸州ニ多し、凡梅のそゝ、
○飛梅、江梅、紅梅、鴛宿梅、
こめこうの梅、未開紅、鑓梅、越中梅、簸の梅
座論梅、○異名 好文木、この
告草、白草、香散見草、ゝ上ニあり、頭字の部ニ
ゝゝ尋見ろべし、○難波梅、中花みゝく白く八重ニゝく
淡紅ニあゝ、○軒端の梅、中花みゝく深紅ゝ紫のごとし、

單葉さう、洛の寺町、誠心院の境内ある、小式部の墳墓
のあるとて、つくゑ、和泉式部の愛やし処の木ありと、○行幸
梅、大花多く紅あり、千葉、○綸旨梅、うめやしき、
こゑさハ行幸梅とおぼゆ、その事ならつ、**梅屋鋪**、
臥竜梅、武江本所亀戸、清香庵とゑあり、数十株の梅と
ぐてつくれり、又一株の梅あり、枝條地ふ
**我世子梅**やそとゑ、故ふ臥竜の
横ふて、臥さる竜の如し、故ふ臥竜の **梅是山**
名あり、○白雲の竜とつむや梅花 **嵐雪** **梅暦**、○家暦、○
山中ふハ梅の咲とゑて春と、**梅が枝**ふ部、萬春集
知ると云心ふく、昏とつゑ、の条ふ注す、
**梅花衣** 拾念院御拙 梅重表濃紅裏紅梅、逍遥院御
抄 梅衣面白裡薫芳自十二月至二月、ニえ
**鶯衣、鶯袖** 藻塩草 荻枝折 おふ袖の腋縫ふる衣
ふ依て春 の袖ゑ東ふ袖とゑ、衣の色ふあるゆゑ名
かるべし、 **兼三春物** **麗** 杜詩 逕日 江山麗、○義
春色の百花咲乱る、鳥獣山川 麗、華麗、妍麗、おど続く皆
までもうつろふて春とおぼゆる意ふ、 詩経 出自幽谷
遷喬木 古今集

**鶯** 鸎の琴 和漢三才画会 其声円滑ふして短く鳴時、声
ふ随て両脚と五ふ挙て琴を弾手を揺す
ハ鸎の琴や、 **鶯笛** 徒然草 ふゑ、こゑゑ、
あとの作りて吹笛也、
**鶯の琴** 未詳、疑らくハ鸎の琴や、 **鶯の谷** うつる声ふくハ春くることと 誰のちすし、大江千里、○
清輔記正三月ふ至る毎ふ鳴と春起とゑ三月ふ至て鳴止と
春去とゑ呼て報春鳥とゑ、 和漢三才画会 鳴ときハ尾を
揺ふ、冬ハ月啣々とおが如し、人の舌鼓ふ似ふ立春ふ至ふ
始て囀り、季春ふ止る、其声清亮円滑ふ飛帰るとき
ハ急ふして長し、法花経とゑが如く、或ハこけかとゑが如く、
月日星と **歌よき鳥** 鶯とゑ、 古今序 花ふくゝぐひす、
なかぬ **蛙の声をきけばいきとし** 水あるむ
いける ものいづれか歌ふやどうけるとゑ、
鳥とゑいつし、○とめ鳥 人来鳥、狂ふる鳥、金
衣鳥、春告鳥、うぐひす鳥、以上鶯の異名ふ
ふ頭字の部ふくハしく入ると見るべし、○黄鳥、
詩ふ呼の黄鳥ハ今の鶯ふあらず、ある人の云、
黄鳥ハ俗ふ朝鮮鶯とゑその形ふて其羽真黄ふて鳩の大さとぞ、

ず如し、故ニ俚俗宇曽琴と弾ずるを以て宇曽姫と云、雄ハ晴ればよび、雌ハ雨をよべ、大和本草 雄と雌とおのおの紅うづくを云 紅うづくを云 動ず、風あらくして自ら動く、故に独揺草と名ぐく、 **二月** **五加木** 羅山拾稿 この花敏采ニ苗と生じ、葉ともに青く羹をなす、 **姥攫** 老婆多く歯落て別に歯と共に和訓相通ず、故ニ曼と姥攫とを **三月** **飛羽鳥** 木母寺大念仏會○武蔵の国の条ニ出、 **梅若祭** 十五日 墓飾郡黒田川梅柳山隅田院木母寺の縁起ニ云、往昔吉田少将惟房卿の男七歳の時父ニ別れ愁傷のあまり、遂ニ有為の門ニんそを願ひ、敷山月林寺ニ登りて修学す、十二歳にして野人の為におそはれむなく、病にかゝりて終ニ貞元元年丙子三月十五日此処ニ於て早世す、忠円阿闍梨適〻ニ会し、無上菩提の作業を勧、常行念仏を修す、それよりこのかた今ニ至て大念仏会あり、遺語にまかせて塚と築き、柳を植ず今日諸人群 **鶫の巣** 鶫ハ性醇にして浅草ニ窟伏す、泰す、常居をかへず、巣をも草中ニ随〻に安んず、巣をも草中ニ営む、雀の巣ニ似て秘密をなす、 **淖生初る** 月令曰、淖始生 穀雨之節 氣候也、



**正月** **賭弓** 蔀云、江次射礼の後朝を以て行ふる、射礼正月十七日賭弓翌十八日 其略ニ云、主上射場殿ニ出御、〻〻射手四人立具〻ことを射る、南より二人射了て後ニ退出す、次の者歩進む、又次者到来を待つ、其退出路、左近ハ射場の北の砌を退き、右近ハ弓場の東面北間小部の下より退く、〻〻勝方乱声ス て勝負の舞を奏す、左羅陵王 右納蘇利 ○賭弓ハ清和天皇貞観二年正月十八日ニ始て行ふる、公事根源 是ハ天子射場殿ふのそこにて、弓を御覧ずるなり、仲春ニ弓をこゝろみる礼記ニ侍るや、堋をこゝろみ的をそばだつ、左右の近衛、左右の兵衛四府の舎人どもの射侍るニ、〻〻事をはて〻後ニ大

将射手ヲ饗ヲまふ、是ヲ以テ射礼ヲ行ふ、正月ヨリ是ヲ以テ三月ヲ経ルニ、三月十三日ヲ以テ射礼ヲ行ふ、

又元三者三元之轉称也、鮑宣傳元日歳之始、月之始、日之始、故曰三始、玉燭宝典元日歳之元、時之元、月之元也、故曰三元、元始也

## 元日節會

七曜御暦　諸司奏

氷様　国栖奏　滑稽雑談この節会ハ天子紫宸殿

腹赤奏　○各頭字の部に出ス渡御ありて、群臣百官ス酒とゝのへ

く、宴会あるの儀ニ、宴会と書てトヨノアカリとゝめ

ゝ、大きの節会の名ゝて侍るゝや、十月中辰日の豊

明節会ゝハ限るゝゝず、ゝ、其式江次第ホ詳ニ、

○せつさたつよのそめ

あるらん、くずのそう　日本紀應神天皇十九年冬十月朔、

## 顕昭　国栖奏

幸吉野宮時、国樔人来朝之因以

醴酒「献天皇而歌之云々」延喜式　凡諸節会ス吉野の国

栖御贄ヲ献ル歌曲ヲ奏ス、節毎ス十七人ヲ以て定ト

ス、国栖十二人笛五人但笛ニ夫国栖八人トあて甚淳朴ニ、毎ス

二人山城綴喜郡ヨリ、

山果をとり食ふ、ホ蝦蟆ヲ煮て上味トス、ゝ身ヲ毛味

と名づ、其土京ヨリゝ東南の山を隔て吉野の川上ス居、

峯峻ゝく谷深ゝく道路狭峨ヲ故ス、京ス遠ゝくずゝと



ゝ、ゞゝゝゝ来ゝゝゝ希ゝまゝゝゝ蚊俄ゝゝゝ

恭ゝゝて土毛ヲ献ず、其土毛ハ栗菌年魚の類ニ、

近世吉野ゝゝ参ゝゝと絶ゝゝ

ゝゝゝ歌ゝゝゝ笛ヲ吹ゝゝゝ、吉野ゝゝ年の始ス参リ

ゝゝゝゝ

## 国栖笛

江次第　国栖の歌笛ハ諸書ニ考ルニ、元日ホ於ゝ奏之、雑談抄　国栖の歌

笛ハ元日ホゞゝす、七日の節会ホさゝ踏哥

の節会、五節ホゞゝと見ゑゝ、作者心得ゞゝ、但始ヲ汉

て正トゝヲ注ハ、早

## 元日不開戸

春ホ許用ヤゝ　元日戸ヲ開ず、一日

廃務ニ、又俗間ホ家内ヲ掃除せず、元新年の陽氣ヲ重

ずる義ニ、唐ゝヲ此事あゝ、聞部疏ゝゝ聞の俗歳首ヲ重

ず、民間正戸

ヲ開ず、

## 元日草

福壽　荊楚歳時記正月朔日畫鷄ヲ戸上ホ帖ゝ、葦索ヲ其上ホ懸ケ符

ヲ喪ホ挿めバ百ゝゝ鬼ゝゝヲ畏ゝゝ

## 食積

追加のくれ　和漢三才圖会竹の串部ホ注ヲ、

ホ貫ゝゝて乾ゝゝゝゝ、

## 串柳

西陽雑俎　柳ホ七絶あゝ、一ホ壽六

お嘉賓云」今新年嘉祝の物
と〳〵蓬萊葉ニ用ゐ此葉う
ず大蔓菁し春二三月お至て、 蓴菜 本朝食鑑 蓴菜 ハ久々多知と訓
莖肥大高く立〳〵葉と茎と
あり、巻〳〵具足する 具足鏡開 紀事 九 鐙お六具
足の具足の餅特お刀を
以〳〵截ことと忌む、故お手とをつて、槌をそうて是と破り
かくことと嘗〳〵て鏡開と云、 蔵開 雑談抄 和俗年の
新年截の字と忌む故あり、始お蔵と開て積
蓄の金銀米銭お初〳〵ベ、一切の貨財と取出〳〵て用お充
〳〵、賣買の事と調ふ、是其年始ゐをバ吉日と撰んで庫蔵と
〳〵をひらき〳〵 攝州西の宮よう出る恵比のこと初
ゑびすめつ、 偃儡師 部、若夷の条あ〳〵せ見るべ〳〵

## 花燈夕 し部、上元日の条ニ出

## 兼三春物 慈姑 烏芋

本朝食鑑 慈姑 於毛多加根ヲ云 白久和井ト云 浅水中お生ず、或ハ又〳〵ととと種、三
月苗と生ず、青莖ありて中空〳〵、枝葉ちう、燕尾鏃
の如〳〵して、前尖〳〵後お岐ゐ、五月小白花をひらく、穂
をなす、霜の後葉枯る根顆を結ぶ春の初堀て果とす

同上 烏芋 黒久和恵 又久和井 俗お不登井と称するの根と、水田湖沢の
中お生ず、其苗三四月土を出ろ一莖お枝葉ちう〳〵、灯心草お似
う〳〵、肥大もの〳〵二三尺、こととを刈て帚を造る、其根白鶏卵
後顆を結ぶ大栗の子の如〳〵、脐お聚毛あり、累〳〵と〳〵
泥の底お生ず、自ら生ずるとの、
〳〵、種て生ずるとのハ萎〳〵〳〵
冬春堀收て果とす、生食煮食皆佳と、○時珍曰、慈姑ハ
一根歳ごとお十二子を生ず、慈姑の諸子と乳するがごとし、
故お 黒海苔 又雪海苔、お取之色黒〳〵美あり、 貞享式 此とも
名づ、
北越の名産もの〳〵、海辺の岩間お降積〳〵る雪を彼の打浸
す拍子もて、凝りて海苔とハなるとぞ、もと〳〵ふ雪と黒
と訓ずるハ白と青とのる訓ずるもの〳〵、今按ずるふ、海苔の
各ハ春夏とこと〳〵くれバ雪海苔を以〳〵冬〳〵おさバ例ひ
衆議お及ず〳〵て、こととを
當用の如くして、軟〳〵薄〳〵、食ふお堪〳〵、俗呼で甜菜
とも、其莖幹高三五尺叢をもて、六七月お小き紅紫の花と

## 二月 枸杞 蕪頃亀経 春苗を生じ、葉

生下隨ゝ紐支と結ぶ形微長ゝ云、**草の若葉** 康文曰東ゝの枝の如ゝ、其根と地骨ゝと云 俳諧治法の書ゐ、正月の部ゐ若草 新草初草を出せゝ、又二月の部に草の若葉を稍長さる心 **草芽** 篡要 春草を弱草 梁武又芳草とゝ、**熊谷櫻** 大和本草 高サ尺ゐ過ぉゝく、花さゝ、長ゝて四五尺ゐ過ず、彼岸櫻ゐさゝぶちて、八重の好花ゐ、櫻の先登ゝ、花色白ゝして小紅と帯ゝ、捿ふ源平の合戦ゐ熊谷次郎直実振舞一谷の先登ゝ名と形ゐすること、平家物語ゐゐ記ゝ、此種余種の櫻ゐ魁ゝ、是と熊谷櫻と云、**三月** くさの餅 **草餅** 蓬餅 部 三月始生ず、茎葉白ゝ、脆ゝ、三月三日婦女こぞと採ゝ蒸ゝ搗て糕ゝ手傳て歳事とす、○嵐翁艸ハの部、さゝつゐの条可見合、**勧学會** 三代実録 四月九日 **明詠注** 真林寺月輪院ゐて行ふ、天台の大衆法華と誦す、紀典の儒も詩聯句と成す、康保年中ゐ大内記保胤狂言綺語の罪とをそれんとて、支道先達ゐ学徒ゝをもよをして、三月九月の十五日毎ゐ行ひ始らると侍ゝ、勧学院ハ三条の北今の雀の森その跡

**鞍馬の雲珠櫻** 神社 唐鞍の雲珠ゐ似れバ鞍馬の縁ゐゝ、**雲ニ入鳥** 朗詠 花落隨風鳥入雲、行ホハ雲ぢゐ入てゝ尺ゐとゝかすぞゐ、是を春のかそゞ称、此虫と育ゐ始終葉の嫩葉と咥ゝす、仍て栗子ゝ云 くゞがせ **汲鮎** あゆ、鮎子 蚕の条ゐ玉ツ、**栗子** 蚕ゝ、畧大ゝ並の囲ゐハ挺各一様車輪の如ゝ、それの長ゝ尺ゐ過ず、仍て栗子ゝ云 くゞがせ **九輪草** 救荒本草 蕾を抽ゝ小花を開く、櫻草の花ゝ似ゝ、指ゐ至ゝ七層或九層浮図の九輪ゝ似ゝ、

**蓑入** 六の餡 紀事 正月十六日農工商おのゝ遨遊す、是を十六日遊びとす、又蓑入と称す、ゝゝろハ徃ゝところゐゝ人ハ林藪ゐ入めんゝ遊楽す、一説とすゝ、蓑入ゝと宿入の誤りゝ、此日洛内外の男女或ハ両親の家ゐ到ゝ、又姻家ゐゆゝ、或ハ寺社ゐ詣で、又山林ゐ遊び、各随意ゐす、又奴僕ハ我宿所ゐ帰ゝ、○六の餅とハ大和国の俚語ゐく、蓑入とゝふ同ゝ、泉州ゐて六入とゝ、大和の民間ゐゝ旧年嫁ゝ入ゝる女、今日親里ゝ帰ゝとて、必餅を舂て祝ゝ、是と十六餅とゝ、十六日の餅の略語ゝ彼是名目混雑ゝて、六の餅六入の名ゐ、又江戸ゐゝ八宿おゝとりゐ、

**尼神詣** 藉民将来 ○山城

郡八幡一の鳥居の内ゟ八幡の御旅所あり、年毎の正月十九日、この所ゟ疫神を祭る、諸方の男女參詣す、この故ゟ此所を疫神の社とゝハ非ゝ、一日の勧請ゝ宿院頓宮のごとく預め榊數千本と建ゝ疫塚と表ゝ、夜ゟ入て宮守神主各榊を囲ゝ立ゝ、凡宮守の上首を一の行事と称す、その次二の行事三の行事ハ燎すことゟ、日さゝ傚ひゝ囲ゝ立ゝこの榊ハ疫と攘ふの戈ゝ神人と背炙衆とゝ、參詣の人ゝ、捧る所の銭ゟ添、疫塚の内ゟ投入るゝ、昔ハこの木札疫塚共ゟこれと焼ゝこれ又疫を攘ふゝ十五日ゟゝ參詣ゝて十九日特ゟ多ゝ、是を疫神祭とゝ、帰路弓矢を買ゝ、小児の翫び

その子、又昔此所ゟ祇園の社を、故ゝ今と穢民将来の木符と賣ゝ、是と小児の衣領ゟ繋ハ、疫と除ゝとゝ中華訓卯の徴意ゝ、又山腹の岩間ゟ出る水を、こゝと香水と称ゝ、參詣の人小竹筒ゟ盛ゝ摯ゝて家ゟ帰る、疫病あるとの、歩ゝく飲とゝハ愈ゆ、元厄年ゟあるとの、疫神の社前ある砂をとゝかゝり寝所の下ゟ置年過ゝ此砂を倍ゝ迄ゝ納む、故ゟ俗又厄神と称ス

○李吟曰、神代ゟ牛頭天王、蘇民将来ゟ清を得ゐて、汝ゞ子孫永ゝ災難を免るべゝと誓ふゝ故蘇民将来ゞ子孫とゝ札をとゝけとゝ



ゝとゝゞ、厄神ハ牛頭天王なるべゝ、

**鑓梅** 中花ゝゝ白く蘂紅色と帯ぶ、

**柳衣** 冬平公御

説 面白

**山笑** 目遊録 春山淡治ゝゝ笑がごとゝ、夏山も裡青、秋山ハ明浄ゝゝ著翠ゝゝ粧が如ゝ、冬山ハ惨淡ゝゝ滴るが如ゝ、

## 兼三春物

**柳** 本草 時珍曰、揚ハ枝硬くゝて揚起ゝ、故ゟ揚とゝゝ、柳ハ枝弱くゝて垂流す、故ゟ柳とゝ、蓋ゝ一類二種ゝゝ春初景黄と生ゞ、即ち黄藥花と開春蜕ゝ至ゝ葉長成の後、花中ゟ黒細子と結ぶ、慈落て絮出、白絨の如ゝ、風ゟ因て飛ぶ子衣物ゟ着ハ能虫と生ず、池沼ゟ多ゝ、即ち化ゝ浮萍とゝゝ、

**柳髪、柳腰、柳眉** いづれとゝ柳の娜娜ちゝを美女の風姿ゟ見立てゝゝ、

○青柳、川柳、玉柳、槌柳、箱やなぎ、瘤柳、めばる柳、風見草、以上おのゞゝかゝら字の部ゝゝ入ゝ注セゟ尋見るべゝ、

**八重霞** 三月 か部、霞の条ゟ出ゝ、

○糸やなぎ、注ゟ及ゞ子、

**山櫻** 一重櫻の一種、山野平林ゟ自ら生ず、梅ゝ野梅とゝゝ如、

**山根草** 厥の異名、

**八重梅**

生ず隨ふ〳〵紐支と結ぶ形徴長し、**草の若葉** 康文曰 俳諧浩
春の枝の如し、其根と地骨とに云
法の書み、正月の部ゐ若草新草初草と
出せり、又二月の部に草の若葉を稍長さる心、**草芳** 慕要
春草を弱草 大和本草 高サ尺ゐ過ず〳〵花 梁武
又芳草とゐ、**熊谷櫻** さく、長して四五尺ゐ過ず、彼岸
櫻ゐさゝぐもて、八重の好花ゐ〳〵、櫻の先登ゐ、花色白にして
小紅と帯ふ、按ふ源平の合戦ゐ熊谷次郎直実振舞一
谷の先登〳〵名と形ひすてゐ、平家物語ゐ記ふ、
此種余種の櫻ゐ魁ふゐ以〳〵、是と熊谷櫻と云、**三月**
くさのもち 艾の餅 三代実録 田野ゐ草ゐ、俗ゐ母子草と名く、
**草餅** 蓬餅 部 二月始生ず、莖葉白〳〵脆〳〵、三月三日婦女
こきを採〳〵蒸〳〵搗て糕とす、傳て歳事 **勸学會** 十日
とす、○嵐齋帖ハはの部、さゝつゐの条可二見合一、
朗詠注 真林寺月輪院ゐて行ふ、天台の大衆法華と誦す、紀
典の儒も詩聯句を成す、康保年中ゐ大内記保胤狂言綺語
の罪とろ〳〵んとて、支道先達ゐ〳〵、三月九月の十
五日毎ゐ行ひ始らる、侍ふ〳〵勧学院ハ三条の北今の雀の森その



跡ゐ **鞍馬の雲珠櫻** 神中抄 唐鞍の雲珠ゐ似
れバ鞍馬の縁ゐ云、
隨風鳥入雲 行末ハ雲ぢゐ入てゝ代
ととかすゝぐゐ春のかすみ、
此虫と育ゐ始終菜の嫩葉と
竝ます、仍て菜子云 **ゝぐひす** **雲入鳥** 朗詠 花落
畧大之竝の囲ゐハ挽各一揉車輪の如し、**九輪草** 救荒本草 夢を抽で小
捎ゐ至て七層或九層浮図の九輪似ふ、 花を開く、櫻草の花似ふ、
**叢入** 六の餅 紀事 正月十六日農工商おの〳〵遨遊す、是を十
六日遊びとす、又叢入と称す、ゝゝろハ徃ところ
誤りゝ此日洛内外の男女或ハ両親の家ゐ到又又姻家ゐ
ハ寺社ゐ詣で、又山林ゐ遊び各随意とす、又奴僕ハ我宿所ゐ帰ゐ、
○六の餅と八大和国の俚語ゐ、同ド、泉州ゐて六入
とゐ、大和の民間ゐ〳〵旧年嫁〳〵る女、今日親里へ帰ると、必
餅を春て祝ふ、是と十六餅と云、十六日の餅の略語ゝ、彼是名目
混雑ゝて、六の餅六入の名ゐ、**暮春** 不及
又江戸ゐ〳〵ハ宿おゝとりゐ、 **や** **正月**
**厄神詣** 蕪民将来 ○山城
十九日 国綴喜

郡八幡一の鳥居の内ゟ八幡の御旅所あり、年毎の正月十九日、この所ゟ疫神を祭る、諸方の男女参詣す、この故ゟ此所を疫神の社と云ハ非ず、一日の勧請ニ宿院頓宮のごとく預め榊数千本を建〳〵疫塚を表し、夜ゟ入て、宮守神主各榊を囲ミ立ツ、凡宮守の上首を一の行支と云、その次二の行事三の行事と称すること〳〵ハ火燎を以す、今ハ燎すること分〳〵となりて、旧きゟ做ひく囲ミ立ツこの榊ハ疫と攘ふの戈ニ神人と背炙衆とゟ、参詣の人年齢支千と小き木札ニ記し、捧ゟ所の銭ゟ添、疫塚の内ゟ投入るく、昔ハこの木札疫塚共ゟこれと焼つゝこれ又疫を攘ふく十五日ゟゟ参詣ゐて、十九日特ゟ多し、是を疫神祭と云、帰路弓矢を買さ、小児の翫びそのごとく又昔此所ゟ祇園の社き、故ニ今と蕃民将来の木符と賣ル是ニ小児の衣領ゟ繋ハ疫と除ることゟ、こゝニ中華剔卯の徴意ゟ又山腹の岩間ゟ出る水ゟ、こゝを香水と称し、参詣の人小竹筒ゟ盛ゟ携て家ゟ帰る、疫病あるをの、歩〳〵飲ときハ愈ゟ、凡厄年ゟゟゟの、疫神の社前ある砂をとりかへり寝所の下ゟ置年過〳〵此砂を倍〳〵迄一納む、故ゟ俗又厄神と称ス

○李吟曰、神代ゟ牛頭天王、蕃民ニ疫災難を免るべしと誓ふ故、蕃民将来ゟ子孫永く

早稲田大学図書館

ことゟ那ゟ、厄神ハ牛頭天王なるべし、

**鑓梅** 中花ふ〳〵白く

説 面白 やまとこと

裡青、云〳〵

**山笑** 甲遊録 春

著翠ふ〳〵

粧が如し、冬山ハ惨淡

とふ〳〵滴るが如し、秋山ハ明浄ゟ〳〵

眠るがごとし、

**兼三春物**

**柳** 本草 時珍曰、揚ハ枝硬くゐて揚起す、

故ゟ揚と云、柳ハ枝弱〳〵て垂流す、故ゟ柳と云、蓋し一類二種ニ、〳〵春初条黄と生ゞ、即ち黄薬花と開春晩ふ至〳〵葉長成の後、花中ニ黒細子を結ぶ、慈落て絮出、白絨の如し、風ゟ因て飛ぶ、子衣物ゟ着ハ能虫と生ず、池沼ゟ今〳〵即ち化〳〵浮萍とある〳〵、

**柳髪、柳腰、柳眉**

○青柳、川柳、玉柳、垂柳、捶柳、箱やなぎ、瘤柳、めばる柳、風見草、以上ゟの〳〵から守の部ニ入〳〵注せり、尋見こふ〳〵、

○糸やなぎ、注ゟ及ず、

**八重霞** か部、霞の条ゟ出ス、 **二月**

**山櫻** 一重櫻の一種、山野平林ゟ自ら生ず、梅ニ野梅とふ如く、

**山根草** 厥の異名、 **八重梅**

三月 **柳鬘** やなぎのかづら 西陽雑俎 唐制三月三日侍臣ハ細柳圈ヲ賜フ言ハ辟ト帯ニハ蠆毒ヲ免ルヽナリ此故ニ柳鬘トスルナルベシ、又一説ニ陶淵明桃柳ヲ好テ齢ヲ延ブ依テ本邦ニテモ取傳ヘテ世俗上巳ニ柳ト桃ヲ必ス〳〵雛ニ供ス髪ニ插ムトサヽヤカサヽテ蓑伐ヲスルヨリ、

**やす〳〵の花** 七日ヨリ十三日ニ至ル七ケ日の法会ニ、法花会の条ニ出ヅ、

**薬師寺最勝會** 薬師寺ハ大和国高市郡ニアリ天武九年十月創ヲ持統文武の二帝継テ荘観妙絶ヲ極ムトイフ馬琴ガ野洲の薬師寺と註セルハ誤リ

**八重櫻** 詞花集ニ、いく〳〵のあらそひの都のさくら哉 此哥より八重櫻ヲ〳〵ハめでゝ詠ジ出ヅ、九重ニ匂ひぬるかな 徒然草ニ八重櫻ハ奈良の都ニのみぞあるト、世ニ多くあり侍るさ、

**棠梨花** 本朝食鑑樹高丈餘葉如瑞香水楊而細厚な部梨花の条ニ注ス、

**楊梅** 大和

**花** 本朝食鑑樹高丈餘葉如瑞香水楊而細厚深青経冬不凋三月開花実云々、

**山吹** 本草 棣棠ハ園史及ビ允斎稿ニ詳ニ其形状詳ニ疑モナキ山吹ナレバ茲ニハ詳ニ記サヾレドモ疑ハヾ餘糧トフヤマブキト訓ズベシ





八誤リテ、餘糧ハヤヨキヽ古今集山吹の花色衣ぬしやたれ どゝゝゝずロあゝかゝ、是山吹の花の色の黄ニ〳〵キ故ニ口無シの意ニヨリテ云ヒ、冬の日 僧そのつゝず山吹とのひ、又後拾遺 山吹の実の一つだになきぞ あやなき、みて実の無きヲ云ヒ、山吹衣 又花山吹トモ云 挑花御説 面黄裏紅、春冬多く着ス、〇青山吹 唯心院御説 表青裏黄、面薄朽葉裏黄、冬より三月ニ至ル、〇裏山吹 同上 面黄裏紅、春冬多く着ス、

**弥生山** 貞徳曰弥生山、名所ニあらず、只春の山とゝゝゝ、 題林 あやゝゝゝ

**鰿** 和漢三才画会 鰿未詳ノ俗字ナリ、河湖の中ニ多シ、狀鯊ニ似テ白色淡黒ニゝゝゝ 為重 略青色を帯ぶ性好テ群集シ、水上ニ浮遊す性蠅を嗜む、故ニ魚人馬の尾鯨の鬚を以テ、蠅の頸と摸シ成シ、先砂糖を水上ニうかべるときハ鑞聚る時ニ蠅の頭と水ニ投ジて其ヲ釣ヤ或ハ細ヲ以テ水中ニ行ヲ玉テ速シ、故ニ其名アリ、

**柳葉の魚** 柳の葉ニ似タルヲ以テ名ヅク、

の条見合すべし

## 正月

### 舞初

紀事 四辻家に楽始あり、舞人・楽人来集り、多く陵王・納蘇利あり、

松囃 謡初 紀事 公武の両家、松拍子あり、倭俗正月三日より十五日に至て唱謡し、或は鼓舞をなす、是を祝ふて松拍子を称す、松は長久の義と取、豊臣秀吉公家譜 天正十五年正月二日謡初あり、諸士皆賀、祝を献ず、

### 松の内

注連の内 ○正月十五日迄を、松の内注連の内と云、江戸にては七日を門戸の飾を除く、近来の風俗と、黒田家にて八古来のごとく十五日迄飾ると、

### 松の花

十くその花 ○時珍曰、按るに王石が字説に云、松柏は百木の長なり、松は公の如く、故に松は公に似ふ、云々、二三月雖を抽で花を生ず、長四五寸、其花蕊を巣くひ、松黄とす、藻塩草 松の花は十くその花

兼三

## 春物

### 鱒

孫炎曰、鱒は好で独行す、尊で似するものなく、故に字尊ふ、徒ひ必ず従ふ状鱒に似て小く赤脈、瞳を貫き身円くして長く、鰷は鱒よりも細く、青黄赤、章好で螺蛳をくらふ、網を逎るるを善す、

## 二月

### 摩耶奈、摩耶昆布

州苑原郡畑原村の山上にあり、大化元年の草創、伽藍坊宇三百餘ありしが後廃廻して今纔に存す、二月初午の日、馬と引く参らせ、馬と飼馬の無難を祈るとて、馬どもを広耶比布と云、

### 松笔

土産の昆布を買て帰るとて、

### 鳥

千梅ぐさ 京師の小鳥肆にある、菊の類の小鳥あり、甚頑やかなり、

とりつ 是は予例の春旅行する所、東三河より遠州路にて並木の松に蝉の声の如く喧く鳴ものあり、擔ひ入て来る、

ばん 松むしと呼ぶ、袋井掛川日坂などの間殊に多し、

ほとゝぎす 是は鳥にあらず虫なり、○兼文曰、京師の鳥肆にもとゝぎすを売、啄木鳥をもとりつけ、一年西近江の大浦の出生の婢と仕ふ、かの大浦の児女の唄ふ、松むしがなくが恋の哥ひつの木の根が絶がやと唄ふ由を聞くに、此唄の意も啄木鳥のやうなるものにて、俚語諺と手ならべ、越後国にて八菊戴鳥も似る小鳥と苔むしがなくなどゝ、下野の山中にも、松むしがなくなどゝ、そのゝの春松の緑を食ふ故に松の赤葉を集る彼

松むし〳〵松むし〳〵の下略ならん、夫木「こもち来の雪ふる巣ごもりうかれそてふ松むしぞなく」寂蓮

**馬刀** 陳蔵器曰、蠔、海泥中ニ生ず、長さ二三寸、大サ指の如し、両頭円く、

**花** あ部、蘭の条ニ出、

**け**

**正月**

**雞旦** 東方朔占書「歳後八日、一日ヲ鶏、二日ヲ狗、三日ヲ猪、四日ヲ羊、五日ヲ牛、六日ヲ馬、七日ヲ人、八日ヲ穀ト為ス、其日晴ナレバ則チ其物蕃息ス、陰ナレバ則チ減耗ス」公事根源「是元日ヲ雞、二日ヲ犬、三日ヲ猪、四日ヲ羊、五日ヲ牛、六日ヲ馬、七日ヲ人ノ日トスルヲ以テ、正月ニ先ダチ、先九日ヨリ、上卿以下位次ノ公卿ヲ定メ、宰相廳ニ於テ、其事ヲ行フ、上卿ハ大弁モ廳ニ着ク、事ヲ奏スルニ、上卿ハ大弁ノ陣ニ着キ、南ノ所ニ着ク、勧盃ノ儀ヲ行ヒ、出ザルノ間、南ノ所ニ着ク、作法ヲ以テ、参内シテ左近陣ニ着キ、外記ハ恒例臨時ノ政ヲ奏シ、官ヲ召スニ、正月ニ先ダチ、今日ヨリ始ムル心ニ、検非使ノ廳ニ於テ

を釣る状ゐ似ゲバふ漢名破米薺、俗云、五形又連華草、和漢三才画会春苗を生ず、其葉皂莢及び梶の若葉ゐ似ゝり、両々相對ゝ、枝莖地ゐ布て蔓の如ゝ、節の上ゐ莖を抽んで、頂ゐ花を開く、三月より四月の末ゐ至るゐとで盛く、其花淡紫色、との間ゐ白き処ゐ、状蓮華ゐ似ゝり、故ゐ名づゝ、莢を結ぶ三稜黒色長さ六七歩、中に細子あり、おのづゝ撒く生ゞ易ゝ、其多き処錦を地ゐ敷が如ゝ、人以て野遊の一興とゝ、

源

## 平桃

日月桃 ○三名一種、漢名を金銀桃と云、八重ゐ江戸桃 ゝゐ色紅ゐ白く、或ハ咲ゐけ飛入あゐ、

## 毛桃

万葉 けゝゝゝ

を除く心なるべし、云々一説ゐ一説ゐ

賀客を送迎の為ともいふ、福沸、福鍋 紀事云 若水と汲みこれを煮る福沸と云ふこれ用る鍋を福鍋といふ、

雑談抄 俗ゐ七日の粥を呼ぶに福沸と云、是 福とハ餅の異名なるゆへ、其故ハ古へ福引とて餅と二人して引合てそれぐ

粥ゐ和らかに煮熟るとき、姫もち の条ゐ出ツ 福引 宝引 ほ、部き部毬打

の條ゐ出ツ

## 蕗薹

本朝食鑑 冬十二月宿根花を開く、正二月最盛ん、初め地を出る時、小蓮の如く、其ふ出

蒼漸く長ずるに及んで黄ゐ、外ゐ紫蔕あり、土を去ること一二寸、ゐこ小蓮の如く、花開きて重々として薹をなす、俗ふ蕗の薹と号す、相重る貌をいふ、負享式 中古の式目ゐハ、蕗のこふも蕗の花を同く春ゐ用ひられど、此名ハ例の賞玩が

むら消の雪るむをおしも、蕗のこふ ハ冬と定むて ちがふ

蕗花ハ漢ゐハ賈島が春雪の詩よるも、春といふんも宜ゐまど、

その名ハさて俳諧の用ゐ、倶に蕗の芽ハ春ゐ

## 鮒膾

大和本草 膳夫録云、膾ハ鯽ゐ先ゐべし、膾ハ鯽魚ゐこと源五郎鯽とゐ、傳云、漁人源五郎始てこれをとる、其大きものを膾鮒と称す、

截て膾とするゐ堪ふ、京近江の人専賞之、

## 三月

## 二日灸

紀事 二月二日男女ゐの〳〵点灸すること、誤て二日と

華の書ゐ八月朔日針灸ゐべく和俗大人小児ゐの〳〵点灸す用るゐ八月二日もて同く和俗大人小児ゐの〳〵点灸す

是をや二日やいとと云、

## 三月ぶく〳〵

花單 普賢象櫻 横川詩序 普賢堂ハ天下ゐ一ゐり、

世ゐ傳ふ、鎌倉ゐ堂ゐ、普賢こ

ゐを安ふ、其地ゐ櫻ゐ、俗ゐ普賢堂と云、或ハ普賢象といふ、

和訓 鼻と花と音同く、花の白くゐて、かつ大ゐるこの菩薩

の乗るところの白象の鼻 の如しと、両説のごれ是ゐ、

## 藤

大和本草 花春のまゐ四月ゐ咲ゐる、花の長さ三尺ゐり

充ゐゐ、花瓶ゐ花をさすゐ、酒を加ゐるバ久〳〵く萎ゐべ、本

ゐゐ敗酒の中にさすと用ゐバ正〳〵と、互ニ相助ゐること如し、



## 福沸、福鍋

紀事云 若水と

## 路薹

本朝食鑑 冬十二月宿根花を開く、正二月最盛ん、初め地を出る時、小蓮の如く、其ふ出

蒼漸く長ずるに及んで黄ゐ、外ゐ紫蔕あり、土を去ること一二寸、ゐこ小蓮の如く、花開きて重々として薹をなす、俗ふ蕗の薹と号す、相重る貌をいふ、負享式 中古の式目ゐハ、蕗のこふも蕗の花を同く春ゐ用ひられど、此名ハ例の賞玩が

むら消の雪るむをおしも、蕗のこふ ハ冬と定むて ちがふ

蕗花ハ漢ゐハ賈島が春雪の詩よるも、春といふんも宜ゐまど、

その名ハさて俳諧の用ゐ、倶に蕗の芽ハ

春ゐ〳〵一物二用の例とゐべきこと、

## 兼三春物

**藤波** 藻塩草 波を似るくへ、藤波をかるゝにつくるもの、

**藤が枝** きゝぞこん 若紫ゐ十

くさの花とあるを、藤曼 壬吟 をゝをゝをゝをゝふ

松の藤がえ 文明十六 さるふぢかづらくくの山くの

かつら ○ 下り 松などの梢より咲 藤棚 栄の木の瘤

ざゝふ 藤、下りくもるさまをいふ。 を栄寄生

とき類へ、沙石集に藤 **藤綱** 藤ぞゝより合せて綱と

こぶを茱とまちがへたる、 ゝゝるくく春季とゝゝ藤

三ッの内也、 **藤丸** 装束の○青藍曰、藤綱藤丸藤瘤の類

紋あり、 と春季とせんそうぐや、蕉門

ゝくハ雑物とゝくく佳ゝんをもぐそ

花のおろひゝくハまろぐゝす、 **乙** **正月** **暦開**

は、部初暦 同上、初子 ぞ ことゝ

の条ゐ出ヅ、 **去年、今年** 日の条ゐ出、

雑談抄 貞徳の説、去年今年春え、今年とむろへ、

匂ふもゞし、師説、連哥ハ去年とゝ詞ハ春え、今年ハ雑、

**大和本草** 包橘ハ橘もも小ん、 **拱**

**子** 皮薄く瓤のつゞて上ようゝめ、 **昆布** 和漢三才画会

其大ちるとの



一抹ゐゝくく抹とうす、葉長さ二三丈こゑと長昆布ゝゑ、大一

抵幅四五寸、長二三尺、海人鎌を用て刈ちる、松前の産を最

上とす、専ら嘉祝の物とす、和名 こものがう た部田作

ろろぶよのる訓に似る故の、 **小殿原** の条ゐ出ヅ

**こゝき板** こゝきのこ、は部

羽子板の条に出ッ **江梅** 俗ゑ野梅、其

花早葉小白 **好**

**文木** 梅とゑ、○晋の哀帝、書をゐむ時、四時こゑふ随く

梅花むとく、 翰墨全書 羅江東が梅譜に、梅ハ花

中の儒 ある人づゝさくやこの花冬ごこと

者あり、 **この花** 今ハさるぐしさくやこの花いと王伝ゞ

哥よう梅の異名とす、○又賀茂真淵翁ハ、 **御齋会**

この花ハ木の花ゐて、梅にかざるに非ざるといふ説ゝ、

八日ゞ十四日迄 公事根源 是ハ太極殿にて、八日ゞ十四日ゐで

七ケ日の間、最勝王経を講ぜらて、朝家と祈ゝやをし、

此経とう今国家と護持ちる功能あろうとてあるゝの

年の始ゐて先ご **御齋會内論義** 公事根源 正月十四

講ぜらるゝや、 日ハ御斎会の結願

あり内論義ハ御殿ゝゝ行ちる、御物忌の時ハ南殿ゝゑ、

始 針供養 八日○武江の俗二月八日を事納とし、十二月八日を事始とするハ、竹竿の先ゝ目笊をつけて家ゝの軒ゝの塵ゝ又牛房芋大根赤小豆ゝの六種を烹ゝ汁とゝ、これを六質汁と名づけ、婦人ハ針の折ゝゝを集めて淨島の社へ納め、一日糸針の業を停むる是を針供養とゝ、其由来いまだ詳ならず、十二月八日を事納とするハ嘉祝の事なれバ、二月八日を事納とするハ近世の誤ゝ、冬のこの部事納の条ゝゝゝ

**水葱** 本草 水旁ゝに生ず、葉沢瀉ゝゝゝに似て堪ゝう、大和本草 浮蕪 三才図会 草木門十 其図ゝ書る葉厚くゝて慈姑ゝに似たり花沢桔梗ゝゝ、水沢ゝに生ず、葉頗る憂秋紫碧花を開く、水葵ゝと沢桔梗ゝとも云ゝゝ

**紅梅** 范成大梅譜 紅梅花色杏の如ゝ、色淡紅、実扁ゝて班ゝし、 **寄居虫** 和漢三才図会 文蛤鳥蛤ゝの殻の間ゝに寓生す、形小さく蟹ゝに似て白色、碁石ゝより小ゝく身柔軟ゝ、蓋ゝ寄生木と相類す、 長明方丈記 かゝる ハもひさき貝をこの虫ゝ

**三月** **小弓引** 著聞集 延長五



詞者講師おゝぜゝ、御前ゝゝ論義をゝバ内論義とゝゝ、又天長十年正月廿四日、延暦寺の僧円證をめして、論義ありとゝゝゝ、是らや事の起りとゝゝ、

**木の芽** 万木の芽立ゝゝ、 説文 芽、萌芽也、 兼三

**春物** **黄鳥** 詩經 綿蠻黄鳥、止于丘隅、又云、出自幽谷遷于喬木、〇う部、鶯の条ゝゝ、併せ考べし、 和漢三才図会 正字未詳、其声高清ゝゝ長滑し、

**駒鳥** ヒンカラカラとゝゝ如く、走馬の響ゝゝ如く、其頭毎ゝ左右ゝ振り、走馬の形勢ゝゝ似ゝゝ故ゝ駒鳥と名づく、春夏よゝ囀る、 大和本草 形ハ鶯ゝに似ゝゝ大さハ百舌鳥ゝゝどゝ、身ハ淡黒ゝゝ頭のんどの廻りゝゝ紅褐色ありゝゝ

**九霞** 尓雅 東風謂之谷風、注 谷風五穀養育意也、春晴而風曰光風、 万葉 細注 東風、越の俗 安由乃可是 と云、東風痛久吹良之奈呉乃安麻乃 瘤抑 都利須流フブ子布称揄可久流見由 家持 白揚ゝ九葉柳と云、その皮と剥バ瘤ある肌の如ゝ、故ゝ名づく、多く揚枝とするの是ゝ、

**二月** **事**

年四月彈正親王内裡ゟ小弓をめされ、酒宴果てゝ
みそうて清涼殿の東の廂ゟ又小弓の勝負をさく
考 揚弓雀小弓と類して、二物ともに公家ゟ玩ぶ
游戯の品すくゝ武家の用ゟおこるものなるべし、云々

公事根源 是八天子の北斗ゟ灯明と奉るゟ、昔ハ北山
灵岩寺あたりゟ高き峯に火をともし供せしなり、

御燈 三日

和漢三才図会 庭梅 正字未詳 叢生して高サ三四尺花と開く形梅ゟ
似て小く白色ゟく紅色と帯ぶ蕊黄ゟて甚繁く艶美く
花落て葉生ず狭く長く庭櫻の葉ゟ似ゟく実と結ぶ櫻桃
ゟり小く生ゟるとき青く熟ゟるとハ赤く味い酸く甘く云々

小梅の花

小梅と庭梅ゟ是ハ、部、花の
と同じきゟの、護花鈴 鈴の条ゟ出

辛夷

名候桃ゟ木

筆、正二月開花落て実ゟり、 夫木 うちなびくゝろバ 為家○十梅曰、柳
ゟくゝろバの末ゟ生ずるを称くゝろバ ゟの葉ニ似ゟく紫の苞紅焔あり、又白花のそのまゝ、小粉の如
し、故ゟ幣こぶしと云、紫のとの木蓮ゟ似ゟう、香気蓮の如
く蘭ゟ 和漢三才図会 糝米ハ小樹最生す、高サ
近し、 三四尺葉狭く長く薄し、縦理あり、二三月



白花を開く、大サ銭ゟり糝のごとし、故ゟ俗呼ゟく
小米花 こでまり
と名ゟく、小粉團花 同上 木の高サ四五尺、葉狭く長く、
粉團花ゟ似ゟく小く白し、其大サ半ゟり過ず一蕚
の大サ豆粒ゟゟうし、ゟうらいぐさ
俗ゟ小粉團花と云、高麗菊 もゟ部、春菊
一名憂忘櫻と云、江戸渋谷八幡の社地ニゟ、こまの部
渋谷金王の栽るところゟしとゟひ傳ゟゟう、小鮎 鮎の
子の条ゟ出、蠶蚕 飼、蠶棚 か部、蚕
条虫、
正月 え方

棚 と部、蔵徳
神の条ゟ出、

名ぐ摘 藻塩草 芹の異名くゝ、顕昭曰、
ゟゟう、くとこと同音ゟ、或ハ芹をつむ、ゟぐのごとく
芹の外ゟ別ゟゟぐをあげゟうゟゟ、ゟぐのごとく
ゟぐえ、ゟぐの えびすかづら ハ、わ部、若夷 えびす
ワゟゟちともゟゟ、夷廻 えびすまわし の条ゟ出、夷祭 い部、居籠
籠梅 中花ゟゟく越中梅のごとく、むゟ
枝を折ゟ、籠ゟゟゟゟゟゟゟゟ、掘原源太景季

地ニ布て生ず、三四月莖を抽て花を綴く、肉紅色、或ハ淡黄、或ハ淡色、数色あり、其根蝦ニ似たり、

**て**

**正月 天狗宴** 紀事 正月二日

愛宕寺の牛王加持、清水坂の西にあり、今日夜ニ入て弦指客殿ニあつまり、南北二行ニ座して、おの〳〵宴飲す、其座上にある人、片木を以て立舞ふ、是を天狗酒盛と云、天狗酒盛ハ、宴終て其躰麁豪にして故ニ其音をとる、おの〳〵大ニ門扉或ハ床壁を敲き又法螺と吹太鼓をうつ、其間ニ寺僧牛王を貼す、是を悪鬼をはらふの謂ニ、

雑談抄 天狗酒盛ハ東西ニ座と設て互ニ脊の高き人を半ばかり、勝負を争ふ、

**天穿** 煎餅と繋ぎ

事文類聚 江東の俗、正月廿日を号して天穿と名づく、紅縷を以て煎餌を繋ぎて屋上ニ置く、是を補天穿と云、

**月令** 季春之月、田鼠化て鶉と為

本艸 鼸脚 ねずみあし 目極て小く、頂尾短く、最取やすく、鷹ニ飼ふ、

**夏小正** 三月 田鼠化て駕と為

衍義 八月駕化て田



**兼ル二春物** 紲踏 処ニて男女ニ限らず、往ず、是ハ邦宗と禁せざるの風俗なり、

**三月 越中梅** 大花にして白く、淡紅を帯ぶ、豊後梅ニ似たり、凡八重の花、多くニ月ニ開く、

**圓宗寺寂勝会** 十九日 元亨釈書 資治表ニ曰、延久皇帝後三条院二年冬十二月廿六日、円宗寺成る、帝寺ニ幸して親ら法事をとり行ふ、落慶の寺、仁和寺の南にあり、荘厳都下ニ冠る、 江次第

円宗寺、寂勝会、二月十九日、〇今寺跡絶ぬ、

**三月 江戸桃** 御室仁和寺の境内ニ其名あるとなり、

遅桜 葉少して赤く花大輪にして多く、

部源平桃の条ニ云、

**江戸桜** 並長く下る、この種関東ニ多き故ニ名とす、

**江戸ヘ谷拍木村** 延正寺ニ祭師堂の前ニあり、昔武田右エ門と云もの、此地ニ住て、後人源氏物語の拍木の右エ門ニ假借して名づくと云、

和漢三才図会 今多く庭園ニ植て其花を愛す、冬も凋まず、葉車前子ニ似て厚く長し、

**化倫草**

## 正月縣召除目

十一日 年中行事哥合云

縣召除目とハ、諸の外官と宗と任ぜらるゝ外官と諸国の司にて侍り、田舎とおぼえたるまゝ、外国の人を召く、任官とさゞらるゝ名かゝるハ名づくる、京官と八京にある諸司と任ぜらるゝ是ハ田舎の官と宗とのつゞく、公事根源 名替、名国替、秩満、更任、任符、返上などゝ申文いろ〳〵數を不知、おほえそこの除目ともけ〳〵可知事とぞ、世諺問答 礼記紙も書のべく、 異花抄 春ハあぐ召、秋ハ司召 白馬 とゝ替るゝ、○あはくいとゝハ北山抄、江次第にもとゞく、ハクバン

節會 七日 公事根源 正月七日ハ青馬とゝぬバ年中の邪気とのぞくとゝ本文のごとく、仁明の御門承和元年正月豊楽殿にをいまして青馬とゝのとゝ、世諺問答 礼記ふ、春と東郊にむかへ青馬七疋を用てえらびとり、又青きハ春の色をなして白きハ青ざるとゝ、さるバ青馬とゝぬバ年と終るまで疫氣かゝ○かゝる文ともを次第ハ江次第其外の書ともに、かゝるひくとゝ○ゝを又ふくめり、男踏 あぢさゐ 十五日 世 哥の奄ニ註ス

## あぢさゐ

と部、男踏 小豆粥 祝ふ 風記 正月十五日小豆粥を煮て天狗の爲ニ庭中案上ニ祭るゝ則其粥凝る時東方ニ向く、再拝長跪して服すれバ年と終るまで疫氣かゝ○かゝる部の粢木粥杜ともむくゝゝ、

## あらたまのとし

碓と碪と杵と、つゞけく、年とゝことの枕辞とし、搏ちて八あらたまの月日ともいひ、あらたの春をよろこぶ、此ふるき語を活用かへ、ふるき事ともを改まるゝとゝ、

## 新年

雪玉集 あらたまのとし

釈日本紀 雪の之脆弱者如二水沫一故曰二沫雪一 淡雪冬ふるゆきのさえだえ二見閑居の中、二十哥仙ふ春ふせら、二十哥仙絶くり可惜ちゝ

## 沫雪

○青盖曰、年浪草に今式を挙て云、翁世五条の式ふが作る処とゝ説一理あり、いく今按ふるに此今式ふいふる処皆誤にて、抑此五ヶ条ともふる書八享保年中の印本にして支考の著すところなり、さると早く此年号作者の名を削り去て、元禄七年甲戌六月芭蕉庵桃青判と云十六字を、巻末ふ補ひ、翁の作ゝゝく俗とおぼしく本あり、ゑゝく八書肆のしわざなるべし、抑此巻中の文体も明白なると、云嵐雪、其角、支考の作ることハ、巻中の文体

あ

**葭灰飛** 歳時記云春日取竹為管取葭為灰以
葭莩灰実律之端暦者候気至則灰
飛而管通以応六律

**青柳** ふ 部万春

**朝鳩** 烏狩の条に出ず

**あさる**

和漢三才図会 正字未詳俗云阿尤利加比
其形色蛤蜊に似て小し其大なるもの一寸
小きもの四五分灰白色あり紫斑黒斑花紋の辈を処とす皆
あさり摂泉播の三州に希に東海に極て多し其腸中
に珠を真珠とも云

## 兼三春物

**青柳** 時珍曰春の初め柔黄を出し即ち黄蕊花を

**暖** ぬくし 又ぬくい

**あとかう** 赤朝食 鰹 荔

**青芥** 芥の翠色なるをいふ

**芦角** 芦の条に出ず

**芦錐** 芦の条に出ず

**青海苔** 和漢三才図会 乾苔は海と澤と両品
あり気味甚だ異なり多く南海に出づ伊勢の産を勝れりと
す正月ごろ本内膳の浦にてこれを取る

**甘海苔** 崔禹食経云紫



後の支考が偽作なるべし
〳〵曠野集雪二十句の中ふ「ちら〳〵や淡雪うる酒強
飯 荷兮 又冬の部ふ「雪のふかぬうちふ消みそう 荊弾
又炭俵集ふ「ふるさとは軍の大事ぞ」「淡氣の雪に雑
談もせず 「明ちらも篭挑灯をそ
是ハ前後二句ともふ雑句なれバ淡雪ハ冬季として一句み
捨られ〳〵ぞ〳〵ぬべし〳〵又支考の著
この名ハ大昔ハ春とのミ中昔ハ冬とのミ今按ふ淡雪ハ冬
ふ用ひ所以ハ〳〵雪の斑ある形容ハ初雪とこそ薄雪と
をくん春の雪の平白なんし日影みちて淡雪むも
寒気のあくもあら故なれバ淡雪ハ決して春とさだむべ〳〵
此ふハ例の加減なり例の當用ともせず
先五ヶ条ニ云淡雪ハ春季ともさだめ
かのごとくふ見バ春季と定めたるハ支考が説〳〵翁存在
ふハ冬季ふ用ひ〳〵と上ニ挙るあ〳〵の集炭俵集の句
みそもぢ〳〵〇あは雪と中古ニハ皆淡雪とかゝり淡ハあは
の假名ニ淡ハあは古事記万葉ニ阿和由伎とあるハ淡
雪とハかぐべく淡雪とあく假字もあるゆゑと書〳〵

菜ならず紫の帛の如く凝る石上ゟ生ず、このとの三四種あり、紫色を以て勝れりとす、俗よんで浅草海苔 武江品川の海辺ゟ採 青饅 呼ぐ神仙菜とよぶ、

和漢三才図会 芥の葉青さを醋ゟ合せ魚膾ゟ和ぇてこと食ふ、俗ゟ阿乎乃太とよぶ、

## 二月

蓋菜 蔵器本草 麻、早春ゟ種ると春麻子と云、毒ありて晩春ゟ種ると秋麻子と云、菜ニ入ぐ佳也、く苗と生ス 麻蒔 蕪頃図経 蓋ハ人家の蔬圃ニ畦を作ぐ種ぇ二三月ニ至

胡葱 時珍曰、八月種を下す、葉葱ゟ似ぐ根ハ蒜ニ似ぐ、其味ひ薤の如ぐ臭めぐすぐ、其声蚤々ぐ、故ゟ名づく、 蚤

## 三月

浅葱櫻 大倫云、淡青ぐ白色と八重ニ色ふむ異る色ゟ櫻の異名と 蔵玉 あぐる草いぐる人のゟ名おきてかる

踏青 蠹下歳時記 唐人上巳曲江頃都人士女飲路青ニ遊ぶ 三月三日山野ゟ出ぐ遊ぶ江州粟津祭八鳥々川の御灵の祭礼ニ古ハ三月三日の祭ありしが、今民家

微ぐ祭祀すること能ず、

## 浅草祭

十八日ニ人皇三十四代推古天皇の御宇、進中臣ゟ云もの過ちおぐ、武蔵國浅艸ゟ左迁せぐ、その臣檜熊、濱成武成ゟ云三人の凡才主人の跡ともらひきて、中日ゟ住ぐ漁ぐて世ぐぐ、時ゟ推古帝ニ十六年三月十八日、件の三人、官戸川の沖ゟ網と下すに、ゃゃきものあぐて、月影ゟ結ぶぐ堂と刻ぐその霊像をぐ、今の浅草寺観世音是なり、そのゟち三人の凡才を祀ぐて三社大権現と崇む、今日則三社権現の祭ニ先ぢ祭の前日、三社の神輿三基を本堂ゟ移ぐ堂前ぐ俳優あぐ、こと〴〵ぐ笑ぐ、この日氏子の町ぐ邏物ゟの勢揃ぐ、翌十八日祭礼當日八町ぐの引山ゟ出ぐ、浅草見付の外ゟ未ゟ集り、次ゟ定めて御蔵前ぐ諏訪町並木町を過ぎ、観音の境内ゟ入、神輿の前ゟそ切の〳〵藝を施ぐ、随身門を出ぐ件の邏物囃子ゟ渡り畢て、神輿三基本堂を出ぐ、氏子の町ぐを渡御、浅草御門の外ゟ至りて、神輿と船ぢぐ、浅草川を漕上り、一の権現へ上ゲ奉る、今日の船八品川の西大森村の漁人祭礼毎ゟ出すぐ、是往古官戸川ゟ在〳〵漁人の後ゟ大森ゟ移ぐと以て、今日のるノ古へと忘ざる遺

意く神輿ハ海より陸地を本堂へ還御ス、今日浅草雷神門の辺より蓑と賣る、あんずのもの○和名加良毛、大和本草

## 杏花

其花ハ唐音と呼ぶアンズと云、一種花紅ミ〳〵八重なるあり、俗ニ六代と名く、其木ひくき時花を見るべし、長ずれバ切べし、あせおの平重盛の孫六代年長ずるまで切ざる故ニ名ク、馬酔木

和漢三才図会 山谷ニ生ズ高さ二三丈小キハ一二尺ニ過ず、枝葉殘盛す、其葉狹く長く浅緑色、硬く〳〵て枝梢ニあつまり生ず、花茅を出し、春小白花を開き、房を作す、子と結ぶ、亦房をなす、一子の中細子多し、四時凋まず、相傳ふ馬此葉をくらふて醉ふ故ニ名づくと云

## 蘭

眉作の花 蘋頌曰、三月苗と生ず、二三寸の時、根と併せ菜と為してくらふ甚美し、四月高さ尺餘、刺多く心中に花頭を出す、紅盖花の如し、青紫色、北人呼で千針草と云、多識篇 大蘭、於尓安左比、○此花婦人の眉拂の形の如し、故ニ眉作の花と云、大蘭ハ

天和本草 木通ハ蔓艸ニ蔓即ち鬼の眉拂と云、木通、葉豆と通草と云、鞍馬の木

## 通草花

芽漬ハ通草ニ葉ハ互葉ニ似る、三月紫花を開く、あづきの花の容三ツ瓣ある、秋円き子をむすぶ、えぐ

## 東菊

其葉初生ハ蒲公英の葉ニ似ク鋸歯ありて、茎の葉の如し、茎を抽んでゝ六七寸、小き葉ハ茎の頭ニ花ごとく〳〵、一茎一花、形菊の花ニ似ク、色淡碧色、黄心あれども單葉ニあらず、細瓣重り咲けども單葉の扶ケ、三四月

関東の曠野の路傍

## 鮎子

小鮎 汲鱠 崔禹錫食經 鮎ハ轉ゝ往〳〵ニあるゆゑ

若鮎

ゝ似ク小ク白皮ありて鱗なし、春生まれ、夏長ず、秋衰へ冬死す、故ニ年魚と云、和漢三才図会 三三月の初、江海の交ニ在ク、大サ二寸、ゝゝ鱗肉と生ぜず、のち、呼ぐ小鮎、若鮎と云、本朝食鑑

小網を以〳〵ことをとる、或ハ二夫長縄をとり、縄の上ニ重、とさびを〳〵小石堤をつゞき、相曳〳〵小石川と下る時ハ、鮎石声をおどろかして落ツ、一夫下流ニ立〳〵、扇網を持〳〵二夫の至ると待つ、二夫近づきおどろかす、相依〳〵結び合すると如く、圍撮すれバ、鮎扇網ニ入る、半網と挙、小拘と持て鮎と汲是と汲鰷と云、紀事 大井川ニハ、木柄と以〳〵鮎と

取るごとを汲鮎とよふ

# さ 正月 歳旦開

正月吉辰とそらひく、連哥俳諧

〳〵席とゝのひて以ことを、歳旦の句と云、歳首賀詞の発句と云、歳旦の句と云発句と云、幸木、幸篭

藁盒子○幸木とハ掛るふ粥杖のことくひく北国にて幸木とらひく、女の腰とうつをゑ又門松の根ふ立る木をもさいひ木と云、○藁盒子ハ盒子のごとくあみて、門松ふゆひつけく、供物をこの内へ備へ〳〵、幸篭もこのごとくひく

## 綵燕 春燕と戴く

荊楚歳時記 立春の日、綵と剪り燕

ふ為ることいにしへ、

門ふ帖ス、 ひ部開牛 房の条也、 三 蛙打

## 箪木牛房

## 爆竹、吉書場、

## 左義長、

どんど、

## 十五日

徒然草 左義長、正月ふ打るゝぎちやうと、真言院にて神泉苑の池とをこなひ、

菱の餌をゑます、

焼あらくし、法成就の池ふをいて庭ふ於く、青竹を焼く、

和漢三才図会 正月十五日清涼殿の庭ふ於て吉書を天ふ上らる、十八日ふと亦竹と飾りて、摺扇を結付清涼殿の庭ふ於てこれをやく、唱文師大黒松大夫 其侍四人 第七



二人 爆 鬼面を被り赤熊の髪と蒙て、二廻ハ太鼓と携へ、二の翁ハ逐ひ〳〵赤熊の髪と蒙て、腰鼓とあ舞くるまとろ、童子二人素面まく〳〵赤熊の髪と蒙て、腰鼓とあらそひ又めぐらふ肩衣袴とさゝらとの五人雙び立くこれと雑〳〵ぐんとやとゑ、摺脇をきる者二人、声と和せくまあよ、つまく其来由ともく、歳時記 元日庭前まて竹と爆ゑ山臊を避く、事文類聚 爆竹ハ、神異経ニ云、西方深山の中に人を、長尺余り、人を犯し寒熱を病しむ、名づけて山臊といふ、竹をひて火中ふ著焼ばこれ声あり、山臊驚き懼き悼ふ、 紀事 洛中家〳〵今暁爆竹す其焦あるうる竹と厠の内ふさゝれハ、其家疫ありことき、或ハ免義長の火ふ〳〵餅とやきて食ふ、是と同じ、この火を以〳〵今朝の粥と煮ろ○或云漢明帝正月十五日、仏経道書の勝劣を試むるの遺風也と、是左戈長の弓とも其儀式浮図の事ふ拘ハらず恐らふ附会の説ゝ、凡民間十五日の朝、毎家の飾藁松竹を取収め、一処ふ集めて焼ゝ之を止年止ます、児童の試筆の書と天ふ上ぐ、○武江ふて八官禁ありて爆竹をせず、 御傘 花びらの傘ニ云、正月の餅ふ菱の花の形ふ造、 猿曳 紀事 九京師猿を舞すとあ六人あり、俗俗俎公と猿まそゝとゑ、又云猿牽赤縄

と高貴の家ゟ献ず或ハ猿を舁て厩の披と
爭ふ、是馬樞神とゟふ厩の神を祭ゟう、さえがる
冴 賡韻 寒凝也○い部の凝ゟる、
ゟの部の餘寒、ゟゐ門 併ごろ〳〵

眠江入楚 春ハ佐保山の神より事ゟう〳〵春と浩る神ゟゝひ、秋ハ立田山の神より事ゟう〳〵、紅葉と誄ず
る故ゟ、秋と浩る神とゟゝ、○貞徳日佐保姫立田姫とゟゝハ、唐ニハ
造化の神と名づく、春秋の花とをぢと造り出す神ともゟゝと日本ニ
ハ、春の造化の神どバさゐひめトゟゝ秋の立田姫と名づくるし、
さよひめ神祇ゟゝヤゟゝ佐保姫と名づゟて、其をぢごゟゐ
姐とゟゝう、姿のあるべくふ句と作ゝて、衣と斉ゝもゝをぢ、実
体あるをゐ名、衣類ゟ さゐひめ ころもるゐ
さゝ嫌ゟゝう〳〵

**佐保姫の衣** 新式 佐保姐の衣衣類
まあず、○霞花ゟどと

**櫻海苔** 大和本草 壹岐の島海岸ゟ産ず、其色
紅白櫻の花ゟ似ゟう、庁々相伝酢漬にして
是と食ゟ、

**鼈** 春月盛ゟ出る故ニ、俗ニ鼈の字と用ゟ、

**山叡の皮** 本朝食鑑 叡嶺の
皮外面ハ粗ゟ〳〵皺あゝ、色灰黒、裏面ハ光ゝ滑ゟ〳〵青白、粗皺ゟ削

# 春 さ

ゝ去ゟ用ゆ、其味ゐ辛い

## 二月

**西行忌** 十五日 西行法師ハ左金吾藤
原の康清次男、俗名
是ハ儀清、鳥羽院の上北面徳大寺家の被管ゟゝ弓馬奇道
の達人ゝ、保延三年薙髪〳〵大奥坊円位と号ス 隠逸傳

**花の下ゟ於〳〵死んとを願ふ哥ゟ** 西行臣、和哥ハ禅定の修行ゝ、吾和哥ゟゝ〳〵佛法とそゝう
と、常ゟ仏涅槃の日、花の下ゟ於〳〵
ゟゝ〳〵ハ花のもとゟゝ春死んそのきさらぎの
望月のころゟ、早〳〵建久九年二月十五日卒ス、

**崖我の念佛** 十五日 泉の康清次男、俗名

**拄炬** 十五日 紀事 二月十五日清涼寺釈迦堂の前ゟ大炬両基
と建、暮ゟ及ぶ火を点し、地丁人各炬をめぐり、
跡陀の号と唱〳〵節を繋〳〵踊る、是西域ふ〳〵釈迦と葬ろ
の遺意ゝ世ゟ、拄炬とゐ、

**座論梅** 中花浅紅千葉、其実枝毎ゟ四五顆
長さゟふ随ゝ墮落すること、坐と論

**千梅** らくがせと 虎杖さらさら一種ニ
ぜんまい、既ゟ長〳〵くとらくらくと
名ゝ其萠出〳〵をさらさらにゐらい
ゝ、○い部、虎杖の条を
見合せて、意得ゐ、

## 三月

**嵯我大念佛** 紀事 ゟ十五日迫

あり、是を亦融通念佛の余流と、午の時、士人堂上に於て俳優をなす、是諸人の夢とさめたるがごとし、無二集にも、後宇多院の弘安二年ゟ始まり行なはれ、

**早桜** 花單 大和本草 文選況休文が詩に、山櫻発欲燃と、ハ果木の名なれ、花朱色、火の燃んとするがごとし、王荊公詩に、山櫻抱石映松枝、司馬温公詩に、紅櫻零落杏花開、こゝに中華ゟ櫻と云ハ朱花なり、日本の櫻ハ中華ゟ来りしこと、延宝年中長崎ゟ来りし何清甫ゟも、朝鮮にハ有とぃゝ、○初櫻、彼岸櫻、一重櫻、糸櫻、頭字の部ゟ見るべし、

**八重櫻** 普賢象、揚貴妃、

**奈良櫻** 鞍馬雲珠櫻、虎尾櫻、塩竈、伊勢櫻、江戸櫻、

**庵櫻** 摔櫻、浅黄櫻、犬櫻の類もゟ三月の季ゟものゝ頭字の部ゟ見草、おぐるさ、おぐるー草、吉野草、曙草 和名鈔 名義の類、頭字の部ゟ引べし、

**左近の櫻** 南殿の櫻 禁秘抄 南殿の櫻ハ本ハ梅ありしを、後枯失ゝて、天徳のころ改て櫻を植られしと、 歴代編年集成 ゟも、

**櫻人** 俗云左近の ゟ云ふ 連哥新式 櫻人



櫻のあるゟふ居人をと櫻人とのゝりしゟふさゐ又壱おどりう入ゟずして八ゝんものふあるべし、○櫻人、催馬楽の呂歌に、

**櫻田** 八生せあるそのゝ、そのごとく牡ろくあるゝ、 新式秘傳 櫻田 何ごと京砂ゟ返事みする、さゝ田ハ名物ゝおりふべし ゝやぎるゝのごとをりゝ、○又櫻田、紀伊国の名呼ゟもあるゝ、

**櫻戸** 哥林良材 櫻の木もゝゝつゝくる戸、松の戸、杉の戸の如し、○一説、戸の近辺ゟ櫻の咲ゝるゝをゝ、只櫻のあるゟゝとの宿まゐ、

**櫻狩** 奥儀抄 櫻を尋求むる心何をもむも狩とゝ、○草狩のごとゝ、

**櫻草** 和漢三才図会 山谷の中ゟ生ず、即九輪草の一類異種ゝ葉の形相似ゝ微小ゝ、遠ゟ鋸歯あり、甚光沢あゝすゝして、葉の心白ゝ、三四月苗と抽んでゝ花を生ず、單の淡紫、或白花、櫻の花のごゝ最艶美ゝ、故ゟ名づく、

**櫻貝** 今櫻貝と称す

**千梅ゝゝぜを** 櫻川の誼ゝ、ゝゝゝ奥ゝゝゝくもあゝゝやと、その、恰もゝゝゝの散ゝ、地ゟちくがごゝ、

**櫻巣** 作まゝと考ゐゟ、常陸国櫻川霞が浦の辺りゟハゝく名ある奥のあゝんともゞゝゝ、予先年筑波登山ゝゝく、彼辺一見せゝ時、好

事のそのふ尋ぐるふ、巻ごとに、いろ〳〵ふ櫻奥
ものいさ〳〵ふる奥あり、春暖をそそ
てすゐくる、則この浦の名産、若さゝ云奥是ゝ云吉藍ニ運
歩色葉 国栖の注ニ又鼓司、吉野の人の名かり、吉野の楊落
て水ふかり、奥とあるやるふ、櫻奥ゝらんと
云ゝそゝられバ活法の書こゝらふ因て出ん、櫻鯛 本朝食
鑑 音書
ゐゝ春三月さゝの花ひ〳〵そゝて、漁人多く〳〵とゝる、故ふ櫻鯛
とゝ、〇ゆく春のさゝひの浦のさゝぶ〳〵ふおもふやらん、
為家 櫻うくひ 千梅ゝ〳〵ゝ 正字未詳、鰄の字と用ゐ来
る俗字ゝどゝ
〳〵、五六すゝり大きゝとの七八す、背黒〳〵腹鰭赤〳〵、信ふ誠諮の
湖水ふ〳〵赤奥ゝらひ、管根ふく赤腹ゝゝ、其外処〳〵ふおりて、春
花さゝそろる頃取ものと
櫻うくひとゝ多ゝゝ、 櫻衣 道遥院御抜 面白、裏青ふ、
関白大目等春着之 挑花御
説 面白堂裏浦萄染 三月大根
又面白、裏赤花ゝ〳〵
長〳〵、名づけて 楊花蘆蔑ゝゝ 和漢三才図会 春ニ
至ゝも赤葉と採て食べさゝその三月大根と名く、 三月盡 三月



の晦日ゝゝ、春の果
春の限ふぞもいつて、

## さ

### 正月 祇園の削掛 元朝寅刻

神社啓蒙 祇園社ハ山城国愛宕郡八坂郷ふ在、祭る所の神三座、
午頭天王ハ王子、少将井、 紀事 晦日子刻、祇園の社神前の灯燭の
外ことごとく火を滅〳〵、暗中恭詣の人口と悠ふく他人の瑕疵
も尓ふらず、假令その声をゝく、其人を知ゝとゝも、争ゝず恨ず、
ゝゝと懺悔の儀ふり〳〵勧善懲悪の微意ふ丑刻ぢゝふ執行職
輿ふ乗り社司前駆〳〵、執行拝殿ふ登ゝ、神前ふ向ひ〳〵黙坐
すゝゝとゝぢゝふゝて、経呪を誦ゝ、東西の欄の内ふ頭ふ削
掛の木ゝ左右ふ建おくゝと各六也、是十二月の數を表ゝ是ゝ卯杖
と称ふ、而ゝ同時ふてゝを燎ゝ、傳〳〵其烟西ふむく時ハ、近江の国又ちろ、こゝふ〳〵て、両
来年五穀熟せず、東ふむく時ハ、近江の国の豊凶ゝ占ふ、故ふ西方ふ居る人ハ、高声ふ、近江ゝとゝび、東方の
人ハ、冊波ゝゝとゝ、其烟気ゝ避んと欲すゝ〳〵、其後社司、新ふ井水
を汲ゝ〳〵、削掛の火を以ゝ、元朝の供物を調ふ、是新年水火と改るの
義ゝ、春詣の諸人も、又其火を携ゝ〳〵、家ふ帰り、元朝の粟と煮る、
君が春 烏兎資慶郷の書のゝとのおゝ、君ゝゝむるハ大君ニ
終ゝ故築地のうちまでも讀ゞ〳〵、それも君あるで

誰もあごえとうて熟ー

る詞ハゆくすとゐて、

を**着衣始** 李吟曰衣と着初る祝 シ三ケ日の内吉日とそ**ぶ**

**御慶** 年の始の祝詞、○長松が親の名で來る御慶ホ野坡

**毬打** ぶらくー 玉打

**萬葉** 神亀四年正月、教王子、及諸臣子等、集於春日野而作打毬之樂

**袖中抄** 十節録ニ云、黄帝蚩尤が頭をうち是と毬とす、今の毬杖是ニ彼例を以ー、漢土年の始ニ件のことと用ひく国中凶事ナシー、仍て日本国その例を学びく毬打をうつニ、

**醒斎**

**骨董集** 正月男童のそてあそぶ毬打ハ、馬上ゟ武事ともくそす業うくと和漢ともにその来ること久ー、ニ又、毬杖とハ槌の形ー、杖ニ玉とらてハ片ー木と平ふけづくー、玉のさちあり作りうとのし、打やうハ、其間九十間或ハ八十三間とへだて、其半地上ゟまりとひきて、かさうとー、男児双方みうれくかの玉と、地上ゟあげめぐー千と、一方ゟ推もてうちとむるとめぐすてー限りのすぐうさ迄く玉のめぐり越るを、打とむるさの負ゟ、或ハ打とらて、限りの内ニ打とむるさの勝とー、打とらさる方の勝とー、投うるさの負ゟ、是ニ毬杖の玉打とらひー



も京師ゟハ玉打とそ、其あごうあるー、昔のごく毬杖の椎ハもちのず、竹杖等のうぐ、玉をうちとむるのことそ、

**同上** ぶらくの名ハ古き書ゟ見あらべ、近き昔造り始うとのあごー、毬杖と同物と云ひそうくー、元来別物くー、本草啓蒙ニ、碌碡ハ田器ニ形瓜の如くして六稜あり、両頭ゟ索あるくー、土上とひきて地面を平うあつる具ニ、三才図会投時考ゟ図を載す、本邦正月児戯のぶらくハこの形ゟ象れり、今この説ありて撥ゟ、正月男児ゟぶらくをうてあそぶー、ハ年の始ゟ農業のまねびとす也、農事とすもる意あるべー、古画をうふぶらくゟ紐とけく地上を引ていと多く画けり、是田畑の地面を平ゟするのまねびあんニ、今ハ年始の祝ひのおうそのふうつのニ、何の所用もなきものとなりぬー、○毬杖

ぶらく共ゟあわくをことハ、**骨董集** さ部、尤ニ云、古き図を出ー、ー云ふて、

**吉書揚** 長の条ニ出ス

**行幸梅** 綸旨梅○大花、紅ゟく千葉ニ、二名一物ゟ、

**御忌** 北五日○洛の東山、華頂山智恩院大谷寺、浄土宗惣本山ニ、正月十八日ゟ北五日ゟ至て、一七日晝夜別行法事と修ス、北五日と以て正日とす、是法然上人

の忌日之、故ゐ御忌と云、○京俗、御忌詣と遊覧の始めとして、無當そゞめと云、十月東福寺の開山忌と終りて無當納式、

兼二

## 三春ノ物 雉子 きゞす

雄始雊、孟冬入大水為蜃 和漢三才図会 雄、雄ハ頂ゐ雙くる角毛あり、頭頸胸腹翠黒色にして光あり、頬眼紅ゐ觜青くして尖り、背翮彩斑色にして腰ゐ長き緑の毛あり、尾長く文采あり、翅短くして蒼黒斑にして脛掌、雌ゐ似て劣り、雌ハ黄赤黒斑にして文暗く尾短し、

鴝恒鴝 こまどり 雉を愛するの切なる、

## 金衣鳥 鶯の異名、 閑元遺事

明皇禁苑中ゐ於て黄鳥と云ふ、呼て経ゝ鳥と云ふ、その鳴声金衣公子と云ふ、故ゐ金衣鳥の名あり、

法華経と号ず 千梅 茶人炉ぶちを用ふる炉びらと云ふ冬中

## 木地爐縁

如し、故ゐ此名あり、八釜ぶちと用ひ春ゐ至りて木地のぶちゐ仕替ふる、茶人曰、春ハ陽気つゝしみ、炉の内より灰と吹上げ、炉ぶちふかゝりて見ぐるしく依て木地のぶちと用ふ、是茶道の古実と、他説ゐ曰、此説よろしからず、

## 三月 行基忌

二日○摂州河辺郡昆陽村、崑崙山昆陽寺ハ四十五代聖武帝天平五年草創、開山行基ぼさつ其師の像を作りて安置す、天正年回禄す、今僅ゐ小宇を構へ本尊及び開山の像をおく、心町東ゐ池を昆陽の池と云、池中の鮒三多一眼く、池の魚を祭て行波明神と号す、二月二日里民参詣す、是を行基忌りと云、○行基ハ姓ハ高志氏泉州大鳥郡の人、百済国王の胤之、天智七年ゐ生る、十五歳ゐて薙染ス、

## 祇園御八講 八日 勅会ゐて行ふる、

ゐ、今台家ゐ於て修行する法之、法花経二十八品ゐ結経無量義経を加へて、三十日三十口の式多、八講壇とて両壇相対して飾之講師問者と定め、右座ハ仏名をゐて付ゐ唱へ、左座ハ法花八巻の大意と論ゞ別ゐ論題を設けて論義を其外伽陀、唄、散花ゐの法式厳重之、天台一宗ゐて修行勿論之、或ハ禁庭の御八講ハ奥福寺、東大寺、延暦寺、園城寺、四箇大寺の碩徳と召ぐると云、行基菩薩の御哥、法花経をこぶろ〳〵とハ薪ごと菜摘水汲つゝそへ、此哥をゐて付ゐ唱ふると云ふ、もおう、提婆品ゐ採薪及菓蔬随時恭敬與の例とて薪の行道とて、天子自ら御行道ゐて薪菜篭水捕等六位

蔵人三人役之捧物行香まの事、委く記しぶし、祇園御八講定く台宗別院の時、勅会を行まつるや、今も社内ゐ慈慧大師の像と安置して、遺跡分明ゝ、**吉祥院八講** 九五日 菅家長者記 吉祥院ハ菅家氏寺、天神の祖父清公建立、東寺の西南ゐ在り、加賀国富墓の庄ハ、古へより主あ〳〵荒廃の地ゝ、宣旨とヤ請ゝ、神領ゐ施入せ〳〵め、永く法花八講の料所とるす。 公事根源 二月廿五日ハ天満大自在天神のさまあしまし〳〵御日ゝ、愛のつげあく〳〵、天仁二年より吉祥院みく八講あり、菅家の巫女の文子とをぐらゐ曼と取〳〵神前ゐ供ゞ曼と手供とらひ、又轉供とゝ、或ハ菜種の御供と称す、供物の上ゐ菜花と挿む、故ゐもろふ、或ハ歳ゐ〳〵菜花ゐと闕ぶ曼ゞ梅花と挿む、

**北野御忌日** 九五日〇北來種の御供 神社啓蒙

北野社ハ山城国葛野郡ゐあゝ、の家、大小の御供を北野の社ゐ献ゞ宮司老少相迎へなゝゞゞ立て、幣殿より神前の階下ゐ至り手毎ゐさゝと傳ら、宮司の一老と巫女の文子とをぐらゐ曼と取〳〵神前ゐ供ゞ曼と手供とらひ、又轉供とゝ、或ハ菜種の御供と称す、供物の上ゐ菜花と挿む、故ゐもろふ、或ハ歳ゐ〳〵菜花ゐと闕ぶ曼ゞ梅花と挿む、

**孝子御讀經** 江次第頭書 春秋二季、百僧と南殿ゐ請ゞ大般若経を読〳む、其内御前僧九口を定く、

御殿ゐ於〳〵仁王経を読〳む、納言参議各一人南殿ゐ着て事と行ふ、自餘ゐ御殿ゐ候ず、貞観御時毎季ごと行ふ、元慶の天皇践祚之後、二季ゐ修之 公事根源 二月八月大般若経と百〳〵ゐ講ぜ〳ふ、四ケ日のそゝ〳〵行幸とゝ僧ニ拳どのゐ、天平元年四月八日ゐ

**菊若葉** 本草 初春地ゐ布て細苗を生ず、是ゐ宿根より生ずるとのゝ、又種子ゐもぢめらる、行幸ハヒキチヤとゐむし、

**三月 經供養** 二日〇扇砌四天王寺太子堂の北隅ゐあり、本尊如意輪観音、三月二日経供養と修ス、太子夢殿の経供養是ゝ、寺説ゐ云、今日未の下剋、聖灵院の白洲ゐおゐて経供養ゐ、宝輦を宝殿の西ゐ出御〳〵奉ゐ、衆僧諸役人着座寺僧惣礼回向、次ゐ舞楽ゐ、其外

**曲水宴** 流觴 巴字蓋 羽觴を飛す

二月十五日ゐ〳〵

荆楚歳時記 三月三日四民水清ゐ並び出ゝ、流觴曲水の飲をゐ、〇公事根源 むし〳〵王卿ゐ〳〵ゐ、御前ゐて詩と作ゝ、講ぜ〳〵れ、ゝゐ、御溝水ゐ盃をうかべて、文人

河骨の花ゐ似ゝ毒草ゝ、千葉のこの美ゝて可ゝ愛、**金盞花**　時珍曰、金盞艸一名長春花、金盞ハ其花の形ゝ似ゝ、長春ゝ久ゝゐ耐ゝゝ、夏実ゝ結ぶ、蕚ゝ宛も尺蠖虫の数枝ゐ蜿蜒する状ゝ似ゝ、○周憲王曰、金盞児花苗高サ四五寸、葉初生の萵苣葉ゐ似ゝ厚ゝゝて、狭ゝ、莖ゝ抱ゝ生ズ、莖柔ゐ脆ゝ、莖頭ゐ花ゝ開ゝ、大サ指のかゝらの如ゝ、金黄色、状盞子の如ゝ、四時絶ズ、

**菊栽替**　月令廣義　菊花、穀雨の時、根ゝ堀起ゝ、壮嫩ゝ根あるゝゝの単ゐ種、麦白あるゝとの亦種ゞゝ、活ス、但ゝ其根ゝ浮起セる白鬚一層ゝ去ゝことゝ要ス、乾濶土ゝ以ゝ種、築実ス、雨中ゐ分種ゞゞず、濕泥ゝ根ゐ了ゝもゝゝ、花茂ゝゞず、早ゝ分ゝとゝろ、かゝる、

**霧島つゝじ**　紅白紫数種ゝ大隅国、霧島ゝゝ山ゝ出せる羽ゝ、和漢三才図会　譲葉

**ゆ**

**正月**

**楪**　木、俗ニ楪ゐ作ル　挍草

**子**　ゝゝのふる歯固の具ゝゝそゝひゝる、　埃嚢抄　杜の字ハユヅリハゝ世俗正月ニ用ゝ○此木ハ新葉生ゝゝのゝて後ニ旧葉落ゝ故ゐ譲葉ゝ名ゝ、又和名親子草ゝゐ、

**弓始**　甲陽軍鑑　弓始ハ正月廿日ゝ、射手ゝ、的ゝ、射ゝ、的ゝ、射ゝ、的ゝ、射

是みそうく豹尾の頭を踏こえ、黄幡の尾を射つゝ、陰陽暦 黄幡の方弓もつめき吉、

雑談

湯殿始

抄 和俗、嵗の始め沐浴すると湯殿始とゝふ、

和漢三才図会 櫇栂ハ柚の属にて其枝葉花ミな柚とこゝうるゝ

柚栂

実の形も柚に似て最大きゝ、

雪解

雪消 ○陽春の気おおいて旧年の雪の消るを云、

氷解

貞享式 解ると春と消ると冬とこゝに分れ、ハ泥れくるゝ、ハ冬の内にとけ雪の消めハあれども大さ春気の催さゞるゝ、冬の気の去りゆく天地の理なるゝ、只打やるせく雪消雪解ゐる時ハ春と云、其取分ハ冬と定がたし、

既に古式ハ解ると消ると春ゐるゝとゝ同じことゝ記せバ解るの詞を改めつゞさることあるべし、

凍 風俗通 猶氷と凌とハ氷壮なるを凍とゝひ、氷流るゝを漸と云ひ、氷解るゝを泮と云、

月令 辛春之日、東風解氷也、ゝゝゝの本文、天地間大ゝの理を以て定めたるの文なるゝ

月令廣義 正月中、雨水中、気雪散為雪、ゝゝゝ春ゝ雪の名残冬のゝゝゝ人あれどゝゝ、雪の名残ゝゝ

御伽 雪の空、雪のくれ、残る雪の絶間、雪の雫

みゝゝゝ其意を得べきことゝ記して、

雪ゝゝ春ゝ雪の名残冬のゝゝゝ人あれどゝゝ、雪の名残ゝゝ

残雪のゐゝゝ、雪消の水とゐゝゝ、雪ぐもり

雪譜ニ ゝゝゝ、

湯島天神の砥餅

十日○江戸湯島天満宮ハ、文明十年六月太田道灌ハ、

夢想のゝゝゐゝゝて、城外の北畔ゐ、菅神の祠堂を建ゝ、数十頃の梅田をも、梅樹数百株を栽ゝゝ、○毎年二月十日、別當喜見院、餅と砥石の如く四角ゐゝ神供ゝ、後氏子の家ゝゐ配る、世俗、湯島の砥餅と称ス、或云、戸餅ゝと、

遺教經會

九日ゟ十五日迄、○瑞應山大龍恩寺の釈迦堂ハ、洛の訓讀會ゝ云、上立賞朱雀の西ゐゝ、元天台宗ゐゝ、近世真言宗ゐゐ、方丈と養命坊と号ス、十本の釈迦堂是ゝ、

紀事 この寺に藤原の秀衡建ゝゐゝの堂、教經の堂、二平の教經初年の御手習せゝと云、寮ゐ一説ニ秀衡の堂、教經の堂、ゐゝゝゝゝある処ゐゝ多ゝ廃頽ス、近世ゐとゝ再興すゝゝ、又一説ゐ猫間の中納言光隆卿の家士、岸高拾、十本の地ニ大報恩寺を建ゝ、如琳上人と請ゝゝゝゝゝゝゝゝ秀衡の堂、教經の寮ゝゐ誤ゝ、毎年此節雪ふゝ風烈ス、故ゐ児童の諺ゐ雪經ゐ参ゐんよゝ人寵の前ゐ恭ゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝ

実とむすぶ一枝数十顆、大サ脆櫻桃の如し、夏月熟して珊瑚の類ナリ、鮮堂愛すべし、採て食供ズ、**行春**

春の過行て暮春ニ至、○行春ヲ和哥の浦なぐり追ひ付こう　芭蕉

**め**

**兼三春物目刺**

和漢三才圖会　竹串と以て鱠残魚の目と貫き相聯ね曝し乾し製ス作るニ、勢州桑名ニて専ら製之、**めざし**

**柳**　早春芽のもえ出んとする柳の犬子柳とめもう柳と云人あまで別種ニとる、**三月**

**時**　部ニ蛙のめう時として出、

**み**

**正月供御薬**　菓子　屠蘇　白散　度嶂散

○元日ノ三ケ日平旦ニ供之、天皇清涼殿の東廂ニ出御あらく、御歯固の御膳と供じ次ニ一献と供ず、御酒と煖ル御羹と入献と供ず、則白散之事終ル三献を供ず、此度度嶂散之事終ル三献と供ず、御酒ニ入ル奉ル其儀式、**江次第**ホ　○薬子とハ御生氣の歳ル童女の、むらさき嫁せざる者を求めて、つとめむらさき　**紀事**　古ヘ屠蘇の屠死戸の戸を忌ク一点と加ル戸ヲ作、是本朝之故実ニ、**三朝**　日の条ニ出



ル、此寺ハ晋賢像の櫻ありて、倡ニ晋賢堂の櫻と云、閻魔堂の前ニあり、凡十本釈迦堂念仏と云ハ文永年中如倫上人を始と今とても実ハ恵心僧都の高弟定覚上人ぐむと云是釈迦堂念仏の祖ニ、音乱名号大念仏と云、且中絶ル事二百五十年のこと徒然草ニもこゝろ、此法會九日ヨリ十五日ニ至る東山智積院の僧徒ニてとりおこなひ、訓読会と、遺教と訓読するニ此教ハ釈迦涅槃ニ入ル前ニ仏弟子の為ニ遺戒ル経と、故ニ遺教経と云、**雪の果**　凡毎年涅槃の時ニ及ル多ル雪降る、故ニ世倡雪の終涅槃とも是ナリ、

**三月**

**楡柳の火**　かゝ部寒食の条ニ出ス、

**油花の卜**　**図経**　洛陽上巳の日、婦女薺の花を以ル油ニ点ル祝ル事ニ、花卉の状を卜ル、**夢見草**　櫻の異名、**蔵玉**　植ル吉、事ニと油花卜と云、**花彙**　八閩通志云、櫻桃の木大ナルものハ丈ニ近ル、春草あるものハ、ふのいろなり、**櫻桃花**　花ル、形止渇ニ似ル小ル、白花紅暈最繁密ニして枝ニ満ツ、其葉円尖ル、援葉の如ル、頗狭少ル細キ歯及び小毛あり、

## 三物の俳諧、三物賣

紀事 正門、連哥

俳諧初〻席を設らく、凡京師おおよそ連哥の長、是と花の下と号ス、又宗匠と云毎年今朝其一家中其事と玩ぶ及び子孫も其宗匠家ゟ集り各連哥を興す、其才一句と発句とも云、才二句と脇と称す、才三句と第三ッ物と称す、今朝これを作るゟ随〻剖判氏捽ゟ鏤めて市中ゟ賣る、近世俳諧も亦然り、高直ゟ連哥俳諧の三ッ物と呼く街衢を往来す、

## 水祝

旧冬新〻ゟ妻をむこうる男ゟ水と祝ひて、朋友相催し酒肴を携其家ゟ至りて、水を祝ひあべせく〻今ハ官ゟ禁ぜらる、

## 箕面の富

七日〇今夜諸人指物箕面山の毋天ゟ競ひ来り、堂上ゟ富とつく、先天女の前ゟ大擔三箇と置、才一才二才三と称ス、その擔の上ゟ小孔を穿ち、各三の擔ゟ納了て大ゟ運転して後寺僧長き錐と以て穴ゟ突名ゟとのハとべ、富と得るこれ



札の次才のおく〻

## 御薪

十五日 公事根源 是ハ百官悉く薪と奉喜式ゟ、御薪と書てこれもぐさと訓ず、宮内省ゟをさめらるゝ、其数ハ延

## 三保祭

十五日 延喜式神名帳 駿河国盧原郡、御穂神社

〔五、〕慶長年中ゟ有度郡ゟ属ス、羽車磯田の社ハ本社と去ること南へ六丁余外濱の海畔ゟ在、此社祠古へハ数十町とへだゝり、海中三四丁おくれるものゝ如し、漸く汀渚を没して社地と退く、只今此処と羽衣の旧跡とて附会の事ゟ風土記ゟ羽車磯田の社も御穂大明神の離宮ゟて今ゟ至て毎年祭祀の時本社の神鉾を神幸し、羽車の社ゟ神幣を以て神供ゟと献ス、〇羽衣のこと、往昔この島へ天女天降し故ゟ羽車とこと、神主の家の傳ゟと云、志ゟ羽衣の旧跡ハ今の社地ゟあらざること明らかし、例祭正月十五日ゟ、十四日ゟ十六日ゟ至る、奈詣の人昔ゟて馬とゝもること多く幸来る、十四日筒粥の神事、十五日神前ゟ於て天下太平の祈禱あり、十六日古来ハ神輿神幸し、湯立ゟあり、大永二年細川弾正忠芋範の兵火ゟて、神殿諸宇神器ゟ悉く焼失ス、今ハ神供神酒の

祭祀のこの日、
社説あり、**水入菜**　洛の近郊畦の間ゝ水と貯へく滋
養すると水入菜と号ス、莖葉甚
兼く味美之、**未開紅**　梅の一種之色紅ゐ〳〵八重ことゟ
洛の野琢とす、　花大之、ゟざゝざる時も紅之、
故ゟ　**兼三春物**　**水ぬるむ**　春陽をむさ〳〵水
名く、　もあさうゟゐるゑ、**三**
**葉芹**　二月苗と生ど、一本叢生し〳〵、莖梢ゟ三葉と附く、
今江戸の市中ゟ鬻くものハ自然ゟ生ずる処ゟ非ズ、
ゑの人の作り設る故
中冬の頃よりあり、

**二月**

**水間祭**　上午日　泉州府志
水間寺縁起ゟゑ、
竜谷山水間寺ハ聖武帝の勅願ゟ依く、行基僧正、天平年
中ゟ開闢する処之、本尊正観音、行基四十二歳ゟて自ゟ之
作ゟ、二月初の午日を以く会日とす、相傳ふ、此日歩ゟを運ぶ
その人、四十二歳の厄難を消除し、且福毒と得ると、
云ゑ当日参詣の人土産ゟ草藘を
ゟ部、二月堂
行の条ゟ出ツ、**水口祭**　なゟ部、苗代
の条ゟ出ツ、

**三月**

外傳　三月桃花水之時、鄭国之俗、三月上巳、於溱洧両水之上

執蘭招魂續嘅被除不祥朗詠源起周年思魏文已
巳ノ日の祓ハ周の世ゟ起り魏の世より三日を用ゐそゑ、○本
邦ゟ早くゟゑそゑす、部項
ゟの御祓の条併せゑゑ〳〵、**御酒古草**　蔵玉のむ人
おくゟんゑゑくさゑすゑゑゐのゑく　や千代を
御酒古草ハ三月三日内裡ゟて御酒ゟ入ゟゑ〳〵桃ゟゟ、**三千**
**代草**　桃の異名ゟ、西王母の園ゟ三千年ゟ一度花咲ゑのる桃の
ゑゑゑ

ゐ至て念仏あり、其間士人俳優となす、世ゐ生粋言ト、是衆人の嘲となさるゝ、是もまた融通念仏の余流ならん、

この俳優ゐ用る仮面ハ仏工

[通俗志] 十生念仏ゐ並べ記せるも、おろそかなり

定朝が作、二面あり、

## 千生祭

例ゐ祭事、鎮守

祭ハ八月十二日あり、

## 御影供

共一日○弘法大師の御影供

あり、承和二年三月九一日入

定、今ゐ至迄、此日真言家の寺院、大師の像を安置

〳〵、御影供と修ス、就中御室東寺へ詣るもの多し、

## 蓑

## 荷竹

[和漢三才図会] 蓋の蔓葉及竹ゐ似て、葉嫩

時珍曰、茨蔓三月葉と生じ、水ゐ貼ス、荷葉より大ニ、皺紋

時荳も亦噉ふべし、俗ゐ茗荷竹と称ス、

## 水蕗

## 花

穀の如く、蘆岐〳〵、蒲が如く、面青背紫、荳葉ゑ剌を、

其荳長さ丈余ゐ至る、中ゐ孔あり、綵を、嫩者皮を剝く食べし、

五六月紫花と生ず、花開く日ゐ向ふと芭と結ぶ、外ゐ青き剌

あり、蝟剌及び栗毬の如し、花芭頭ゐ、雞喙蝟喙の如し、

[多識篇] 水沢の中ゐ生ず、俗ゐ雞頭盤と云、或ハ鬼蓮と云、此その五

六月花と開く、

[和名抄] 芡、和名三豆布木、

○新式等ゐ三月ゐ至ら據あり考ふべし、

七

正月

# 四方拝

元日寅の一刻ゐ、天皇清涼殿の東庭ゐ於て、

天地四方を拝し、

[公事根源] 属星と唱へ、天地四方山陵を拝し、

年災ことを掃ひ、宝祚

拝もとゝ祈ら、

## 諸司奏

是ハ元日の節会ゐ中務省、陰陽寮と率ゐ、

永撰腹赤の御贄と奉ることゝ、其儀式、江次第ゐ詳ゐ、

## 七曜御暦

是元日の節会ゐ中務省、陰陽寮と率ゐ、

奉る、

[公事根源] 七曜の御暦ハ、日月火水

木金土の七曜をもつて

うのはねの暦ありとぞ、

## 叔氣

[和名抄] 早春うつ一気ゐ、

千門叔氣新と、詩ゐ

作れり、○只新春

の気をいふ也、

## 試筆 試毫

吉書 [羅山文集] 我朝

書初 年甫ゐ字と写

す、ゐ試筆と称ス、故ゐ試簡試鬼と

試禎 試毫或ハ試春と称す皆然り

## 椒觴

[荊楚歳事記] 元日椒柏酒を

精えたるを服せバ人と〳〵鬼

拍ひ仙羌ゑ、[風土記] 元日長幼と〳〵

拝賀椒酒と進む、桃湯及び柏葉酒を

## 椒柏酒、椒酒、

飲む、○椒觴 椒盃 椒

盤ふる振と迄ゆ如願 歳時記 商人ある清潮を過ぐる清酒と飲の器也、湖君ゐ見ゐ、君問「須有」人教ゑ、但加願を乞ふ〳〵と君許之果〳〵一椀を得ゐ、如願ハ即其名く、商求る所あるとバ悉能くゑとと致す、後正旦ゐ如願晩く起るゐよりて商人こゐゐを撻つ走ゐ〳〵糞壌の中ゐ入ゐく見ゑず、今人正旦細繩と以く偶人を繋ゐく糞掃の中ゐ投ゐく今加願とゑ、五雑俎 閻中の俗、糞土と除うず、初五日ゐ至〳〵馨ゐて〳〵野地ゐ至ゐく石と取く返ゐく宝と得ゐうとゑ則古人加願と喚〳〵ゐん ぐん の意ゐゑ、

## 春盤 生菜

齊人月令 立春日生菜と食、新と迎の意ゐゑ、

春餅生菜と以て相饋送ゐを、春盤ゐ号、

## 戴春燕

の条ゐ出ヅ、

## 上辰

三月上巳とゐ〳〵、正月の上辰をもゐ〳〵、

## 注連の内

内の条ゐ、

## 歯朶

部、松の穂長 本草 其根一本ゐ〳〵衰枝ゐ生ゐと貫く故ゐ鳧尾と名づく、根と貫衆とゑ、

裏白 和漢三才図会 葉ハ巌及い狗脊ゐ似〳〵葉ゐ薄〳〵、面青く背白〳〵、四時拈ず、以て元旦嘉祝の物ゐ飾る、〇一説ニ蘭ハよりひ朶ハえざ、朶ハ長延ゐうとゐ故、齢のぶ七日とゑ、

## 人日

東方朝占書 一日と雞とゐ、二日と狗とゐ、三日を豕とゐ、四日と羊とゐ、五日と牛とゐ、六日と馬とゐ、七日を人とゐ、八日を穀とゐ、

## 真言院御修法

帝王編年記 兼和元年始く真言院を宮中ゐ置、鎮護国家、五穀豊饒の為、毎年一七日と限り修法せらる、公事根源 こゐ金剛界ゐゐバ、明年胎蔵界、年こゐうるく修法せらる、拾芥抄

## 宿直人

〇八日ゐ十四日迄被行之後七日之御修法是之 真言院八八省の北ゐあり、〇 宿直人 徒然草 後七日の阿闍梨、武者とあつむるとゐ、いつとゐぬさゑゐ、宿直人とて、かくことぐくちくあるふゐ人一年の相ハ此修中のあらそひふることゐゐ、もゐバ兵とゐあつむるゐ、もぐやるゐ〳〵ぬこと、漢語抄 晝勤ゐを直とゐ、夜務ゐを宿とゑ、合せく止乃伊とゐふ

## 叙位

五日 公事根源 天智天皇十四年正月ゐ諸王諸臣ゐ爵位をうふとゐ〳〵、天徳五年ゐり、五日ゐ始て此儀ゐり、是ハ諸臣六日ゐて侍りしと、天徳五年ゐり、五日ゐ始て此儀ゐり、是ハ諸臣

の年労を奏〳〵、位と次第を叙すること、

## 十四日年越

紀事 今夜俗十四日年越と称〳〵相祝ふ〳〵

## 上元日

花燈の夕 ○正月十五日と上元とをいひ七月十五日を中元とをいひ十月十五日と下元とをいひ、○花燈の夕とは、唐の世も上元の夜燈燭と列ね游観するとぞ、五雑俎 天下の上元灯燭の盛なること、閩中を最とするとの事〳〵

## 獅子頭の神事

十六日○伊勢国渡会郡山田郷にて祭るところ七社或は八社牛頭の社中島、大社一の木町、藤の社太神宮御山内、今村の社高柳、坂の社坂の町、苗の社高倉山の麓、箕曲の社苗根内、箕曲の社是世古町七社、瀬水の社吹上、以上八社一社ごとに各の獅子頭と合せて八つあり、蚊内一頭、虚空より降ること、残り七つは、常政長宮と云神職の作ること、祭の日、八ヶ所の町ごとに氏子、童の如く長き獅子を出し、松明とともに舞こと、五人傳、云人皇百五代後柏原院、永正の末飢饉疫癘まさしきころ、獅子頭と作り山田上の在家ごとに、次第に下の町へ追やりしことを、其頭と、町ごとに産汝神と崇む、毎年正月中旬、社より取出〳〵て、鼓吹〳〵く舞ありく〳〵、氏子の家〳〵くめぐりて、鏡餅松明、或は十二灯籠などを出し〳〵、十五日終夜廻りて、十六日小田橋の上にて刀を持て、悪神と切排ふ体を為〳〵、即座に獅子頭と舞表ありて押つゝみ其社へ納め入ること、十五日より十七日までをいふなり、

## 下崩

月令 是月也、天気下降、地気上騰、天地和同、草木萌動、

## 春鶯囀

春魚、鱠残魚、王餘魚、銀魚、和漢三才圖会 俗云白魚、江海の交に生ず、立春の後に出る、

## 白魚

初て出る人ごとに賞す、三月腹に子あり、味稍劣る、生も青色を帯、水と離るれば白く、煮ればまた白し、潔白あり、下畧

## 兼三春物

## 志〳〵玉

## 蜆

## 槿柳

扁螺とも、文字集畧 蜆貝は蛤に似て小〳〵黒色、字又蜆に作る、

## 槿柳

本草 一名亜緑柳 按に羅願が爾雅翼に、槿の両〳〵んとして、氣を起して以て應ず、又霜雪と負て凋まず、及び木の聖なるものゝ故に字、聖に从ふ又両師と名く、或は曰、両と浮るときは亜〳〵として綵の如く、幹弱く、枝垂れて掃ひ生〳〵易く、赤皮細葉緑の如し、

## 昆川海苔

の部、海苔の条に出す、

## 白藻

本草 竜鬚菜、東南海中の石上に生ず、叢生して枝葉

あり、状ち抑眼の如し、鬚長さ尺余、白色、醋と以て浸して喰ふ、

## 二月 常樂會 十五日

拾芥抄 二月十五日、南都興福寺常樂会、紀事 今日、東金堂ニ闍浮檀金の釈迦像あり、その扉面ハ涅槃像を、相傳ふ、金罡が画く、浮之と、今日其扉を開く、涅槃経 常楽我浄四徳波羅蜜云々、○涅槃会、常楽会同じごとく、抄略四天王寺にても、涅槃会と 紀事 二月十六日 盲人検校以下各京高倉綾の小路なる常楽会と云、

**積塔** 衰分ハ垂迹、清聚庵ハあつまり、光孝天皇の皇子、雨夜の御子の為ハ積塔会と修す、宿忌の頭人大検校、経営と設く、座上ハ守護神の画像と置く、衆盲これを拝し、其後大瓶の酒をくゝ盲人六汎の中ハ四人とゝゝゝ、平家と説くむ、守護神八日吉北一社の中、十社と取く祭之、俗、守護神と誤く、病神と称ス、妖画幅、常ニ捴検校の宅ハ安置ス、其人死すればバ次の検校ハ与奪ス、盲人琵琶と弾ずる故ハ、妙音弁才天と崇むゝ云く、盲人平家を誦ずることゝ、生仏はじまる、中暑相傳ふ、雨夜の皇子盲ひたまふる故ハ、衆盲と愍ふゝり、明日、皇子の忌日ゝゝれバ、よりて衆盲、心経を誦し、琵琶を弾じて、宿忌を修す、○

## 春

千梅曰、雨夜の皇子薨じて後、諸の座頭、墓ニ毎年石と積て、吊ひ祀る、遺風あるとぞ

**聖靈會** 廿日○扶桑東生郡四天王寺聖霊会と八聖徳太子の鳳輦を、聖灵院ゝゝ、六時堂ゝゝその会式ゝゝ 紀事 二月廿二日、太子像并ニ舎利堂の両輿と移ゝゝゝ、六時堂ハ安置ゝ、一舎利二舎利の十二坊の僧徒と合セ、堂前の舞台ニ於く大法事あて、寺中ハ一鶏と、一舎利とひゝ、二と二の舎利と云、是舎利ハ頒るゝゝゝ、当寺、年の法会の中、この会を以く第一とす、ト云

**時宗踊念仏** 彼岸○五条の西御影堂ハゝゝこゝと修ス一遍上人ハ二世應阿自作の弥陀の像と本尊ゝゝ、毎年二季の彼岸中、をどり念仏ハ中世以来、尺と携へく、寺中ハ扇と制ゝてゝれと四方ニ弥ゝ世御影堂扇と称ゝハ是ゝ、寺名、新善光寺上云、

**社日** 尚書 社日、土地、主神也、按ニ今立春の後、第五の戊日と春社と立秋の後、第五の戊日と秋社と主る神と勾芒とり、

月令 二月之節、擇ニ元一日一命民社 郊玄曰、社稷と祭ると云ゝ、春事興るが故ハ祀之農祥と祈る、元日と八春分の前後ハ近き戊日一ヤ、とゝ、元ハ吉也、

**社翁雨** 提要録 社公社母旧水と食ハゝ故ハ社日雨あゝゝれと社翁雨ふ

**治聾酒** 石林詩話 世ゝ云、社日酒ヲ飲バ耳聾ヲ治ス **鹿角落** 月令 仲夏鹿角解、仲冬麋角解 衝波傳 鹿生ルヿ三年ニシテ、其角レテ地ニ墮ス○兼文曰、凡鹿ノ角ハ春生ジ夏長ジ秋堅ク冬脱ス、春ニ至リテ角解ノ候未詳ナリ、

**穴ヲ出** 部蛇穴ヲ出ノ条ニ見ユ **三月上巳** 紀事 今日ヲ俗ニ節供ト称ス、年中五節供ノ一ニシテ、三月初ノ巳日ヲ上巳トス、三月辰巳ヲ建ヲ除日トス、以テ不祥ヲ除ク、五雑俎 漢ノ制ニ上巳ヲ用ヒ、三日ヲ以テス、後漢書 魏ニ至リテノミ三月三日ヲ用ヒテ、巳ヲ用ヒズ、上除 徐幹齊都賦 青陽ノ季月上除之辰、無大無小 按ニ小枝ハ秋千ノ戯ヲ云ヘルカ、秋千ノ戯ノ起ル歳時記 春ノ節長キ縄ヲ於水陽ニ○所謂上巳ノ被除ノ戯ニ、非ズ

**胃索** ゆさ、ぶらこ、荊楚歳時記 高木ニ懸ケ、士女袨服シ、其上ニ坐シ立ツテ、互ニ推引ス名ヅケテ秋千トス、楚ノ俗ナリト云ヘリ、施鈎 涅槃経ニ見ユ 索 玄然ルニ字書ニ考ルニ、秋千ヲバ縄戯ト今其字華ニ従フ、実ニハ當テ単ヲ用ヒズ、天宝遺事

宮中寒食ニ競ヒ鞦韆ヲ立ツ、人ノ宮嬪笑ヒ宴楽ス、明皇呼テ半仙戯ト呼ス 古今藝術 秋千ハ、北方ノ山戎ノ戯ニシテ、以テ輕趫ヲ習フナリ、和名抄 鞦韆 加久由左波利 ○一説ニ、牛頭天皇或ハ赤山明神ノ、是天台護法神ニシテ、此神ハ慈覚大師唐ヨリ帰朝ノ時ニ共ニ来朝ノ神ニ、山門法流守護ノ誓約アリ、大師ノ遺誡ヲ以テ、徒ニ叡社ト建テ勧請セリ、赤山ト号スルコトハ、彼ノ国ニ鎮座ノ地名ニ、釈書 慈覚大師ノ傳ニ載ス

**白酒** 本朝食鑑 酵ハ白酒ノ甘キヲ、和名之良加須酒ト云ヘリ、雛祭ニ供ス 和俗三月三日節物ニシテ、雛祭ニ供ス

**潮干** 紀事 三月三日海潮大ニ退ク、諸人競ヒ来テ、蛤蜊ヲ拾ヒ小魚ヲ漁ル、當日住吉ノ祭アリ、紀効加多、武効品川、其外所々アルベシ、

**修学寺祭** 紀事 凡毎遍七郷、三月五日祭ヲ、其神一乗寺ノ八大天王ニ同シ、

**順ノ峯入** 雍州府志 往昔役ノ行者、入峯ノ道トセシハ、年毎ニ熊野ヨリ葛城大峯ニ入テ、吉野ニ出ル是ト須臾ノ峯入トヲ、尓後大蛇大峯ヨリ出ル路ヲ擁スルヲ以テ入峯久シク絶ヘ、ヒトリ聖宝 醍醐寺開山 ノミ斧鉞ヲ執テ吉野山ヨリ

大峯山の後ゟ入て、蛇の尾よりすぐゝゟ截り、遂ニ熊野ゟ出、是と逆の峯入とも、〇春の峯入と、順の峯入とゟ大ニ、本山方ゟと動む聖護院御門室ニ於く、是と捻按せゝゟ、三井の長吏増誉僧正その室ニ於く是と行ゟ、

**聖桃** 赤白二種、八重あり、単あり、

**日月桃** 仲部、源平桃の条ニ出、

**白桃** 碧桃ト云、〇白桃や雫も落す水の色 桃隣

**石楠花** 本草 石間陽向の処ニ生ず、故ゟ石南と名づ、花彙 処〻深山中ゟ之、大和金剛山最多し、樹大なるその丈ゟ過ず、枝條柔軟ありく、葉ゝ蓬莱紫ゟ類ゝく、厚く長し、面深緑色、背ゟ毛茸ありく、発褐色ニ、四月枝梢ゟ花さく、数十集り生ず、粉紅色、筒子六出、形開羊花ゟ似くり、大サ寸余、頗る栄観ふ堪ふり、雑談抄 京都江戸ゟ移し植ふる、二月の末三月の始花と開く、五出形鄙鶏花の如く、

**椶の花** 万葉 我波奈能其等久〳〵伎美尓故悲和多利奈無 和漢三才図会 木椶ハ葉ゝ椶ふ似く、長く、擘ケバ畧ボ気を、六月細き白花を開き結実



**沉丁花** 和漢三才畫会 瑞香、俗ニ云沉丁花、按ニ瑞香ハ蜀山ノ産ノ類ゝくふえ沉丁花ニ花と開く、高きゟ四五尺、枝幹婆娑ゝく、葉ハ歯あき梔子葉及び楊梅の葉の如し、春花と著く、丁香の如くふりく、紫色、既ニ開くる時ハ四出、外淡紫内白く、十余朶攅簇ゟり、其香烈くて、沉香丁香相兼るが如し、故ニ俗ゟ沉丁花とゝ、五雑俎 相傳ふ廬山の一比丘、岩下ふ昼寝しく異香と聞く、覚くこゟを尋るに、此花と得る、故ふ睡香と名く、後好事のゝの以く祥香と、改て瑞香とす、

**春菊** 高麗菊 和漢三才畫会 俗云高麗菊、春菊、春菜と漂く食ふ脆美之然ども百菊いまだ開らざる時ニ之、故ニ花と賞しく蔬と供ず、一たび苅く後おのづゝ秋と生ず、六七月花を開く、

**新桑摘** 月令 孟夏之月、后妃斎戒親も亦桑ニ、東郷 躬桑禁婦女ニ働蠶事ニ、

**塩竈櫻** 此花至て艶色あり、其樹葉くふゝ、

**秋色櫻** 東叡山清水堂ゟ井のゝ、一名大般若櫻ゝゝ云、小網町菓子屋の娘秋ゝゝの、十三歳の時花見ふ来く、井のそゝの櫻ふぶり〳〵酒の酔粧色

かゝらひ〳〵ふり此名あり、秋色ハ秋が俳名ゝ、其角の門人ゝ〳〵此句人口に膾炙せり、

## 正月

### 氷様

延喜式宮内省式曰氷様の奏主水司奏之此司ハ宮内省に属ス、氷様とハ氷室の氷の厚薄ス浅、験し、氷のあるハ凶年ゝ〳〵侍るハ氷の御祈とて、大法秘法と行ふ事ゝ〳〵や、○この元日の節会にあるとゝ〳〵く部見合

公事根源氷の多くあるハ聖代の瑞ゝ〳〵

### 閧豆、閧牛房、筵木牛房

紀事水煮の大豆、是を閧豆と云、閧牛房煮おゝて生の牛房ゝ筵木の如くさきと盛る、仍て筵木牛房と云、又むゝを牛房とも、両種ともお正客の盛り、歯茎撰をゝ〳〵、

### 人と帳ゐ貼す

荊楚歳時記人日綵と勝〳〵〳〵人とつくり屠風の上ゐ貼ゐ、やゝこゝ頭髪ゐ戴く、又或ハ相遺ゝ新年旧を改め、新〳〵をゐ寿ぐの意ゝ取るなり、

### 弾初

能諧歳時記云、琴三絃鼓弓の類ゝ引弾とゝ、

### むめ始

年の始ゐ其ゝざと試るとゝ、

年山紀聞ニ云、資兼王日記、明應十年ニ云、諸社之遥拝之後、三献有之、次ニ看経、次ニ御コワ、次ニ目始、海人藻芥中御門朝方ノ子息ゐ云恵明院僧正宣守作ゐ云



公家御膳飯者強飯也、執柄家孚加此、姫飯全分畧儀也、但人ゝ依ニ好悪一用之強飯時飯湯也、而近代姫飯之時ゐとゆまゐ〳〵せ〳〵召不叶理也、為章曰和名抄ニ糒粮、和名比女或説云非米類而非粥之義也とありて、その次ニ別ゐ粥と半て、和名之曰加由、薄糜也とあり、糒粮ハむ子しの粥ゐあゝべ、昏ゐはむめゝ〳〵ゐ糒粮を食ゝむるゝ〳〵ゐ糒粮ハむ子しの諸説、ひめ始のまゝ〳〵ゐと解ゐ足まゐむめのゝあゝむるゐ糒粮の義ゝ、

### 毘沙門功徳経

元日

雑談抄古老傳ニ云往古ハ元朝寅の時ゐ犬神人禁裡日花門の外ゐ参りて、毘沙門経の文句と訓読〳〵唱つ祝の義とおせり故ニ此者の黨類と呼て唱文師〳〵称ス又元日毎ニ風ゐ候する故風の者と号ス、風の字音志久〳〵世誤〳〵をゝくとゝ、風と宿と音近き故ら、民家つゝ、元朝未明ゐ門〳〵来りて、毘沙門経と訓読ゐゝ〳〵、中古迄侍りしゝ當世絶て沙汰ゐ、

### 常陸帯の神事

十日 神社啓蒙鹿島の神社、常陸国鹿島郡ゐ在、一官記云武甕雄槌神ゝ〇年中祭礼七十五度あり、中ニ常陸帯の祭あり、其日男女の名と布帯ゐ書記〳〵、神前ゐ置、社人ゝとゝと取授ゝ〳〵、相見ゝ〳〵婚姻と定ひ、正月十日の祭是ゝ、奥儀抄等ゝと

梅の花見ゐて来つるとうぐひすのなくくとひゝもをる、

海上叢草の中多く有之、黎明詩ヲ遇天晴霽則旦飛旦鳴直上雲端其声連綿不已、云云、叫天子 和漢三才畫会 大低雀ニ似て大く、頸背鶸色黒斑ありて鮮明ちゐべ、眼の傍領白く、胸腹灰色脛脚細く長くして距あり、 雲雀

三才畫会 告天子 褐色鶉ニ似て小し、

## 雲雀

雲雀の異名 秘蔵抄 春の野に雛ひよ

## 脊

痩ると云、諺ニ痩る人と雲雀ヲ譬ふるも是ゝ

## もめんとり

鳥ごおふ 腹の中ニ赤きこゝろあり、

## 鹿尾菜

本草 東南の海中石崖の間ニ生ず、大サ鉄線の如く、和名抄 比須木毛也

伊勢物語 おとゝいあふべむぐらの宿ニもきとあり、

## 干鱈

和漢三才畫会 乾ス魚ニ色白きものと上手、黄と帯るとのと次と手、世ニつゝ、角カと好むとの、常ニ嗜ゝ、多く食ふ時ハ其力倍スと、 多識篇 黄顙魚 如名 多良

## 三月

## 彼岸

時正

竜樹菩薩天正験記 欲界六天中央夜摩天率の中ニ大城あり、名て中陽院と云、中の高楼閣ニ雲処基ニ、此院内、竿ニ二八七ケ日の間、色界摩醯首羅天尊ヲ上首ニて、八神并大梵天王、大歳神、乃至玉女、道



帯ありく、一ツ八我名ヲ書、一ツ八男の名ヲ書て、折返して、中ヲバ隠して、まと称ス、ヲ結バまろこゝ、ゆるくと結ばれ、ゑんぐさハ掛帯のやうニ、九く結びつゝがるゝとゝ、○常陸帯との八、神祇

## 枚岡の御粥

十五日 神社啓蒙 枚岡社ハ、河内国河内郡ニ在、社記云、あるゝ、恵あるゝ、祭る所の神四座、才一殿天子屋命、才二殿鵜鵜草葺不合尊、才三殿大国主神、第四殿天照太神ニ、又若宮一座、天児屋命の子、押雲命ニ、正月十五日ト田祭、当日神供所ニおゐて小豆粥と煮、粥の上ニ寸竹管ヲ掛け、百穀ヲ納置、蒸気の強弱ニよりて、年数吉凶と占ふ、当社才一の神事ニて、神主水連氏の外、相衆すゝることなし、是ヲ平岡の御粥と云、十四夜ニ大釜ヲ居て、小豆粥と煮ゝ、其釜の上ニ、五十四本の竹ヲ五ずゝ切て、管と一束と一釣置、十五日早朝、其粥と神供ニ、五穀成就の祝詞あり、五十四品の種物と、一管毎ニ書付ゝ、釜中の粥ニ浸ゝさて一ゝ管と割ゝ、管中の粥の多少ヲ考て、耕作の吉凶ヲトひ、参詣の諸人ニ告知ス、

## 菱の花をほゝ

## 人来鳥

鴬と云ふ、 古今俳諧哥

さ部三毬打

## 兼三春物

の条ニ出ス、

祖神等の人中天上の冥官冥衆集会して、一切の善悪を注す、天尊降りては神を教勅して、三春勘帳を持ちて、三復ハ校して天尊に献ず天尊覧すて善と証ますが為ハ宝印と指し悪帳と証ますが為ハ縛印と指す、然中善と証すが為ハ非宝非縛の印と指す、彼ハ神ハ帝釈、閻王、天大将軍、天一行役司命司禄、倶生神も、皆彼天尊何の由、あって、七日を以て天地の神と召や、答曰、阿迦尼吒天ハ、自在尊の所居、宮殿の前に高樹あり、天生樹と名く、形ち須呂の如し、春華と為って、七日を以て散る、七葉七色、青黄赤白黒紫翠を秋菓と結ぶ七日を以て落つ、菓七色上の如し、花の開くことを見ハ中陽院を穀り、落菓と見て本宮を還る、定て知る、法尒道理然らしむる所と、彼岸功徳成就経

道と成せハ當に知るべし、二八月七日晝夜同時にあって、一切の諸仏三世の諸尊及び無数万億菩薩、説法して、衆生を抜て楽と与ふ、

金剛疏　生死ハ此岸なり、涅槃ハ彼岸なり、煩悩ハ中流なり、涅槃の岸を、煩悩の中流と名く、般若の一心三観を以て、生死の此岸を、

彼岸に到る、

玄門和尚筆記　○時正ハ彼岸の中日と云、中日ハ年中の昼夜少しも長短なく、同じきと故、時の正きを以てなり、

## 比良八講

比良ハ江州比良大明神社、古へ今日比叡山の衆徒、法花八講を修す、今ハ至って比良の八講と称す、彼日湖上多く風烈す、故に船急事ならでハ出さず、

## 引鶴、引鴨

老鳥湖辺に引ハ帰るとて、雀鴨のるる、冬より春まで多く集り居て、春ハ引ぬるとて、○

猿蓑　引鳥の中ゟ交るや田螺取　支浪　この引鳥ともおもって意ハ半時庵其外まぐべし、三月の部に引残る雀とあり、合せて考へべし、

## 一重櫻

一重櫻ハ春分の後花と云、彼岸櫻ゟ十日ばかり遅し、又ハ重櫻ゟ先ぶれと十日ばかり、花処の寒温によって遅速あるべし、凡櫻八一重と以て本とす、故ふるき櫻とのみ称するハ一重のことを知る、

## 彼岸櫻

小白早紫春分の後、彼岸ゟ開き、余の花ゟ先ぶれ、一名小櫻、

## 三月雛遊

### 雛祭

雛飾　犯事　三月三日良賤の児女、紙偶人と製一是と立雛　雛と称し玩之とのハ元贖物の義あって、被具に及ぶ、

源氏物語　○古へ女児のなき遊び、三月ゟ遊ぶとハ、全く上巳の桃の節句と祭と遊ぶとハ、全く上巳の桃の贖物の人形ようの移りきたりしより、

### 姫桃

堀川次郎百首　春霞たちかくさなん姉妹の花　兼盛

道のべのかきねもたわゝなる姉妹の花　兼盛

**緋桃**（ひもも）　絳桃（うるはもも）　○緋桃、八重ありて深紅なるものを、大和本草（やまとほんざう）に桃花千葉ありて大に紅なるものと絳桃とを一物（いちもつ）とせり。

**比良祭**（ひらまつり）　十五日○江刕比良村の祭（まつり）にて、神輿二基、山王十禪師、飛梅天神の兩社（りやうしや）一処（いつしよ）にあり、村は南北十余町とつづきさ神は比良村の鎮守（ちんじゆ）、十禪師は南比良村の鎮守、天南小松村の鎮守（ちんじゆ）、兩神の社一処にあり、村は南北十余町とつづきさ村三社の神輿三基、同月同日祭之と比良祭と称（しよう）し、故に多く山王と崇祭（すうさい）る。

**人麿忌**（ひとまろき）　此辺古へ八一門の領分（りやうぶん）、故に多く山王と崇祭る。

十八日○古へ官家御影供（ごえいぐ）と修（しゆ）す、今おのおの和哥を好む人多くこの日哥会を修す、南都招本寺（せうほんじ）の塔を、或は和州初瀬の辺処にも泊る哥塚、是人丸の墳墓と、浴西鳴滝の妙光寺に人丸堂あり、木像八傳へ云、俊頼の作る処と、又播刕明石にも人丸の御影供を修す、右大倉谷に社あり、○人丸終焉の地は石見国と、神祠は高角の山上にあり、世に高津と祢（ね）す、この祭祀中絶（ちうぜつ）〳〵、御影供の義例（れい）、霊元帝の御宇に及び、勅〳〵絶〳〵と発（おこ）り廃（すた）ると挙（あげ）て、従一位を授（さづ）けたまふことをいふ。

**鶴引残る**（つるひきのこる）　二月の部、引雁の処に記す如く、二月尽も引のこりたるをいふ。





**餅鏡**（もちかゞみ）　は、歯固（はがため）の条に出す。

**兼三春物百千鳥**（かねてはるのものゝももちどり）　八雲御抄（やくもみせう）もゝ千鳥ともゝ人賞（めづ）るが如く春百千の鳥の囀（さへづ）るをいふ。万葉十六　我門之榎実毛利喫百千鳥者雖来君曽不来座　古今　百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく　和漢三才画会　海温水雲○賞のことゝ倭訓（わくん）、海雲は俗に海雲の二字を用ふ状乱絲の如く色青く黒く柔に滑り長数尺石上に生じて水上に浮ぶ是ととゝんと布ごふ滑りて滑ざら〳〵、鮑空貝を用てこれをとる、阿曲鳴戸、泉州岸和田、及び對州の産肥太く佳（よ）き、薑醋み和（あへ）てこれを食ふ。

**二月**　十五日○京師の俗、正月用ひる処の餅花と貯置（たくはへおく）、二月涅槃会（ねはんゑ）に煎（せん）じて供物とす、又正月の餅をあぶりたるの如く煎りても用ふ、是と銚花煎（てうくわせん）といふ。

**諸子魚**（もろこ）　湖水の小魚にて、長さ三寸を限とす、鱗（うろこ）光あり美魚にして其味脂多（あぶらおほ）し、湖水佳品の内に江西坂本ふモロ川とゝを、此魚花多しゝ故ふ名とす、大和本草に西州ふモロコあり油身魚とゝと記せり、アブラメハ其鱗鮠の尾ふ似く、鮠魚とゝもゝ、大サ七八寸、其味甚佳品にしてゝ、是モロコとハ大に異なり大和本草の説ふゆゑ、又モロコハ黄顙魚（わうさうぎよ）ありてゝ、是もらふくて、

黄鯛魚ハ□□こと、江州の俗ワタカと云、大なるもの七八寸、是も湖水に甚多し、モロコハ三寸ニ過ぎず、大小あり、又柳ともろこと云一種あり、活法の書に、柳葉魚と出せるもの是なるべし、形モロコのごとくにして、脊黒く腹ハ黒筋ありて、柳の葉の如し、凡此等の湖水にのみ有て、早春子をうむこと他魚ハすぐれて、腸少も別れず、依て漿子と、此魚おそく江州ハ他州ハさにあらず、江湖の産魚と、

## 三月 桃

### 桃の酒

[諸病源候論] 本清本艸本方云、酒に桃花と漬てよく熟を飲ば、百病を除き、顔色と益す、

[千金方] 三月三日、桃花一斗一舛と、井花水三舛、麴六舛、米六斗、こと〳〵く好く炊く酒に釀し、こと〳〵く飲ば大に吉、○

[御酒古草] 御酒ハ入ること桃ハ委くハ注す、

### 桃花

[事類賦] 其花或ハ仙と成て毒と盛し、或ハ鬼と制み、部の八百ハ石妃の徳をあめ、或ハ瓊瑤の華に邪と祛い、或ハ宕妃の報じ、

[和漢三才図会] 或書云伊弉諾尊桃子三箇と採て大整女と撃つ悪卒皆去、依て桃御と勅して名づけて、接威神高命と云、

○絳桃、緋桃、碧桃、金銀桃、源平桃、江戸桃、早桃、冬桃、一歳桃、毛桃、姉桃、西王母、油桃、日月桃、三千世草、等の種類共異名ホ、各頭字の部ニ付きて一尋、

### 木蓮花

[大和本草] 国俗、紫ものを木蓮花と云、花の色悪しく白きを白木蓮と云、白花と



花ハ蓮花ニ似たり、冬春ニ三月より四月ニ至る、

[酉陽雑俎] 木蓮花、葉ハ辛夷ニ似て、

## 正月

### 井花水

[紀事] 大和国、窪田箸尾の両村ニ千壽万歳と部、若水の条ニ出ス、

### 千壽万歳

[紀事] 大和国、窪田箸尾の両村ニ千壽万歳と云、両座あり、太夫所司の庭ニ来て鼓舞ス、窪田箸尾是ニ、都而南ニを、相去ること三里ばかり、此内両流あり、則窪田箸尾是ニ、窪田太夫箸尾太夫左部ニ、右部ニ准じてこれと称ス、

### 煎餅と繋

[紀事] 京師の俗、元日より晦日ニ至るまで、親て、部、天穿の条ニ出ス、

### 節振

### 舞節小袖

夕節 朝節 [紀事] 戚朋友互ニ酒食と設け饗應ス是と

### 生菜

も部、春盤の条ニ出ス、

節と云、節とハ節供の下略ニ而、節小袖も准て知べし、朝夕ハ饗應の時刻と云ニ、

## 兼三春物

### 芹

[本朝食鑑] 源順曰、水芹、一名水英、水早及び赤白の二種あり、水芹ハ味悪くして用ひず、白芹ハ味美ニハ平地ニ生じて根少し、赤芹ハ味悪くして根多く、早芹を、或ハ水田水圃ニ引と滋多くして常用ス、処々の陂沢田川ニ多くを、或ハ水中ニ生じて根多く、早芹養ひて、四時ともにとる、其莖節稜あり、中空にして其根細く長く肥ること、ハ素麪の如し、柔ニして脆く、其氣亦芬芳、愛ス

べし、五月小を白花と開く、

## 三月 生子と献ず

李沁傳、三月朔日、民間青嚢と以て百製瓜果の種と盛り、相問の遺そ、号して生子と献ずと、閭里宜春酒を醸して、句芒神と祭り、豊年と祈る、百官農書と進て、以て本と勢むると示す、今と暫くも、上丁日 公事根源 是八年ふ二度二月と八月とあるを、日蝕上巳と九日と三令節と子、釋奠 おなじ、続日紀 文武天皇国忌、祈年祭などあるは、中の丁日ゆゑとぞ、礼記王制 菜と択ぎ幣と奠太宝元年二月丁巳始て釈奠を行ふ、孔子及び十哲く、先師と礼ス、 大学寮 をを行ふ、太学察の影と祀る、上卿ハ少納言、文章博士、孝経、礼記、毛詩、尚書、論語、周易、左傳、年廻り 二日〇駿州阿部郡、浅間の祀ゝ、年中の祭祀、朝夷と撲ゝて八十三度あり、今ハ名目のミ存ス、ゆゑどもも二月廿二日の祭礼ハ今に至て厳重ゝ府中捻町ゟ、狂言猿物おと出ス、此日社の外ゟゝ簗と商ふ、近郷のその必ス買之、〇條文曰、今武ニ浅間祭を浅間祭ゝて、信州ゟ、信州浅間の別當ニ尋ゐ、二月ニ祭ル、四月八日始て山のロひらくと称して諸人恭詣スと、ゝ今武ニ信ぜ刂と記せるハ誤ゟり、

## 浅間祭 狗脊

蘇頌本経 狗脊、苗尖ゝ細ク、其色黒、長三四寸岐多ー狗の脊骨の如ー、

## 三月 青精飯 食の条

## 泉涌寺開山忌

洛の東山ゟ在中奥の開山俊芿ゞ忌を修ゝゝ、救書二云、俊芿字ハ不可棄、肥の後州鮑田郡の人母ハ藤原氏、生て数日樹下ゟ棄ツ三日と経ク禽獣の害ゟ、阿妹往ゝ祥児とす、抱き帰て母ニ付ス十八ゟゝ落飾、建久二年四月入来、五月の初来の江陰軍ニ着ス建暦改元年帰朝、嘉禄元年十月某の日、泉涌寺ゟおゐゝ、重閣講堂を建ゝ、明年の春、華構落成、嘉禄三年閏三月七日、右脇ーて逝ス、

## 善導寺忌

古日〇唐年六十二ゝ法会八日、或八九日ニ修スと云、悟真、光明善導大師の忌日ニ、隋の煬帝太業九年癸酉二当ゝ吾の高宗永隆二年三月十四日迁化ス春秋六十九歳、本邦東山禅林寺、永観堂、智恩院中の善導院小於谷 未詳 の限舟ゟの百万遍ゟの寺院ゟて以忌と修ゐゝ、

## 千本念仏

南、引接寺の閻ア堂ニ在、 紀事 是も又融通念仏の余流ゝ毎年堂前の普賢像の揚花むらゝと期と手、寺僧一技と折て、諸司

代に献ず、則米三石五斗とかや、又七ケ日念仏の料とも、一説に、此法事ハ元刑人の為にこれと修ス、故に諸司代より施米を是追薦の為にとぞ○開基定覚上人鐘の銘に顕然たり、定覚の事にハ遺教経の条に出、此処と千本とまことに八筥の窟の日蔵上人、冥土より約すること、其為に千本の卒都婆と、舟里山に立て供養を修す、此処舟里につづく依て名く、

**仙霊蕨** 千梅

**すが鳥** 雉子の異名、和漢故事要覧、秘蔵抄、あぢむらもみどりにて、鳥のごとくなる故名とす、

**杉菜** 大和本艸 春月先花と生ず茎の如く嫩き時吸ふべし、佳蔬なり、別に茎葉と生ず、杉菜と名く、杉の似たる、漢名いまだ詳ならず、

**末黒薄** 一説に春の野の焼くる跡に生ずる、墨黒の暑と又黷悪の薄ともいふ、頭髪の未黒の暑ともいふ、

**雀の子** は部、孕雀の条に出す、

## 三月

**須戸の御稜** 源氏物語須磨巻、やよひのつごもりになりぬれば、源氏君巳の日にあらそびし大海の原へ出給ひて、御祓し給ふ、是八源氏須磨に左迁の時、三月の朔日巳の日にて、浦辺にて舟に人形をとりて、祓の具と乗り、我除給ふ、

**李花** 事物異名 三月花さく、単弁、五出白色、和漢三才図会 形ち桃の似て味酸とすくなく、帯ぶ故に酸桃と称す、

**蕪坊の花** 宗奭曰、春紫花を開く、甚細碎、共に採て菜とす、花黒くて葉荒く、時珍曰、海島に蕪坊国あり、其地に此木と産ス故に名づく、和漢三才図会 倭に蕪坊の木あり、樹皮濃紫白色、葉薄く光あり、但し葉莖長く、三月花あり、淡紫、攅り生ず大さ麥粒ぐらい、莢と倍ず、状藤の子の似て小く、中に細ろ子を、春子と、擅にハ生ズ、然れども

## 二月

**すゐ** 狩の条に出す、

**兼三春物**

**渕蛤** 揚州住吉の渕を名、蛤多く漁者とりて売、

## 正月

**住吉の御弓** 十三日 住吉の御弓、其式社人正鵠を准へ、尺三寸の的と立〳〵、立合ごとに射、勝負と論ずるおゝ、神事ごとく、今日泰諸の諸人竹馬と昆布と買て土産ゝ、

**鈴子さ** 又堺の魚〳〵屋煎餅とそ、名物あり、各これと買ふ、

**犯事追加** 正月十三日 住吉の御弓、其式社人正鵠を准へ、尺三寸の的と立〳〵、立合ごとに射、勝負と論ずるおゝ、神事ごとく、今日泰諸の諸人竹馬と昆布と買て土産ゝ、又堺の魚〳〵屋煎餅とそ、名物あり、各これと買ふ、

**すゐ** 狩の条に出す、

**兼三春物**

**渕蛤** 揚州住吉の渕を名、蛤多く漁者とりて売

ゆゑ、大木をそ、故ゐ其汁物を染るや雪やとそゝぐ、雑談越和国ゐ生ずゝ紫荊花と、蜂色と染るそのゝ蘇枋と此そのゝ和ニ生ずるとゆゑ、俳諧ゐ紫荊花ゝん、董 処ゐ多く紫荊花ゐゝん、景戴菜ゐ似て、花ハ紫ゝ 和名抄 董菜 和名浜美礼、大和本艸 京都ニてハ相撲取と云、筑紫ゐてハ殿の馬とゑ、小児其花ニ鎚ある処と、両花相交へ引ゝ戯とす、相撲の形ゐ似ゝ、郡ゐて相撲取とゑ草ハ別あり、若水ニ紫花地丁、別号董と菜とゑ故ゐ国俗、董菜とす みきと誤り称ス、董菜ハ別ゝゑ

○壷董、つ部ゐ注ゼゑ、

## 追加 は 正月

**初烏** 初烏三ツ四ツゝゝハ 初空 千五百番哥合 今朝よりハ雪げの雲のおとゝてみぐりふるゝ春の初空 通具○ 金栗 初ふきやそゝけ牛の鞍、嵐雪、 **初風** 虚栗 初空や鳥とのちる 初空や鳥の嶋の空せ捱 嗒山、 **花の春** 花の咲春とゝ義あり○誰人ゝ著ていまゝそ花の春 芭蕉

兼三春

## 物

**春風** 炎の点ゐめぐゝを寒ゝ 春の風 許六、 **春の草** 名もしらぬ草や春の 松蔭や旭見ふや草荷分、 **春の海** 春の海不ト、 **春の川** 花散てうつゝめる体、雪きゝそて水まさりし体まぞよむべし、 **春の月** 負ゐり春の月 山の端とちゝ町、 **春の水** うつゝ〳〵鯰うきゐり春の水 舟泉、 **春の野** 春の野や木瓜ハむ〳〵ろの数 春の日の念佛ゐあそせ 沾徳、 **春の日** き野寺うゐ尚白、 **春の夜** 春の夜ゐ誰ゐり初瀬の堂籠 曽良、 **春の雪** 春の雪 文考、 **春の山** 月令博物筌 春ハ草木もさゐり、 **春の暮** 蚊ひろゐ祇らるゝ夜もで春の暮 重五、

## 二月

**初虹** 月令章句 夫陰陽和せぎ生ぜ、虹あらゝゝ青赤の色あり、常ゐ陰雲ゐ依て日衝ゐ見ゝる、雲ゐまゝバ

見ゆるまでを朝日と相互ひそ、ほ 正月 千燕、千日西と以て東方は見ゆる、大根 冬のまの部、新千燕新千大根の条を注しぬ、と 正月 年立つる 年の再びめぐり来るといふ義なり、年の花 続虚栗 年の花富士ハはが ゐる姿ゆゑ、霧塒、ち 正月 千々の春 千々の春其角、り 二月 龍登天 俗物論 龍春分にして天に登り、秋分にして淵に潜む、ぬ 正月 鬼打木 月令博物筌 大賀玉の木ともいふ、門松のうげの木ゝ年木とそ、正月始めに焼きさゝ木をとり、末は葉どのそ〳〵、門によせかけてやくなり、鬼打拂ふ木とよふことをもて、こゝに陳氣をそらふの義なり、 兼三春物 朧夜 一説ふ朧月夜ととをいゝ、朧夜とぞりハいとあはれなり、青藍按ずるふ和哥者流の説ふゝぞ、俳諧おそハ子細あるべし、既ふ作

例多〳〵 曠野 辛崎の松ハ花より朧おく〳〵 芭蕉、猿蓑 鉢たゝきこゝみ夜ともあれむ朧あり 去来、か 正月 かぐみ草 大内おて餅の上おおく大根といふ、早きさぐみ草やそこゝろふをあつる礼、かぐろと礼花 初百合 吾妻百合 山遺稿 其形も花も百合ふ似て花紫あり、葉ハ車前草ふ似ること、正月頃花さくゆゑふ初百合ともいふ、花の時葉ありて、因て姥百合ともいふ、万葉及び新撰六帖うゝのことの花と詠まる物ハ是ありとぞ、 兼三春物 風光る 初学記 春晴日出て風吹を光風といふ、こゝふよりてくわう此詞古抄云〳〵 利休 鹿文云利休嗅茶とハ倶ふ茶の香氣を嗅て其気味の善悪を辨ふるをいふ、茶人の所謂茶香服と称まる礼ハ、ふこと えぞ、三月 嗅茶

書藍云今の俗誤つて、蓬莱草と食つくつら故ふ
俳諧者流をまゝ同物と心得る者多し、むり食つて
と唱へ、今の重詰のさゞひまて賀客饗應の具あれ
ば連句あり、れらも食類の差合を繰べし、「食つくや山居の味をお
ほつおらて夫婦ゐ」嵐雪、「食つくや初柳屋」食つゝ、蓬莱、同物ふらね徴ハ「炭俵集」
春の部　蓬莱　きくらげや伊勢の初ごより　芭蕉云さ
て此句より、飾り松、箱の海老今朝の春、ふごめくり
五章つらゆさる後ふ食つくや木曽の旬ひの檜物
水云、同物ふらんハ蓬莱食つくと並べ出べきかく
隔てくるふてもるべし、但し木曽の旬ひの檜物とハ其器をいふふるべし、

**や　正月　宿の春**　遠近集　より年ゐ留守と

つくよ宿の春　路春、

**三月　藪蕎麦**　大和本草　林中ゐ多く生て、葉ハ苧の葉及び
萍麻の葉ゐ似くり、缺刻あり、莖ハ圓くして淡
紅色、節毎ゐ葉三つつくゝ節毎葉の上ゐ一處ゐ十餘
花わつまり開く、花の色淡紫小児花を吸ふ三月ゝ



皆不正の氣ト云云、

**よ　正月　四方の春**　よもをそゝをる春の気色の長り
ゆふ、

**た　正月　玉打**　きの部　球打の条見るべし、

**種芋**　種芋や花の盛りを賣あるく　芭蕉、

**三月　鷹の巣**　和漢三才圖会　鷹窩ふ生ずる者ハ常ふ立雙ぶ人家ふ育る者ハ好て眠ると木ふ巣ふ育る者を巣鷹とふ、

**れ　正月　礼者**　玉海集　春なち人ハつくぐふ礼者りれ　伯貞

**つ　正月　鶴の庖丁**　紀事　舞楽ゐまぶ始らざる前犬楽畢て後、雀高盛等の献ありて高橋隔年ふ交ることを勤む舞と賜ふ云ゝ、舞御覧の条ふ詳ふ、

**ね　十七日**　隅高橋隔年ふ交ることを勤む舞

**な　正月　若菜**　夏の追加葎茂るとゝる条ふ注ゝ、

**ら　正月　茄子植**　夏のふの部ふ注ゝ、

**む　二月　葎の**

**う　正月　食つみ**

花ひらく、

## 三月 柳太刀

青藍云此詞諸抄ふ載せざれど、四季子部類桃の節句、雛、柳太刀云云義未詳、但し諸抄の例ふゝゝば桃の節句又、雛、柳鬘と次序もべきさと、柳鬘を省きく此詞ふ替ふう、按ずるふ諸抄ふ載さる柳鬘やの部ふと省きく更ふ柳太刀と出もべき道理ふくふ、ば全く柳鬘の書誤てもるべし、さは、省くべきさふ、炙ふ費して辨ずるふく人の惑ひと解んに例の老婆心をう

## 正月 窓の春

むや窓の春野坡、萬歳五日

禁裡へ来ると千壽万歳ふ八せの部ふ注も〇一条院の御宇、大江の定基三河守ふ任じ、其民ふ佛教傳来の因縁と教へて舞しむ、町汁十日汁紀支十日の条

さり三河万歳の始もりとぞ、洛下の旧俗今朝毎ふうづらら膳食と會所ふ進ぶ此月頭人一汁と設く、これと汁會と称も、喫し畢さ法令と讀て教ふ、町中の男女此式を守る、五月九月同然云ゝ、

舞御覧十七日

紀事 清涼殿東の小庭ふ舞楽あり、

鶴の庖丁此時ふ、追加のつの部ふくべし、

## 松菜

敬花本 草醴蓬

一名塩蓬、水傍下湿の地ふ生ぜ茎葉ふ似て赤線拂あり、葉蓬ふ似て肥壮、蓬葉ふ比ぶれば亦稀疎、莖葉の間ふ青子を結ぶ、極めて細小中暑苗葉と採て煤き熟い水ふ浸し、鹹味とさゝ、淘洗浄め油塩ふ調ふ〇此詞四季部類ふゝ、ええう、

## 二月 路のもうとめ

路の姑芽の義

みて墓の立さるといふふくべし、天子集中ふ辺路のそうとめよりふぐさぎ道織

## 三月 蒲

## 菊花

秋の部ふ注も、

## 正月 こふがき祝ふ

青藍云増山の井若菜ふ条ふ云、昔ハ若菜と上の子の日ふ内藏寮並ふ内膳司より禁中ふ奉るふり、或ハ十二種供もるとありしよう、公事根源ふ侍り、今ハ在家七日ふ福ふうゝとそ、そふがきを祝ひ侍ると云く、今ハ在家ともそもとる文意をもて按ずるふ四季部類公事の部ふ糝七種のあつもの奉るとゝ云ゝ注ゝくるハ誤う、

此事、公事根源及び後水尾院年中行事ホうもうそぞ、且又糝とぞろ八當季を始ちぞ、祝ふの詞をそへて可よらんうそぬひ草ホ七日のそうけを出せり、和訓栞こまつがき、倭名抄餳をうめり、又糝をうめり、字書ヌ糝ハ深和義尺也とらひ、餳糝と又ハ粉菜摶雜るの義、米粉をうめく菜美と和そるあり、云こまづきとハ今の菜粥の事ぅ、

**三月　小櫻**　花うすき色密にて咲、鎧の小櫻威と云、物、此花の色ホうとどるもり、〇小櫻の花ぐ雨や具足親　重寛、

**て　正月　毬つく**　手まり壽年の

むじめふ幼女の詰びく盖

**二月　出替**　秋の部後の出替の

毬打ホふらつるそぐべし、

**と　正月　三ヶ日**　玉海集書初の真行草や三ヶ日　重員、

**里居**　數へを里居ともいハ、三の句ホ里居ホ或ホ

さとゐ

里居そるおぐ用うきん為ホ、作例をあけく

爰ホ贅も類柑子星合を中

の七日の里居うホ　切悠、

**二月　佐保姫鷲**

**ゐ　正月　遊行札切**　十六日遊行上人年中

諸人化益のため、一扁上人熊野權現より請らまゐ、遊行代ヶ相傳六字名号の印を、正月十一日ホ押そといふ、これを札切とらふあや、東都浅草日輪寺ホ〳〵問そうしふ札切と称まる事ありといふ、此詞四季部類ホ出、

**の　三月　きく茶**　追加かの部嗅茶

の条ぇるべし、

**ゆ　正月　遊行札切**　十六日遊行上人年中

諸人化益のため、一扁上人熊野權現より請らまゐ、遊行代ヶ相傳六字名号の印を、正月十一日ホ押そといふ、これを札切とらふあや、東都浅草日輪寺ホ〳〵問そうしふ札切と称まる事ありといふ、此詞四季部類ホ出、

**み　正月　御代の春**　題黄金「目ホハらぎ一万枚を御代の春　其角

**ひ　正月　蘗**　草ホあるものふあらぎ、木の切株よ

細き芽を生ずるを、蘗といふと記せり、此説あしき

あらんと思ひふ、新古今曽称好忠の哥ホ「あら小田の去年の古根のふる蓬今ハ春べとひとそえおそる」是蓬のひこばえ、然れハ草本ともホ蘗の名目あり、



やうふむむかし　つけ羽　徳元、

**き　三月　きく茶**　追加かの部嗅茶

の条ぇるべし、

**ゆ　正月　遊行札切**　十六日遊行上人年中

諸人化益のため、一扁上人熊野權現より請らまゐ、遊行代ヶ相傳六字名号の印を、正月十一日ホ押そといふ、これを札切とらふあや、東都浅草日輪寺ホ〳〵問そうしふ札切と称まる事ありといふ、此詞四季部類ホ出、

**み　正月　御代の春**　題黄金「目ホハらぎ一万枚を御代の春　其角

**ひ　正月　蘗**　草ホあるものふあらぎ、木の切株よ

細き芽を生ずるを、蘗といふと記せり、此説あしき

あらんと思ひふ、新古今曽称好忠の哥ホ「あら小田の去年の古根のふる蓬今ハ春べとひとそえおそる」是蓬のひこばえ、然れハ草本ともホ蘗の名目あり、

三月 緋櫻（ひさくら） 小輪ありて莖長くさま〴〵蕾甚こ赤し

らん高根ふ立るひ 新撰六帖 夕つく日うつろ〳〵雲やゆ〴〵

さくらの花 光俊、

より三日ふ至つと民間門戸（かんこ）を 紀事京俗元日

掩（おほ）ふ心ふ福神を出さぬ為こ而こ

汪ふ

不及

二月 西瓜時（まくわうりのとき）

# 増補歳時記栞草春之部終